

# オーバーロード 最強 の拒絶タイプ

など～

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

DMMORPG ユグドラシルにギリギリでログインしたのはエヴァンゲリオン新劇場の第10使徒!? モモンガさんやナザリックのNPCと共に、異世界で大冒険します！

オーバーロードにエヴァンゲリオン新劇場版の第10使徒をぶち込んでみた話です。出てくるのはエヴァンゲリオンの使徒だけです。

処女作で、小説書くのは初めてです。暖かい目で見てやって下さい。

質問、感想、批評、なんでもどうぞ。

# 目次

使徒、復帰 | 1

使徒、復帰 | sideゼルエル | 7

使徒、困惑 | 14

使徒、爆破 | 22

キャラ設定 | ゼルエル | 30

使徒、会話 | 37

使徒、頭痛 | 45

使徒、鑑賞 | 55

使徒、襲来 | 68

使徒、散策 | 81

使徒、戦闘 | 88

幕間 ナザリツク守護者会議 | 105

使徒、決定 | 119

使徒、捕食 | 132

使徒、前兆 | 148

新伝説 モモン・ザ・ダーク・ウォリア | 165

新伝説 モモン・ザ・ダーク・ウォリア | 165

その2 | 183

使徒、遭遇 | 206

使徒、放射 | 229

## 使徒、復帰

DMMORPG 〈ユグドラシル〉

かつて一大ブームを巻き起こしたこのゲームも、もうすぐ終わりを迎えようとしていた…

「楽しかったんだ…」

弱々しい声で今までの事を思い返すのは、ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』のギルド長、モモンガだ。

『アインズ・ウール・ゴウン』はギルドメンバーが全て異業種で構成されており、その異業種の救済を目的として作られたギルドだ。全盛期はランキング9位までのし上がり、非公式ラスボスとまで言われたDQNギルドだった。

PM 11:57

「はあ…あと、3分か…」

モモンガはため息をつきながら、迫り来るサービス終了の時を待っていた。

(最後はみんなと一緒に迎えたかったな…)

それは我が儘だと知りつつも、思わずにはいれなかった。

(せめて、一人くらい…)

モモンガが自分の我が儘を、尊敬するギルドメンバーに押し付けてはならないと、考えを否定しようとした瞬間、一つの通知が届いた

「ギルドメンバー「ゼルエル」がログインしました。」

「うおおおおお！間に合ったー!!?」

「えっ」

ログインと共に雄叫びをあげたギルドメンバーに対し、思わず変な声をあげてしまったモモンガ。

「あつ、モモンガさんお久しぶりです。遅くなり、申し訳ありません！」

「ゼ、ゼルエルさん!？」

かつてのギルドメンバーが共に最後を迎えてくれる。それはモモンガが思い描いた最高のラストだ。最後に自分の願いを叶えられて、思わず泣いてしまいそうになったが、ふと見た時計の数字に思わずギョツとする。

P M 11:59

「ゼルエルさん！もう時間がありません！私は今、玉座の間にいます！」

「マジか！やべえ、すぐそっち行きますから待っててください！」

思わず、数分前の自分の行動を後悔する。最後だからと玉座の間に移動したのは間違いだった。円卓の間で待っていれば最後に顔を見る事ができたのかもしれないのに。

「ゼルエルさん！こっちでも移動します！」

「大丈夫ですよ！今、アイテム使って、そっちに向かっていますよ！」

.....5

.....4

.....3

.....2

「モモンガさーん!!？」

「ゼルエルさーん！」

玉座の間の大扉を勢いよく開けて、飛び込んで来たのは、まるで大きな繭に仮面を付

けたような異業種、使徒「ゼルエル」だった。まるでハリウッドダイブさながらに飛び込んで来たゼルエル。このままいけば玉座の間の床と熱いキスを交わすだろう。しかし、時間がそれを許さない。

(ありがとうございます。ゼルエルさん。)

モモンガは最後に会うことができた友に感謝の気持ちで一杯だった。

……………1

……………0

強制ログアウトの為、目を閉じ、視界が真っ暗になった。

ドサッ



ん？何か物音がしたな？

モモンガは恐る恐る目を開けると、そこには……

最後に見た玉座の間、否

黒い繭セルエルが入り口で倒れている玉座の間があった。

「えっ!？」

玉座の間に素っ頓狂な声がかぐやました。

## 使徒、復歸 sideゼルエル

私の名前は碓<sup>いかり</sup>レイ。男性だ。間違っても女ではない。よく、名前が女性っぽいとか、話し方が女性っぽいとか、言われるが、男だ。

私は今、全速力で走っている。目的の場所は勿論、自分の家だ。ただし、帰る目的は少し恥ずかしいが…

「クソ…あのクソ上司が！」

怒っている理由は言わずもがな、自分は仕事をほとんどしなくせに、有休中の部下にまで仕事を出してくる、最低の上司だ。

そう、本当は今日は有休を取っていたのだ。ユグドラシルのため、アインズ・ウール・ゴウンのため…

しかし、朝に上司から「来てくれないか」と言う名のお願<sup>命</sup>いをされ、朝から夜遅くまで働かされていたのだ。

どうやっても解放してくれない上司を「大切な人<sup>ユグドラシル</sup>が死<sup>サービス終了</sup>にそうなんです！」と嘘のような本当の事（ウソです。）を言って、残業を丸投げして、家に帰っているのだ。

「ああもう、早くしないと！」

ここ数年、遠い場所に転勤になって、全くログインしておらず、最後の日に有休を使つて、一日中、ユグドラシルに籠つていようと思つていたが、上司のお願いのせいで、サービス終了直前まで引き伸ばされてしまった。

「早く早く早く早く早く早く早く!!?」

溜まつていたアツプデートが完了し、懐かしのアバターが出現する。

黒い繭に仮面を付け、肩の部分は黄色い丸い物が付いている、『エヴァンゲリオン新劇場版』の第10使徒だ。プレイヤー名は「ゼルエル」

種族は天使の上位種族『使徒』だ。

種族『使徒』は異常なまでのビルド構成の難易度とPK時の獲得ポイントの多さゆえに、異業種狩りの代表格であり、私も最初は異業種狩りに頻繁にあつた。その時にギルド《アインズ・ウール・ゴウン》に出会い、私がLV. 100になるまで、数え切れない支援を受け、いまや《アインズ・ウール・ゴウン》では2番目に強いプレイヤーとして名を馳せている。

えっ、1番強いのは誰だつて？ たっち・みーさんです。ワールド・チャンピオンはチー  
トだよ。(泣)

とりあえず、アップデートも終わって、円卓の間に出た。久しぶりのナザリック地下大墳墓だ。

「うおおおおお！間に合ったー！！？」

思わず叫んでしまった。しかし、仕方のないことだ。私にとって、ナザリックはみんなの思い出の結晶であり、守るべき場所なのだから：

ふと、周りを見ると誰もいない。思わず、コンソールを開いてログイン状況を確認したら、我らがギルド長：モモンガさんがいるではないか。

「あつ、モモンガさんお久しぶりです。遅くなり、申し訳ありません！」

まったくだろう。ギリギリでログインして、危うくモモンガさんを一人で終わらせるところだった。

「ゼルエルさん！もう時間がありません！私は今、玉座の間にいます！」

「マジか！やべえ、すぐそっち行きますから待っててください！」

しまった！つい、久しぶりのナザリックにうかれて、時間の事を忘れていた！なんでモモンガさんが玉座の間にいるのか気になるが、とりあえず移動だ。『使徒』は常に《浮

遊』しており、決してスピードは速くない。

「ゼルエルさん！こつちでも移動します」

モモンガさんが移動を開始しようとしているが、玉座の間に移動したのには考えがあるのだろう。ならばこちらが最速で行く必要がある。

アイテム《最速の星／スピード・スター》、使った対象のスピードを一時的に限界まで引き上げるアイテムだ。

「大丈夫ですよ！今、アイテム使って、そっちに向かっていますよ！」

今出せる最速のスピードで玉座の間に向かう。流星課金アイテム、あつという間に玉座の間の大扉についた。

おもきつきり、扉を開ける。

「モモンガさーん！」

「ゼルエルさーん！」

（ありがとう、モモンガさん…）

玉座の近くにいるモモンガさんを見て、思わず感謝の言葉が出る。そして、ハリウツドダイブで飛び込んだので、もうすぐ顔をぶつけるだろう。

しかし、私は幸せだ……本当に楽しかった……

ドサツ！

玉座の間に音が響いた。そして私は顔の痛みに襲われた。

(えっ)



私、  
ゼルエルは床に倒れていた。

## 使徒、困惑

sideゼルエル

おかしい。私は超ギリギリで玉座の間にたどり着いて、強制ログアウトと同時に、ハリウッドダイブしたのだ。つまり、目を開けたら自分の部屋で倒れてるはずだ。

なぜ、玉座の間で倒れているんだ？

目を開けたら、そこには赤い絨毯がある。私の家にはそんな高級品ないぞ。ここはナザリツクの玉座の間？なぜログアウトしてないんだ？

頭の中に？の文字が浮かんでいたら、突如、老人の声が響いた。

「大丈夫でございますか？ゼルエル様！」

(えっ?)

モモンガさんの声じゃないし、一体誰が?

顔を上げるとそこには……

ナザリック地下大墳墓の執事、セバス・チャンがこちらに駆け寄ってきていた。

(ええええええええええ!!??)

s i d e o u t

s i d e  
モモンガ

モモンガは困惑していた。

最初はサービス終了の時間になってもログアウトされず、ナザリックの玉座の間にいたこと。そして、そこにゼルエルさんが倒れていたこと。

しかし、モモンガが最も驚いたのはNPCであるセバスが勝手にゼルエルさんを助けた事だ。

通常、NPCは決められた動作しか設定していない。しかも、今セバスには『待機』の指令を出していたはずだ。与えた命令を無視して動くことは無いし、ましてやゼルエルさんを起き上がらせるという命令を出していないのに自発に動いている。こんな事はありえない。

「セバスよ。」

ひととおり、ゼルエルさんを起こしたセバスに向かって、言葉を発する。

「はっ！」

「なぜ、ゼルエルさんを助けようとした？」

瞬間、あたりの空気が豹変する。プレアデス達は驚きの表情でこちらを見ているし、隣にいるアルベドは天使のような微笑みを豹変させ、憤怒の目でセバスを見ている。当のセバスは姿勢を固くして、ひれ伏している。ゼルエルさんは…顔が変わらないからわからん。

「はっ、至高の御方であらせられるゼルエル様が床に倒れ、動かなかつた為、手助けをさせていたいただきました。」

「ふむ…」

定められている命令以外の事をして、それに対する答えも返してきた。こんな事は通常のAIでは不可能だ。つまり、これはNPCが自我を持つて動いてるという事か？

「セバス、モモンガ様のご命令を無視して行動した罪は重いわ。恥と知りなさい！」  
(えっ?)

いきなり、隣のアルベドが言葉を発する。

(なんで、怒る必要があるんだ?)

「待て、アルベド。セバスの行動は我が友ゼルエルさんを助けようとして、起こったこと。別に私は気にしていないぞ。」

「っ!!? 申し訳ございません、モモンガ様。その深き慈悲に感謝いたします。」  
周りの雰囲気が一気にほころんだ。なんか、大丈夫そうだ。

そういえば、ゼルエルさん、何も喋ってないけど、どうしたんだろう？

ふと、ゼルエルさんを見ると、なんかすごいオロオロしてた。



またモモンガに？が増えた。

s i d e o u t

s i d e ゼルエル

私、ゼルエルは一瞬触発な空気の中で、一人、困惑していた。それもそうだろう。な  
んたって……………

喋れないのだから！

なんで喋れないの!?!?というか、呼吸もしてないんだけど！なんでなんでなんでなんででなんで?!?!?

めっちゃオロオロして周りの状況確認をしていたら、頭に何かが入ってきた。

「ゼルエルさん、聞こえますか？」

「うおっ！びっくりした！ん？その声はモモンガさんか？」

「はい、今、《伝言／メッセージ》使って話しかけてます。どうしましたか？」

「あー、うん、なんか言葉が喋れないんだよね。呼吸もしてないし。」

「えっ、それってまずくないですか？」

「うーん…、大丈夫だと思うよ。なんか元気だし。」

「悠長なことを…、まあこれからどうします？NPCは私達に忠誠を誓っているようですけど……これから地表付近の探索に行かせますか？」

「いいんじゃないですか？見た感じ、ユグドラシル2つて感じじゃないですしね。」

いうが早いから、モモンガさんはセバスとプレアデス、そしてアルベドにそれぞれ指示を出した。いきなりモモンガさんがアルベドの胸を揉み出したときには、頭を叩こうかと思っただが、しばらくしたら冷静になったらしい。なんか緑色に光っていたが、なんだったんだろう。後、アルベドがなんかヤバイ。

アルベドに階層守護者全員に第六階層に集合するよう命じて、玉座の間に二人つきりになった。

「さて、モモンガさん。いろいろ聞きたいんだけど、これからどうする?」

「とりあえず、魔法の実験をしたいですね。この世界でも魔法が使えるか試したいですし。とりあえず、スキルは問題なさそうですね。」

「マジか。じゃあ俺は大丈夫だな。」

「そうですね。でも、他のNPCはどうなんでしょう? 注意して行きましょう。」  
〔了解〕

話せないのだから《伝言／メッセージ》を使って会話する。はたから見たら、無言で顔を合わせるガイコツと黒い繭だ。

とりあえず、リング・オブ・アイアンズ・ウール・ゴウンで第六階層へ転移するために、人型になる。これで装備ができる。



さて、第六階層守護者はダークエルフのアウラとマーレか。どうなることやら……

## 使徒、爆破

sideゼルエル

さてさて、第六階層に指輪で転移した私とモモンガさん。私はそのまま、指輪をアイテムボックスに入れて、繭の形態に戻る。

「わざわざ、戻る必要があるんですか。」

「いや、何かあった時、この形態なら大丈夫でしょ。」

繭の形態は素の防御力が高いので、奇襲されても大丈夫だろう……多分……

「多分……」とか考えてませんよね。」

「ははは、ソナワケナイジヤナイデスカ」

「全く、一番脆いのはあなたなんですからね。慎重に頼みますよ。」

「はい。」

なんか、モモンガさんがお母さんみたいになってるが、言ってることは正論だ。慎重に第六階層の円形闘技場に入って行く。

「とうー！」

来たか。

「モモンガ様、ゼルエル様、ようこそ、私達の第六階層へ。」

「うむ、邪魔するぞ。」

「邪魔などとんでもない。ナザリツクの主である御二方を邪魔扱いするモノなどおりません。」

とりあえず、話はモモンガさんがまとめてくれるだろう。しかし、長い間留守にしていたのに、なんの躊躇いもなく歓迎してくれるな。ちよつと怖いぞ。おつ、マーレも来たな。うくん、やつぱり二人はかわいいいな。結構、私の好みドストライクだからねーつと、危ない危ない、危うくロリコンペロンチンになるところだった。今は実験、実験

side out

sideアウラ

第六階層に誰が入ってきたようだ。人数は二人。警戒はしとかないとね。扉が開い

て、入って来たのは……しつ、至高の御方のモモンガさまとゼルエル様!!?ゼルエル様はご帰還なされたのですね!思わず涙が出てしまった。とつ、いけないいけない、モモンガ様やゼルエル様にこんな姿を見せられない。

それに、ゼルエル様はナザリツクを深く愛してらっしやる。我々シモベが、ゼルエル様のご帰還を祝福するのは、ゼルエル様にとつては当たり前の事を祝福されるのと同じこと。それは不敬になるよね。純粹に第六階層に来た事を感謝しなくちゃ!あつ、マーレにも知らせないとね!

s i d e o u t

s i d e ゼルエル

どうやら、モモンガさんの魔法の実験は成功したようだ。スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンから《サモン・プライマル・ファイヤーエレメンタル／根源の火精霊召喚》を発動させて、プライマル・ファイヤーエレメンタルが召喚された。LVは80後

半か。肩慣らしにはちようどいいな。

「モモンガさん、こいつは私が。」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。スキルは普通に使えますし、こいつなら、何かあっても、一撃じゃ死にませんから。」

「……そうですね。じゃあがんばってください。」

少し心配しすぎだと思うが、まあいつか。んじや、久々に行きますか。

「プライマル・ファイヤーエレメンタル、ゼルエルさんを攻撃せよ。」

プライマル・ファイヤーエレメンタルが攻撃を仕掛ける。しかし、避ける必要は無い

…

ガキイイイイイン!!?

『使徒』の主要スキル、《A・Tフィールド》がすでに展開されているのだ。

《A・Tフィールド》は使徒だけに許された盾であり、これによって、『使徒』という

種族は強者となっている。A・Tフィールドはあらゆるモノを防ぐ。魔法だろうが、斬撃だろうが、衝撃だろうが、この盾の前では全て防がれる。

プライマル・ファイヤーエレメンタルはA・Tフィールドを避けるように攻撃してくる。しかし、残念。A・Tフィールドはすでに私の周りに張り巡らせてある。炎ダメージもA・Tフィールドで防ぐので、未だ私はノーダメージだ。

今度はこっちの番だ。浮遊して、私のメインにして最大火力、『破壊光線』のスキルを放つ。

カツ!!?

ドツゴオオオオオン!!??!!??

(!!??)

side out

sideマール

お姉ちゃんからゼルエル様のご帰還なされたと聞いた。最初はご帰還をお祝いしようと思ったけど、お姉ちゃんから「ゼルエル様にとって、ナザリックへのご帰還は至極、当然の行為だから、祝福するのはかえって不敬だよ。」と言われたから、ゼルエル様にはご挨拶だけして実験のお手伝いをした。

ゼルエル様がモモンガ様が召喚したモンスターと戦うみたいだ。至高の御方の戦いを見れるなんて、幸せだなく。

しかし、ゼルエル様はお強いなー。ボクだと、あんなに大量のシールドを張れないよ。さすがは至高の御方。

ドツゴオオオオオン!!?!!?

「あつ」

「さ、さすがはゼルエル様！」

「す、素晴らしいです！」

ゼルエル様がモンスターを爆破して、消滅させたようだ。モンスターがいた場所はとでも大きな穴ぼこができています。思わず、モモンガ様も声をあげてしまったご様子だ。

ん？ゼルエル様がこっちに向かって来ている。そして………!?、頭を下げた!?、な、なんでゼルエル様が!??

「ど、どうなさいましたか？ゼルエル様」

「な、なにか不都合がございましたか？」

なにか、ボク達の知らないところで、不備があつたのだろうか？お姉ちゃんも思わず冷や汗を流している。ど、どうしよう？



「あー、2人共、ゼルエルさんは闘技場に大きなクレーターを作ってしまった事に対して、謝罪しているようだ。」

「!? モモンガ様から言われた衝撃的なお言葉!なんと、至高の御方の戦いを見せていただく事に比べれば、あんな穴ぼこなど、全く問題ありません!」

「だ、大丈夫です!ボクの魔法で綺麗にしておきますから!」

「そ、そうです!私達に任せてくださいれば、すぐに修繕しておきますから!」

お姉ちゃんも2人で必死にフォローする。しばらくすると、ゼルエル様は立ち上がって、どこかに転移してしまった。

「あー、ゼルエルさんが「マジですまない」だそうだ。」

モモンガ様のお言葉がボク達の心に深く刺さった。

side out

# キャラ設定 ゼルエル

## ○基礎情報

プレイヤー名：ゼルエル

本名：碓　　レイ

性別：男性

種族：使徒

カルマ値：—10（中立）

種族レベル

天使　　LV・15

大天使　LV・15

神ロゴスの子　LV・15

使徒　　LV・15

使徒（覚醒） L V. 10

職業レベル

シールド

盾使い L V. 15

タンク

盾役 L V. 15

合計 L V. 100

○スキル

◇バツ常時発動型シスキルプ

・上位物理無効化、上位魔法無効化

・生命の実言わずと知れたスキル

・S2生命の実機関

毎秒、HPの半分を回復し続ける。さらに、回復阻害のデバフも完全無効化し、地形・環境ダメージを無効化する。デメリットとして、赤いコアが生成されるようになり、これには、このスキルの恩恵が得られない。コアは非常に脆く、第十位階の魔法なら一撃で破壊可能。コアを破壊されると即死し、高位の蘇生魔法でも復活できず、蘇生には高位の蘇生アイテムが必要になる。

・不屈の精神、往生際の悪さ、悪あがき

どんな状況でも、HPを1だけ残すスキル。通常は重複不可だが、《ウィツ シュ・アポン・ア・スター／星に願いを》で、重複させている。これによつて、3回はHPが1でも耐えられるようになっていいる。これはコアにも影響があるため、ゼルエルを倒すにはコアに4回以上致命傷を与える必要がある。

### ◇発動型スキル

・A・Tフィールド

最強の盾。魔法、物理攻撃などの攻撃を全て防ぐ。ゼルエルは種族レベルが高いため、最大100枚のA・Tフィールドを展開できる。当然、重ねれば重ねるほど強固になり、破壊が難しくなる。A・Tフィールドの破壊、または通過には、A・Tフィールドによる中和、高火力な攻撃、防御無視の攻撃、世界級アイテムによる攻撃などがあるが、世界級アイテム以外の攻撃は展開する枚数を増やせば防ぐことができ、100枚のA・Tフィールドを一度に破壊、通過する攻撃は無い。

A・Tフィールドの目安としては

世界級アイテム >>> 100枚 > 50枚 || 次元断絶 > 30枚 || 現断 > 10

枚 ≧ 第六位階魔法まで防御

となる。弱点としては、A・Tフィールドは一度展開したら、約5秒間、展開し続ける。それまでは展開できる枚数が減るため、調子にのつて展開しまくると、肝心な時に

展開できなくなる。

・破壊光線

超強力な不可視の破壊光線。その威力は超位魔法にも匹敵する。対物、対人どちらにも使え、射程は視界に入っている限り。これといった制約もないため、ゼルエルはメインとして、乱発していた。ちなみに、爆破するタイプと貫通するタイプで使い分けられる。エヴァ的には登場時に撃っていたのが爆破タイプで、初号機の腕を吹っ飛ばしたのが貫通タイプ。

・ベルトアーム

ベルトアームを発射する。本数は4本。威力は第五位階程度だが、強力な拘束効果を発揮する。また、転移後はベルトアームを引っ張って、高速移動できるようになった。繭形態時には防御力を上げるのに一役買っている。

・コアシールド

一撃だけ攻撃をコアに通さないようにする。連続使用はできないが、先のスキルと相まって、非常に強力なスキルになっている。

・形態変化

3つの形態に変化できる。

第一形態

新劇場版で初めて登場した容姿。装備品を装着することができない上に、ベルトアーム、コアシールドも使用不可。しかし、素の防御力が超向上している。

## 第二形態

新劇場版でジオ・フロントに侵入した時の容姿。ベルトアーム、コアシールドが使用でき、単純な攻撃力なら最高値。しかし、装備品は装着できない。

## 第三形態

綾波レイを捕食した後の容姿。第二形態の攻撃ができ、装備品を一部だけ装着が可能であり、ある意味最強の形態。ちなみに基本半裸だが、あまり気にしていない。しかし、ベルトアーム使用時に腕に付けている装備品は捨てる扱いになるので、拾われたら大変なので扱いが難しい。

## ○戦闘スタイル

盾役として最前線に立ち、味方に攻撃が通らないようにする。時折、狙撃手や集団に破壊光線を撃つて、敵を攪乱し、殲滅する。また、スキルのしぶとさも相まって、なかなか前線から退かない。また、盾使いの攻撃に《シールド・バツシュ／盾殴り》があり、（これは盾の防御力を攻撃力に置き換えて攻撃できるもの）新劇場版のようなA・Tフィールドによる圧殺で大ダメージを与えていた。弱点は暗殺と一対多数、対ワールド・チャンピオンであり、とくに一対多数にはトラウマがあるらしい。

## ○経歴と性格

自分の名前からエヴァンゲリオンにはまり、そのままユグドラシルにもはまった。『使徒』ゆえの異業種狩りに遭い、心が折れかかっていた時に、ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』に出会い、ギルドメンバーの協力の元、LV. 100に到達する。しかし、1、2年前に転勤と会社がブラック化し、ユグドラシルから離れるも、「必ず戻ってくる」と、死亡フラグを立てて去っていった。なんとかサービス終了に間に合わせ、モモンガと共に異世界へ。

性格は温厚で滅多に怒らないが、異業種狩りやギルドの侮辱行為にはブチ切れる。報復は相手の心を弄んで、心を折つた後、叩き潰す(物理)。この性格からギルドメンバー全員と仲が良く、たっち・みーと正義執行了たり、ウルベルトや、るし★ふぁーと悪行をしたりと、かなり珍しい立ち位置にいた。また、先の経歴により、ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』に並々ならぬ恩義を感じており、ギルドの存続を第一に考えており、ナザリックに反逆するものは例えNPCや有益になる人物でも殲滅する。

人間に対しては良い意味でも悪い意味でも無関心。有益ならばそれなりの待遇で迎えるが、使えなくなればすぐに切り捨てる。なんの価値も無い人間にはなにもせず、こちらの生物と同一視している。これは使徒化の影響で、生命として完成しているため、たとえ悪魔(野良)と人間を並べても、どちらにも傾かない。逆に虫に対してもそれな

りの感情があり、<sup>ゴキブリ</sup>Gでもなんなら変わらず接することができる。

### ○NPCについて

”ナザリックを支える最高の存在”と考えており、間違っても”かつてのギルドメンバーの残した子供達”という考えはもっていない。そのため、もしギルドの存続に関わる様な行動をしたら、迷いなく殲滅する。しかし、NPCにはかつてのギルドメンバーの面影があるため、それなりの慈悲をかけたなり、NPCの個性を認めている。

また、創造したNPCが2名いるが、詳細は伏せる。

好きなNPCはシャルティア、アウラ、マーレ等の比較的幼い見た目がタイプであり、ペロロンチーノが「同土よ」と言われているが、あくまで保護欲がくすぐられるため、ロリコンではない（本人談）と言っている。（ちなみに周りからはロリコン予備軍と言われている。）メイドのような”三歩下がって後ろを歩く”タイプは結構好みであり、メイド好きでもある。特にプレアデスのユリは結構好みストライクであり、やまいこさんと「娘にください！」というお願い<sup>決</sup>をして、「娘じゃなくて専属メイド」で決着した。（ちなみに決闘の勝敗はやまいこさんが勝ち、ゼルエルは「母は強し<sup>モンスター</sup>と言って散った。」ちなみに、嫌いなタイプは自分の意見を押し付けるタイプ。



## 使徒、会話

side ゼルエル

やってしまった…

守護者にかっこいいところを見せようと、ちよつと強めの破壊光線ぶつ放したらプライマル・ファイヤー・エレメンタルをオーバーキルしてしまったばかりか、闘技場の地面にクレーターを作ってしまった…

とりあえず、モモンガさんにアウラとマーレに謝罪の言葉を伝えてもらって、今、私は宝物殿に来ている。目的はもちろん、アイテムだ。しかも、超々レアアイテムだ。もちろん、モモンガさんには伝えてある。(宝物殿に行くことだけが…)

とりあえず、奥の方に行こう。奥にはパンドラズ・アクターがいるはずだが…

タブラさんがいた。いや、違うな。

「これはこれは、ゼルエル様。いかあがなされましたか？」

やっぱり、パンドンモモンドラズ・アクター黒歴史だったか。相変わらずだな。とりあえず、喋れないので身振り手振りで「気にするな」と伝える。

「よくわかりませんが、至高のおおん方であられるゼルエル様に、間違い等ございませ  
ん。我々は至高のおおん方に忠義を尽くすだけでございます。」

まあ、気にしないのなら大丈夫だろう。さて、この辺りにアレがあるはず……おつ、

あったあった。これならNPC達とのコミュニケーションも完璧だな。

しかし、どうせだ。モモンガさんにちよつとイタズラしてやろう。ふふ、楽しみだ…

side out

sideモモンガ

階層守護者が集結したが、ゼルエルさんがまだ戻ってこない。さつきから伝言メッセージを送ってるんだけど、一向に無視されてる。さて、どうしたものか……

ドオオオン！

なんだ!?!? 敵か!?!? くそつ、こんな時に!

ん? ゼルエルさんじゃないか。どうやら、第六階層の上に転移して落ちてきたらしい。全く人騒がせな……………

〔ゼルエルさん! 何してたんですか?〕

〔……………〕

また無視してる…全く何を……………!?!?

ゼルエルさんの第三形態の左手の薬指に流れ星の指輪シューティング・スターがはまって、なんか顔を背けて照れている!!?

side out

side ゼルエル

ふふふふ、さすがのモモンガさんでも困惑しているだろう。なんとたつて見た目は半裸の女性（変な仮面を被っている）が薬指に指輪をはめて、恥ずかしがっているのだ。さあ、どうするモモンガよ！ここで断れば男がすたるぞ！さあ、どう出る！



いる。

「んっんー！これから、少し実験を行いたい。すまんが少し待ってくれんか？」  
「「「ハッ」」」」

という訳で、指輪を発動させる。

(さあ、指輪よ。私を会話可能にせよ!!?)  
魔法陣が展開し、光が辺りを包む。

「あーあー、聞こえるか？みんな？」

オオオオオ！

「聞こえますよ！ゼルエルさん！」

やったぜ。やっと会話できる！さて、まずは……

「さて、私、ゼルエルはナザリックに帰還した！」



## 使徒、頭痛

## 第六階層・円形闘技場

「す、すごく怖かったね、お姉ちゃん。」

「う、うん……」

たった今、転移した主二人に対し、闇妖精の双子が率直な意見を述べる。それを皮切りに、他の守護者達も言葉を発する。

「あれが支配者としての顔をお見せになったモモンガ様なのね……」

「ですね……我々の忠義に答えて下さったのでしよう。今後とも忠義に励まなくてはいけませんね。」

「ウム、ゼルエル様カラモ庄倒的ナ力ヲ感ジトレタ。流石ハ至高ノ御方ダ。」

「全くでございます。さらに我々に対する海の底より深き慈悲の心には、思わず涙が溢れてしまいました。」

ゼルエルはセバスとアウラ、マーレにそれぞれ、助けてくれた礼と、クレーターの謝罪をしておいたのだ。

「全くだね。しかし、その御方の慈悲に甘えてはいけないよ。セバス、アウラ、マー

レ。」

「当然でしょ！至高の御方に対する不敬を私達がすると思ってるの？」

「確かに…すまない、愚問だったね。」

ゼルエルとしては当然の事をしただけなのだが……

「しかし、アルベド。あの醜態はなんだね。」

アルベドはゼルエルが指輪を見せた時、周りの守護者がドン引きしかける程の顔とオーラを出していた。

「ごめんなさい。つい、モモンガ様に不敬な格好をお見せするところだったわ。」

「謝るのはモモンガ様とゼルエル様だ。それに君ならあの行為が至高の御方の御戯れだと、気付くだろうに。」

「本当にごめんなさい。つい、我を忘れてしまうところだったわ。それに偉大なるゼルエル様なら、私如き、気にも止めないでしょう。」

「……………だとよろしいのだが…」

デミウルゴスはアルベドの不敬ともとれる考えが気に食わなかったが、ゼルエルが気にも止めなかったのは事実だ。ここで蒸し返しのはゼルエルに不敬だと考え、それ以上言及しなかった。

「ソウイエバ、シャルティア。サツキカラ動カナイガ、ドウカシタノカ？」  
思わずコキュートスの言葉に守護者一同、シャルティアに顔を向ける。

「いや、モモンガ様のオーラに当たって、すこし下着がマズイことになってありんす  
…」

「……………」

「このビッチが…」

「はあ？モモンガ様からあれだけの力の波動、ご褒美を頂いたのよ！それで濡りんせん方がおかしいわ大口ゴリラ!!？」

「ヤツメウナギが！」

「あー、アウラ、君に任せたまよ。」

「ちよ、デミウルゴス！私に押し付けるつもり!!？」

「もし、大変だったら止めに入るよ。」

正妻戦争、ここに勃発である。

「全くあの二人は分かってないな。」

「ど、どういう事ですか?」

「ああ、偉大なる御方の後継は必要だろうか?最後まで残られたモモンガ様と、ご帰還なさったゼルエル様。お二人もいずれ、”りある”と呼ばれるところに旅立つかもしれない。そうなったら、我々に忠義を尽くせる方を残して下さるかもしれない。そうなったら、最も適任なのは、至高の御方のご子息だ。このナザリツクで最も尊きご子息となるのは、モモンガ様とゼルエル様のご子息では無いのかな?」

「オオ、遂二、爺トオ呼び下サルノカ!アー、ボツチャマ、爺ガ肩車ナドヲ……」  
「で、でもゼルエル様は男ではありませんか?」

「確かに。しかし、ゼルエル様はナザリツクを深く愛してらっしゃるうえに、お身体は

女性だ。ゼルエル様がその気になってくだされば、ご子息も夢ではないよ。」

正妻戦争にゼルエルが加わろうとしている事を本人は知る由もなかった……

—————

### 第九階層

「はあ、疲れた。」

二人は椅子に座って、うなだれていた。理由は 先程、第六階層で守護者達に、「お前達にとつて、私達はどのような人物だ？」と聞いてしまったからだ。

シャルティア曰く、「お二人共、美の結晶でありモモンガ様は美しく、ゼルエル様は力強いお姿でありんす。」

コキユートス曰く、「守護者各員ヨリモ強者デアリ、モモンガ様ハ圧倒的ナ魔法ヲ、ゼルエル様ハ圧倒的ナ力ヲ持ツ御方デアリマス。」

アウラ曰く、「慈悲深く、配慮に優れたお方です。」

マール曰く、「す、すごく優しく、とつても強いお方です！」

デミウルゴス曰く、「モモンガ様は懸命な判断力を持ち、ゼルエル様は戦いにおいても、冷静さを忘れずに行動し、お二人共、最高の頭脳をお持ちであります。」

セバス曰く、「最後まで、私共をお見捨てにならず、シモベ一人一人にお慈悲を与えて下さる慈悲深きお方です。」

アルベド曰く、「ゼルエル様は至高の御方でも非常にお強い力を持ち、モモンガ様は至高の御方のまとめ役であり、私の愛するお人です！」

「あいつら、マジだ！」

忠誠度限界値に頭が痛くなっていた。

「で、どうします?」

なんとか、頭痛から解放された二人はこれからの方針を話し合う。

「その前に一つ、聞いてもいいですか?」

「なんです?」

「アルベド、どうしましたか?」

「……………」

「神は全てをお許しになります。包み隠さず話さない。」

こんな事を言ってるが、ゼルエルは宗教に興味はない。ただ、種族に『神の子』があるので、間違っではない。

「じ、実は……………」

「無いわー、『ビッチ』もあれだけど、『モモンガを愛している』とか、ゲームなら無理やり言わせる感じだぞ。萌えるのか？」

「ちよ、勝手に変態扱いしないでくださいよ。」

「やれやれ、まあタブラさんは怒らないと思いますから大丈夫ですよ。あの人、『これぞギャップ萌え！』とか言ってる喜びますよ。」

「うーん……」

「まあ、過ぎた事を考えても仕方ないですよ。それより、これからの事で提案なんですけど。」

「あんたから話ふってきたのに……まあいいや、それで何か案があるんですか？」

「簡単ですよ。この世界の力がわからない以上、戦力の強化は必須です。なら、パンドラとアイツを出すべきだと思うんですよね。」

「うっ、パンドラはできれば出したくないんだけどな。」

「何言ってるんですか。ある意味このナザリックでもっとも使えるNPCですよ。戦闘、防衛、情報収集等々、なんにでも使えるし、アイツは防衛戦においてはある意味最強ですよ。」



モモンガは黒歴史を出したく無いし、かつての仲間の思い出を失いたくないのだ。しかし、ナザリックを維持するにはパンドラの力は最適だろう。

「……わかりました。しばらく検討しておきます。とりあえず、それぞれのNPCと話だけはしておきましょう。」

「Wenn es meines Gottes Wille (我が神のお望みとあらば)」

「どこでそれを知った……!!?」

平和である。

第八階層

「久しぶりだな…」

「ラミエルよ……」

## 使徒、鑑賞

### 第九階層・ゼルエルの自室

ゼルエルの自室には大量のアイテムと武器が置いてある。そしてそれぞれに、「5」「6」等の数字が振り分けられている。

「では、頼むぞ。」

「は、はいい…」

そこには、ゼルエルに向かってエントマが剣を振ろうとしているという、何も知らない者が見たら、エントマを殺しかねない現場が映っていた。

「そう、おどおどするな。何もコアを狙えというわけでは無いのだから。」

「は、はい！」

そう言いエントマは持っている剣をゼルエルに向かって素振りをする。

ガキイイイン！

A. Tフィールドが音をたてて、拒絶する。

「ふむ、では次はユリ、頼むぞ。」

「は、はい！」

そういうとユリはガントレットを装着した拳を振るう。

パリ、パリ、パリ、ガキイン！

「ふむ、成る程な…」

今、ゼルエルが行っているのは自分の主要スキル『A・Tフィールド』の実験だ。

長年、使徒をやってきた（ゲームで）ゼルエルは大抵の攻撃を防ぐA・Tフィールドの枚数を熟知している。置いてあるアイテムの数字は、完全に拒絶するのに必要な枚数だ。

それはこの世界でも変わらなかった、しかし…

（まさか、新劇場版みたいになるとは…）

そう、この世界では魔法ダメージと物理ダメージに差があるのだ。エントマに振ってもらった剣は振ると、『スラッシュ／斬撃』の魔法が発動し、対象にダメージを与えるものだ。一方、ユリは普通に拳を振るってもらった。

結果をいうならば、エントマの剣の魔法はA・Tフィールドが完全に拒絶したが、ユリの拳は3枚のA・Tフィールドを破壊し、4枚目で拒絶した。

(ユグドラシルとはかなり違うな…)

ユグドラシルでは、A・Tフィールドで防御した場合、魔法・物理関係無く、一定枚数で拒絶する。もし、一枚でも少なければ、攻撃は貫通してしまう。しかし、この世界では魔法は今までと同じく一定枚数で拒絶するが、物理ダメージは拒絶する枚数まで、A・Tフィールドを破壊して進むことがわかった。しかも、破壊されたA・Tフィールドは「展開している」とみなされるようだ。

つまり、新劇場版の式号機のA・Tフィールド破壊と同じ感じというわけである。

「うむ、御苦労だった二人共、嫌な事をさせてすまなかつたな。」

「いえ！至高の御方のお考えこそが、我々の最優先事項であります！ご実験に役立てた事は光栄の極みでございます。」

「そうですね、ゼルエル様のご実験にお付き合ひできた事は至上の喜びでございます。」

「お、おう。しかし嫌な事をさせてしまったのは事実。後で褒美をとらせよう。」

「「とんでもございません！」」

(えー)

彼女らからしたら、至高の御方に剣を向け、拳を振るつたのだ。いくら御方の命令とはいえ、そんな行為は褒められるものではない。

ゼルエルは純粋に感謝しているのだが……

「うーん、わかった。この件は他言無用としておけ。後でモモンガさんと話し合っ  
て決めよう。」

「お、御身のご命令とあれば……」

---

「疲れるなー」

ゼルエルは一人、自室にいる。メイドや護衛は全員部屋の外に待機させている。

「忠誠心が高いのはありがたいんだけど、あそこまで高いとなー。」

現実<sup>リアル</sup>ではもっぱらこき使われる側だったゼルエルは、上の人間の気持ちが変わらず、  
混乱していた。

〔ゼルエルさん、聞こえますか？〕

〔モモンガさん？どうしました？〕

「いやー、ちよつと疲れたんで、外に出てみませんか？」

「おつ、いいつすね。んじや第一階層で待ち合わせますか。」

「オツケーです。すぐ行きますね。」

そう言つて、指輪を起動して第一階層に転移する。しばらくしたら黒いフルプレート  
の戦士が現れた。

「だれだあんた。」

「ちよ、私ですよ。モモンガです。」

「なんで戦士の格好してるんですか？」

「だって誰かに見られたら止められるじゃないですか。こうやつて隠してるんですよ。」

（そういえば部屋の外にいるユリになんも言つてないな……ま、いつか）

怒りの雷が落ちるフラグである。

「んじや、私もちよつと細工しますか。」

そう言いつつ、周りにA・Tフィールドを展開する。強力なA・Tフィールドは光を  
も歪める。第8の使徒ができたんだ。ゼルエルに出来ない道理はない！

「なにがしたいんですか？」

「A. Tフィールドで光を歪めてる…はず。」

「ガン見えですよ。」

光学の勉強をしていないゼルエルにはできるはずもなかった

そうこうしていると、上の方から足音が聞こえてくる。デミウルゴス率いる三魔将とデミウルゴス本人だ。

「これはモモンガ様とゼルエル様。近衛を連れずここにいらつしやるとは。それにモモンガ様のそのお召し物。」

「な、なんでばれたんだ？」

「いや、指輪使えんの私達だけでしょ。」

「と、とりあえず何とかごまかします。」

「うむ、色々と事情があつてな」

「…なるほど、そういうことですか。」

（なにが!?!）

「まさに、支配者たるに相応しいご配慮かと。しかし、共を連れずとなりますと、私も見過ごすわけには参りません。」



「ふ、ふーん……。分かった。一人だけ共を許そう。いいですね、モモンガさん。」

「え、ええ。ならばデミウルゴス。同行を許可しよう。」

「私の我が儘を受け入れて頂き、感謝致します。」

---

ナザリック地表付近

空に広がるのは満点の星空だ。思わず「おお……。」と声が漏れる。

モモンガは《フライ／飛行》のペンダントを、ゼルエルは浮遊を、デミウルゴスは姿を変えて飛行する。

「なんか遅くてすいません。」

「き、気にしないで下さい。」

ゼルエルだけが浮遊なので、必然的に三人ともゼルエルの速度に合わせることにな

る。最初はアイテムでスピードアップしようとしたが、「もったいない」とモモンガに止められてしまった。

しかし、もう少しで雲の上だ。雲から出た途端、二人は思わず口を開く。

「キラキラと輝いて、宝石箱みたいだ。」

「本当に綺麗だ。みんなにも見せてあげたいな。」

「この世界が美しいのは御二人の身を飾るための宝石をやどしているからかと。」

「ふふ、うまいことをいうねえ、デミウルゴス。」

「確かにそうかもな。だが、私達だけで独占するものでは無いな。ナザリックと我らの友達、アインズ・ウール・ゴウンを飾るものかもしれないな。」

「お望みとあれば、ナザリック全軍をもって手に入れて参ります。」

「ふふ、この世界にどんな存在がいるのか不明であるのか？だが、そうだな…

世界征服なんて、面白いかもしれないな。」

「そうだね…面白いかもね。」

デミウルゴスは至高の御二方が世界征服が望みであると勘違いしていることなど、二

人共知る由も無かった。

「だけど、他のプレイヤーは来ていないのかな？他のギルメンも来てくれているのかな？」

「そうですね、どうなっているんですかね？メッセージ伝言は届かなかったんですけど、距離が遠かったり、魔法の効果が変わったからかもしれないですね。なら、アインズ・ウール・ゴウンの名が世界にとどろけば、他のみんなも気付いてくれる可能性もありますね。」

「名案だね。」

「ん？」

下の地面から轟音が聞こえる。どうやらマールが《アース・サージ／大地の大波》をスキルを使用して範囲拡大して使っているようだ。

「がんばってますね、マールになにか褒美をあげますか。」

「あつ、そうだ。実は実験に付き合ってくれたユリとエントマに褒美をあげたいんですけど、二人は「至高の御方に刃を向けたのに、褒美などんでもございませぬ!!」つて言うんですよ。」

「あー、なるほど。とりあえずデミウルゴスにそれとなく聞いてみます。」

「モモンガ様、ゼルエル様。これからのご予定をお聞きしてもよろしいでしょうか。」

「マーレの陣中見舞いに行く。なにが褒美として良いと思う？」

「モモンガ様がお声を掛けるだけで、十分かと。」

「いや、参考にならないんですけど。」

「あはは… すいません。」

「あやまることありませんよ。しかたないですね、二人で話をしてみますよ。」

「デミウルゴス、少し話がしたい。モモンガさんは先に行つて下さい。」

「かしこまりました、ゼルエル様。ではモモンガ様、失礼致します。」

「うむ、わかった。ではお先に。」

---

「さて、デミウルゴスよ。実はな、ユリとエントマに実験として私に攻撃してもらったのだ。無論、私自身にダメージは無い。二人に褒美を与えたいのだが、何が相応しいと思う？」

「ふむ、なるほど。ゼルエル様は二人に褒美を授けたいのですが、二人はゼルエル様に刃

を向けてしまったため、褒美を受け取りたがらない、というわけですか。」

「お、おう、さすがだなデミウルゴス。」

「いえ、モモンガ様やゼルエル様に比べれば私などまだまだでございます。それで二人への褒美でございますね。ふむ、アイテムなどの物品ならば見るたびにゼルエル様に刃を向けた事を思い出してしまいます。ここは一つ、ゼルエル様から御言葉や御行為を授ければ、十分な褒美になるかと存じます。」

「なるほど、ありがとうございます、デミウルゴス。参考になったよ。今後ともよろしくな。モモンガさんの護衛に戻ってくれ。私はナザリックに帰る。」

「っ!!ありがとうございます、ゼルエル様!では、失礼致します。」

「ああ。あつ、そうだ。この事は他言するなよ。」

「了解致しました。では。」

(なるほど、何かを渡すんじゃないなくて、自分で感謝を表せばいいのか。さすがだな、デミウルゴス)

デミウルゴスの頭脳に舌を巻いていると、アルベドが飛んできた。

「っ!!これはゼルエル様。御一人でございますか?モモンガ様はどちらへ?」

「アルベドか。モモンガさんなら地上だ。私はこれからナザリツクに帰る。護衛はいらないぞ。」

「はっ！了解致しました。お気を付けて。」

言うが早いのか、地上に飛んでいった。いや、落ちていったのか？早すぎだろ。

「帰るとするか。」

指輪で転移してナザリツクに帰還した。

帰ったらプレアデスとメイドがバタバタしてたが、私を見つけるや否や「ゼルエル様！ご無事で！」とか言ってきて、すごい罪悪感があった。

ユリにはこっぴどく叱られる羽目になった。とてもじゃないが褒美をあげる雰囲気じゃ無かったので、褒美はまた後日渡す事になった。後から聞いたらモモンガさんはマーレとアルベドにリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを渡したらしい。そして二人共、左手の薬指にはめているのはきつとモモンガさんの意図したことじゃないだろう……多分……

## 使徒、襲来

## 第九階層・執務室

モモンガは ミラー・オブ・リモート・ビューイング 遠隔視の鏡を使って、ナザリック周辺を観察している。そばには、セバスが共として付いているようだ。

「よっ、ほっ」

「……………」

遠隔視の鏡の操作に慣れるため、手を動かしている モモンガ。非常に奇妙な光景である。

余談だが、A・Tフィールドでは監視や幻術などの視覚の類の拒絶はできない。

「やあ、おはよう。」

「おはようございます。ゼルエルさん。」

「おはようございます。ゼルエル様。」

「うん、徹夜したのにおはようなんて奇妙だね…」

モモンガはアンデット故、ゼルエルは使徒故に、二人共睡眠や食事の必要が無いのだ。



だから、この数日、寝ずに実験やらなんやらをしている。

ゼルエルと共にプレアデスの副リーダー、ユリ・アルファも入室する。ゼルエルの專屬メイドはユリというのは、ナザリック周知のことである。

「おはようございます。モモンガ様、セバス様。」

「ああ、おはよう。ユリ」

軽く挨拶を交わした後、ゼルエルがモモンガの隣に付き、ユリもゼルエルの後ろに待機する。

「どうですか？使えますか？」

「まだなんとも…もう少しなんですけどねー」

ゼルエルも ミラー・オブ・リモート・ビューイング 遠隔視の鏡を使った事は無い。彼はどちらかといえば開かない扉をぶち破る系だからだ。

「おっ!!?」

「おめでどうございます。モモンガ様。」

「おめでどうございます。」

「どうやら ミラー・オブ・リモート・ビューイング 遠隔視の鏡を使いこなしたようだ。

「ありがとうセバス。付き合わせて悪かったな。」

「いえいえ、このくらい、執事として当然でございます。」

ミラー・オブ・リモート・ビューイング

遠隔視の鏡で周辺を観察すると、何やら村の様なものが見えた。が、様子が

おかしい。

「祭か？」

「いえ、これは違います。」

そう、村人風の人間を騎士風の人間が殺して回る。まさに、虐殺の光景だ。

「ちっ!!？」

「はぁー……」

ここでモモンガが二人に起こっている変化に気付く。

「ゼルエルさん、どう思いますか？」

「どうって……何が？」

「この光景を見て何も感じませんか？ 私は……何も感じません。普通だったら気持ち悪くなりませんか？」

「……ああ！確かに！忘れてましたよ。私も何も感じませんね。別にどうなつてもいいとは感じますけど……」

モモンガはこの虐殺を見ても、虫が争っている様にしか感じないし、ゼルエルは自分に関係の無い生物が争っている様にしか感じない。

「いかがなさいますか。」

「…見捨てる。助ける価値も無いからな…」

「同じく」

「…かしこまりました。」

ゼルエルはリスクを冒してまで、この村を助ける価値は無いと思っていた。

「ユリ、帰るぞ。」

「はっ、はい！」

(?)

ゼルエルはユリが食い入る様に鏡を見ていたのが気になり、ふと鏡を覗き込む。

そこには村娘らしい子供二人が騎士に追われ、殺されようとしていた。

(やまいこさんらしいな…)

小学校の教師であり、ユリの創造者のやまいこさんを思い出す。

(だが、今はナザリックを優先させるべきだ。)

一刻の情に流され、無駄なリスクを背負うのは愚かな事だ。ユリに再度命令を下そう

とした時…

「ふふふ、くっはははははははは」

「…モモンガさん？」

「ゼルエルさん、私はこの村に行きますよ。」

「なっ何言ってるんです!?? 危険ですよ!」

「いずれこの世界の強さについては、調べなければいけないんです。それに…困っている人がいたら助けるのは当たり前でしょ。」

「っ!」

かつてのギルドメンバーの言葉に思わず面食らう。

「…しかたありませんね。」

「よし、セバス。聞いた通りだ。私達はこの村に行く。アルベドに完全装備で来る様に伝える。世界級ワールドアイテムの使用は許可しない。次に後詰の準備だ。この村に隠密能力に長けるか、透明化の特殊能力を持つシモベを複数送り込め。」

「かしこまりました。」

「セバス。アルベドに命令追加だ。『リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』の持ち出しは許可できない。私達のどちらかに預ける様に伝える。」

モモンガはギルド武器『スタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』を取り出し、『ゲート／転移門』を発動させる。

傍らでゼルエルは第二形態になり、戦闘準備を整えた。

エンリ・エモットは逃げていた。突如、村を襲った騎士達から妹をつれて逃げていたのだ。

しかし、追いつかれてしまい、なんとか妹だけでも逃がそうとした時、騎士達の動きが止まった。まるでナニカを見つけたように……  
後ろには闇でできたナニカがあった。そして…

そこからは『死』と『力』出てきた。

《心臓掌握／グラスプ・ハート》

モモンガが得意とする死霊系魔法、さらに高位の第九位階魔法が繰り出される。

「ぐ、ぐは…」

「ひ、ひい…」

どうやら抵抗できずに即死したようだ。つまり即死対策をしていないか、並のLV、

100より弱いかのどちらかだ。

「どうした。女子供は追い回せるのに、毛色が変わった獲物は無理か？」

「まあ、せつかくだ。実験に付き合ってもらおうか。」

「た、助けてくれー!」

騎士が叫び声をあげて逃走を計るが黙って見逃す道理は無い。ゼルエルがスキル《ベルトアーム》を放つ。殺せなくとも、捕縛しようと考えたのだが…

「えっ」

ベルトアームが刺さった途端、息絶えてしまった。ベルトアームは第五階魔法程度の、攻撃力しか無く、追加効果の『拘束』がメインのスキルだったのだが…

「モモンガさん。こいつら弱いですよ。ベルトアーム一撃で死にましたよ。」

「ええー」

今まであんだだけ慎重にやってたのに何だったんだと、二人は意気消沈していた。

《中位アンデット作成・デスナイト》

モモンガはスキルで盾役モンスターを作成する。黒い塊が騎士の死体に取り付き、中位アンデット・デスナイトが召喚される。

(うわあ、キモいな…)

スキルの変化に二人の気持ちが一致する。

「んっん！デスナイトよ。この村を襲っている騎士を殺せ。」

「ウオオオ！」

デスナイトが村に走っていくのを見てモモンガは唾然としていた。

（盾になるモンスターが、守るべき主人を置いてどうするよ。まあ命令したのは俺だけだよ。）

「モモンガさん、私も先に行つてますよ。ちよつと実験したいし。」

「だ、駄目ですよ！危険です！」

「大丈夫ですよ。デスナイトに先に戦わせませし、やられたなら撤退しますよ。」

「…わかりました。気を付けて下さい。」

ゼルエルがデスナイトの後を追おうとすると、ゲート転移門から完全装備のアルベドが現れた。

「準備に時間が掛かり、申し訳ありません。」

「いや、良いタイミングだ。ゼルエルさんがこれから村に先行するから、アルベドは私の護衛を頼む。」

「っ！かしこまりました！」

「それよりアルベド、お前にはやるべきことがあるだろう？」

「…なんでございましょうか、ゼルエル様。」

「セバスから聞いてないのか？リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを私達に預けるのだ。」

「……承知致しました。」

アルベドはモモンガに指輪を預ける。

（盗賊系スキルによつて指輪が奪われれば、最悪ナザリックの崩壊に繋がる。ならば、多少なり対策を施してある私達に預けるのが最も最良手なんだけど…わかってんのかな）

そんな事を考えながら、村に続く道を行くゼルエルであった。

—————

カルネ村は非常に喧騒としていた。最初はいきなり襲ってきた騎士達による殺戮に、今は……

ウオオオオオオ!!?



突如現れた謎の騎士<sup>化け物</sup>一体によって襲ってきた騎士の一人が空を舞ったことによつて

……

デスナイトは命令通り、騎士を殺していた。ただし弱かったため、楽しんで殺しているのだ。

(弱いな……)

ゼルエルは物陰に隠れながらデスナイトの様子を伺っていた。デスナイトの戦闘を観察し、今後の行動を考えていたが、ある意味計算外だった……

(デスナイトにダメージさえ与えられていないとは……心配して損した気分だ。)

騎士達の振った剣はデスナイトに当たると全て壊されていた。それでいてダメージもまともに与えられていないのだ。

(だが、油断はすべきでは無いな。実験を開始しよう。)

「デスナイトよ。止まれ。」

突如、空から声が聞こえ、謎の騎士、デスナイトが動きを止める。本来、デスナイトの主人はモモンガだが、モモンガからこの人の命令に従えと言われている。

空にいたのは人間などではなく、例えようの無い容姿をしたナニカだった。それは空から降りてきて地面スレスレを浮いている。

「さて、騎士のみなさん。あなた方にチャンスを与えます。簡単なことです。一人だけに攻撃してみて下さい。もし私に一撃与えられたなら、この騎士はあなた方のものです。与えられなくとも、協力してくれた礼として慈悲の心を与えましょう。」

騎士達は我先にとゼルエルに攻撃を仕掛ける。攻撃した者だけが助けてもらえるのだ。しかも相手は手も足も無い奴、舐めきっているのだ。

「俺だー！」

騎士の一人が剣を振るう。他の仲間を押し退けるだけの力があるのだから、最も力があるのだろう。

ガギイイイイイン！

「なっ！」

騎士の剣は粉々に碎ける。まるで何か見えない壁があるかの様に……

「まさか一枚も突破できないとは……まあいい。約束通り慈悲を与えよう。」

そういうと騎士はなにがあつたのかわからなかつたが、助けてくれると知り、安心して

たような表情を浮かべる…

パアアアン！

…事も無く足だけになったモノがあった。

「約束通り、痛みなく殺してやる。後はデスナイト、任せたぞ。せいぜい楽しむといい。」  
騎士達にはわかった。この生物は私達に微塵の興味も、虐殺を楽しむ感情も無いモノだと。

—————

(弱かったな)

ゼルエルはこの世界の攻撃がA・Tフィールドにどんな影響を与えるのか。何枚展開する必要があるのか等の実験がしたかったのだ。そのため、騎士に攻撃をさせたところ。結果はA・Tフィールド一枚も破壊できなかったのだ。つまり、低レベルもいところな強さなのだ。実験に協力してくれた騎士にはお礼として、A・Tフィールドの《シールド・バッシュ／盾殴り》で瞬殺してあげた。

(五枚分のA・Tフィールドの盾殴りで肉片すら残らないとはな…思ったよりこの世界

の人間は脆いようだ。残りの騎士達はデスナイトが相手をしている…否、遊んでやってるのだ。隊長っぽい人間やどうしようも無いクスも私には皆、同じ存在だ。わざわざ手を下すまでも無い存在として…)

「デスナイトよ。そこまでだ！」

(どうやらモモンガさんが来たようだ、私の役目はこれでお終いだな。)

「初めまして。諸君、私はアインズ・ウール・ゴウンと言う。」

「………はい？」

## 使徒、散策

カルネ村

モモンガ、もといアインズとゼルエルはカルネ村の村長の家を訪問していた。この世界の情報を入力するためである。

因みにゼルエルはアインズが生み出した天使という体で通っている。

〈村長説明中〉

(「なんだこの世界!?!」)

「リ・エステイ―ゼ王国? バハルス帝国? スレイン法国? 聞いた事ない国ばかりですよ、ゼルエルさん!」

「…実は私達の教育がなっていないだけとか?」

「何言ってます! 現実見てください!」

「どうかなさいましたか?」

「い、いえ、何でもありません。続けて下さい。」

その後、村長との話で、アインズは色々考えて、何度もゼルエルが現実逃避しかけたのは、また別の話…

「村長、葬儀の準備が整いましたが…」

「構いませんよ。葬儀は大切ですからね。」

「あ、ありがとうございます。それでは」

### カルネ村・墓地

この世界ではきちんとした埋葬をしなければ死者はアンデッドとなるため、死体は野に放置というわけにはいかず、それなりに埋葬される。といっても地面に埋めて、石の墓標を設置するだけだ。

ゼルエルは『神の子<sup>ゴス</sup>』や『使徒』という非常に宗教に関連する種族を取っているため、

この世界の宗教に興味があったのだが村人がそれほど宗教に関心がないとわかると、ど

うでもよくなった。

アインズが木の下で『蘇生の短杖（ワンド・オブ・リザレクション）』を弄り回しているのを発見したゼルエルはアインズに伝言メッセージを送る。

「アインズさん、『蘇生の短杖（ワンド・オブ・リザレクション）』なんか弄ってどうしました？」

「うお！びつくりしたゼルエルさん、驚かせないで下さいよ。」

「ごめんごめん。まさかとは思いますが、村人を蘇生させようなんて考えてませんよね。」

「…もちろんやろうなんて思ってます。無駄にリスクを増やす様なことはしませんよ。」

「ならいいですよ。さすがモモンつと、今はアインズさんですね。」

「ゼルエルさん、思ったんですけど個人ではモモンガが良いですよ。いきなり変えるのは大変で…」

「いやあ、ありがとね！いきなり呼び方変えるの大変だったんですよ。」

「遠慮無いな、おい！」

アインズとしては自分には分不相応なギルドの名前で友人に呼ばれるのは結構抵抗があるし、ゼルエルは今までギルドを維持してくれたアインズに感謝してるし、ギルド

の名前に改名しても何の問題も無いのだが、何年も「モモンガ」と呼んでいるのだ。そう簡単に呼び方を変えるのは難しかった。

夕方になってしまった。葬儀も終わり、村人が村の復興に着手していた。

アインズとゼルエル、アルベドは村の中を歩いていた。(正確には二人歩いて、一人浮いてだが……)

「アルベド、人間は嫌いか？」

「はい、脆弱な生き物。下等生物。虫のように踏み潰せばどれほど綺麗になるかと。」

「……なるほど、ゼルエルさんはどうですか？」

「私は人間を嫌いじゃありませんけど、好きでもありません。どうでもいい存在と感じますね。モモ…… アインズさんは？」

「私は…… 嫌悪感はありませんけど、無視はできない…… 虫みたいな感覚ですね。」

そうこうしていたら、村の中心に人が集まってきた。なにやら慌てている。



「どうしました、村長」

「アインズ様、実はこちらに武装した集団が向かっているらしいのですが…」

「ふむ…」

「こちらにやってくる集団。シモベの報告によれば装備は統一性が無く、内一人はこの世界では高いレベルらしい。」

「殲滅するか？モモンガさん。」

「いや、ここは様子を見ましよう。一応ゼルエルさんは私の後ろへ。」

ゼルエルはそのスキルビルド上、接近されるのは非常に危険だ。少なくとも、A・T  
フィールドが十分に展開できる距離は欲しい。そのためわざわざ魔法詠唱者であるア  
インズに出てもらったのだ。

「わかりました。生き残った村人を村長の家に。村長は私達と来てください。今回は無  
償でお助けしますよ。」

「おお！ありがとうございます！」

しばらくして、集団が村に入って来る。

「私はリ・エステイーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らしま  
わっている帝国の騎士を討伐するため、王の御命令を受け、村々を回っている者であ

る。」

「王国戦士長……」

「知っているのです?」

「は、はい。以前、王の御前試合で優勝したと、旅の商人から聞いた事があります。」

「この村の村長か?この者達は誰なのか教えてもらおうか。」

「こ、この御方は……」

「それには及びません。初めまして。私はアインズ・ウール・ゴウン。隣に居るのは部下のアルベド。後ろに居るのはゼルエル。この村が襲われていたので助けに来た者です。」

「そうか……ゼルエル殿は何者だ?まさか人では無いだろうか?」

「ええ、彼は私が特殊な召喚をした天使です。」

「なるほど。差出がましいようだが、ゴウン殿の仮面を取っては頂けないか?」

「お断りします。あれ(デスナイト)が暴走すると危険ですから。」

「なるほど、取ってくれないほうが良さそうだ。質問に答えて頂き、感謝する。そしてこの村を救って頂き、感謝の言葉も無い。」

ガゼフが馬を降りて頭を下げることに少なからず驚いた。王国戦士長という少なからず、高い地位にいそうな人間がこうも簡単に頭を下げたのだ。現実ではほとんど見ら

れない光景に驚くのは仕方のない事だろう。

「いえいえ、私も報酬目当てで助けたので、お気になさらず。」

「それでも感謝する。よく村を救ってくれた。本当にありがとう。」

どこまでもいい人柄に二人が関心していると、後ろから一人の兵士がやってきた。

「戦士長！村を囲むように人影が！周囲を囲みながら接近しています。」

## 使徒、戦闘

カルネ村

カルネ村の周りには変わった格好をした人間が等間隔で包囲している。それぞれの傍らには天使がそれぞれ付き従っている。

「一体彼らは何者なのでしょう。」

「これだけの魔法詠唱者マジックキャスターを揃えられるのはスレイン王国。その中でも神官長直轄の特殊工作部隊『六色聖典』のいずれかだろう。」

「なるほど。では先程の騎士達は……」

「装備は帝国の物だったが、どうやらスレイン王国の偽装だったようだな。」

「ふむ。しかし、この村にそんな価値があるのでしようか？」

「ゴウン殿に心当たりが無い。ということは……」

「……憎まれているんですね。戦士長殿は。」

「本当に困ったものだ。まさかスレイン王国にまでねらわれているとは。」

「ゼルエルさん。あれって炎の上位天使アークエンジェル・フレイムですよ。」

「ええ、ユグドラシルと同じモンスターがなぜここにいるんでしょうか。」

「わかりませんね。あの集団、話によればかなり強そうですね」

「ゴウン殿、よければ雇われないか？報酬は望む額を約束する。」

「お断りします。」

「御付きの天使でもよければ貸していただけないかな？」

(!??)

アインズは驚き、怒りに震えた。ガゼフからすればゼルエルは換えがきくアインズの召喚モンスターと感じただろう。実際、向こうに天使を召喚している者達がいるのだから、そう感じたのも無理はない。しかし、アインズは違う。ゼルエルは換え難き友人であり、おいそれと捨て駒にできる存在では無い。それを死ぬかもしれない戦場に一人で送り込むのだ。許容できる筈もない。

「ふざけ「モモンガさん！ストップ！」ゼルエルさん!?？」

「戦士長殿。まず、いくつかの事を伝えていなかった事を詫びよう。」

「これは…ゼルエル殿は喋れたのか!?？」

危うくアインズが戦士長を殺しかねなかったので、ゼルエルが仲裁に入る。ここで殺せば必然的に村を囲んでいる連中と戦わなければいけないし、最悪カルネ村も消滅させなければいけない。それでは良い事は一つも無いため、アインズを制止したのだ。

「戦士長殿。そうだ私は喋れるのだが、今まで黙っていたのは喋る必要が無かったから

だが、すまなかった。それで一つ、戦士長殿に伝えていなかったのだが、私とアインズさんは召喚物と召喚主の関係だけでは無い。私達は特殊な召喚故に対等な関係なのだ。アインズさんが行かなければ私も行かないし、逆も同じだ。この事を伝えていなかったこちらに責任はある。どうか先の言葉は無かった事にしてくれないか？」

「そうだったのか…知らぬ事とはいえ、失礼をした。先の言葉は取り消そう。本当にすまなかった。」

「いえいえ、アインズさんもそれでいいですね。」

「…ええ、すいません。こちらの不注意でした。」

「いや、こちらも失礼した。それではゴウン殿、この村を、救ってくれた事を本当に感謝する。」

ガゼフはアインズのガントレットを着けた手を握りしめる。

「本当に、本当に感謝する。そして我が儘を言うようだが、どうか再びこの村を守って下さらないか。今差し出せる物は無いが、何卒…」

ガゼフは頭を下げようとしたが、アインズに手で止められる。

「そこまでされる必要はありません。了解しました。村は必ずお守りします。このアインズ・ウール・ゴウンの名にかけて。」

「ならば後顧の憂い無し。私は前だけを見て進ませていただく。それではゴウン殿、ゼ

ルエル殿、お元気で。」

「ご武運を。ではこれを」

アインズは小さな木像を手渡す。

「君からの品だ。ありがたく頂戴しよう。」

—————

戦士長が部隊を率いて天使達と戦っているの光景をアインズの魔法で見ていたアイ  
ンズ本人とゼルエルは、『武技』と呼ばれる技の存在、戦士長の強さ、そしてレベルの低  
さに驚いていた。

「例外とあつけ無いですね。王国最強でこれならこの世界のレベル低すぎませんか  
？」

「だね。この武技っていうやつは要注意だけど、それでもそんなに強く無いしね。」

「そうですね。そろそろ交代しますか？」

「オツケー、んじや準備しますわ。」

転移魔法でガゼフと位置を入れ替える。村長の家から開けた平原に景色が移り変わ  
る。

「…何者だ？」

「初めまして。私はアインズ・ウール・ゴウンと言います。あの村には少々縁がありましたね。」

「村人の命乞いにでもきたのか？」

「いえいえ…」

「お前と戦士長の会話を聞いたのだがな、本当にいい度胸をしている。」

「？」

「お前は私達が手間をかけて救った村人を殺すと宣言している。これほど不快な事はない。」

「不快とは大きく出たなマジックキャスター。で！だからどうした？」

「抵抗する事なくその命を差し出せ。そうすれば痛みはない。だが拒絶するならば、愚劣さの対価として、絶望と苦痛の中で死に絶えるがいい！」

「！天使達を突撃させよ！」

彼らの天使がアインズの体に炎の剣を突き立てる。

「ふっ。無様なものだ。くだらん挑発でけむにまこうと…!!？」

天使達は剣が刺さったままのアインズに顔を掴まれ、動けずにいた。

「言っただろう？抵抗する事無く命を差し出せと。人の忠告は素直に聞いておくべきだ」



ぞ。」

「馬鹿な！」

「何かのトリックに決まっている！」

ガゼフすら倒せる剣をまともにくらってピンピンしているのだ。驚くのは当然だろう。

「上位物理無効化。基本的なスキルだ。ゼルエルさんも持っているぞ。では後はどうぞ。」

「かしこまった。」

アインズは天使から手を離すと、天使は何か頭に殴られたように地面に激突し、光の粒子と化した。

「ふむ。3枚で即死、ユグドラシルの炎の<sup>アークエンジェル・フレイム</sup>上位天使と同じというわけか…」

「やっぱユグドラシルと同じ奴なんですかね？」

ゼルエルは炎の<sup>アークエンジェル・フレイム</sup>上位天使にユグドラシルで即死するのと同じ枚数のA・Tフィールドの盾殴りで攻撃したのだ。結果、ユグドラシルと同じ様に消滅したのだ。

「ぜ、全天使で攻撃を仕掛ける！急げ！」

ニグンは隊員に全ての天使での攻撃を命じる。だが…

「アルベドは下がれ。ゼルエルさんは大丈夫ですね。」

「はっ！」

「問題無い。」

「《負の爆裂／ネガティブバースト》!!?」

アインズの広範囲魔法が発動する。アインズを中心に負のエネルギーが炸裂するが、ゼルエルはA・Tフィールドで自分だけを守る。

結果、天使は全滅した。

「うっ、うわぁ！」

「化け物！」

隊員が次々と魔法を放つが、アインズとゼルエルはスキルで防御する。

「ユグドラシルの魔法ばかりですね。」

「ほんとそれ。しかも高くて第三位階とか軟弱すぎでしょ。」

「うわぁぁ！」

隊員がスリリングを放つ。魔法が効かないのに何をと思うかもしれないが、動揺していたのだろう。

ドシヤ！

「えっ?」

スリリングを撃った隊員の頭が無くなったのだ。どうやらアルベドがスキルでスリ

リングを反射させたらしいが、彼らには見えていないだろう。

「アルベド、あの程度の飛び道具でこの身が傷つかないのは承知のはず。お前が力を使う事は…」

「お待ち下さいアインズ様。至高の御身と戦うのであれば、最低限度の攻撃というものがございます。あの様な下賤な飛びつぶてなど。」

(私の方にも飛んできてただけだな)

アルベドはアインズに飛んできた物だけを弾き飛ばしたのだが、ゼルエルには何もしていない。まあ、ダメージは無いのだが…

「くははは。それを言ったらあいつら自体が失格ではないか。なあ、お前。」

「くっ！ 監視の権天使！ かかれ！」  
プリンシパリティー・オブザベイシヨン

ニグンは待機させていた監視の権天使をアインズに向かわせる。天使はメイスをアインズに向けて振り下ろす…

ガキイイーン！

…ことはできなかった。ゼルエルがA・Tフィールドを発動させたのだ。

「おいおい、いきなりキングは無いだろう？ まずは私だ。」

そう言いつつ、A・Tフィールドを十枚程度発生させ、殴る。最初の炎の上位天使と  
アークエンジェル・フレイルム

同じように、地面と激突し消滅した。

「なっ、何をした!?？」

「お前達を知る必要はない。さあ、もう終わりか?」

「くそ! 最高位天使を召喚する! 全員、時間を稼げ!」

そういうと、ニグンは懐から水晶を取り出す。

「モモンガさん、あれって…」

「ええ。超位魔法以外なら封じこめる、『魔封じの水晶』ですね。ユグドラシルのアイテムもあるのか。」

「あいつ、最高位天使って言ってましたけど、まさか熾<sup>セ</sup>天使<sup>ラフ</sup>ですかね。」

「だとしたらマズイですね、ゼルエルさん。最悪、超位魔法を撃ちます。盾役<sup>タンク</sup>お願いします。アルベドも動かします。」

「了解。」

「アルベド、スキルを使用して私を守れ。」

「はっ!」

アルベドはスキルを発動させ、アインズは超位魔法の準備、ゼルエルは第三形態になる。

「見よ! 最高位天使の尊き姿を! 威光<sup>ドミノオン、オーソリテイ</sup>の主天使だ!!?」

水晶から光が溢れ、天使が召喚される。天使によって夕暮れで薄暗い周囲は昼間の様

に明るくなり、天使は神々しく降臨した。

「この天使が最高の切り札……」

「そうだ！お前達にはこの宝を使う価値があると判断した！」

「なんてことだ……」

「恐ろしいか？無理もない。」

「本気か……」

「何？」

「これが最高位天使？主天使ドミニオンだぞ……上から4番目の天使だぞ……最高位天使だっていうから熾セラフ天使かと思って、わざわざ小っ恥ずかしい第三形態になったのに……ふざけんなよ！」

「全く、こんな幼稚なお遊びに警戒していたとは……」

「お遊び？何を言っているの？まさか……いや、ありえん！人類では勝てない存在を前に！ハツタリだ！《聖なる極撃／ホーリー・スマイト》を放て！！？」

ドミニオン・オーソリテイ  
威光の主天使は持っている杖を砕き、魔法威力を上昇させ、《聖なる極撃／ホーリー・スマイト》を撃つ。

ガギイイイイイン!!?

アインズ一団を中心に半透明な壁が空を覆う。

「流石ですね。やっぱ第七位階じゃあスキルで防げませんし、助かりましたよ。」

「全く、この世界で一番歯応えのある攻撃が第七位階とかしよぼいですよ。A. T  
フィールドが軋みもしないとは。」

ゼルエルがA. Tフィールドを展開し、《聖なる極撃／ホーリー・スマイト》を完全防

御したのだ。その影響でA、Tフィールドは透明の効果が消え、視覚できる様になったのだ。

「さて、お前達。確かこいつが最高位天使だって言ってたよな。」

「ひっ、ひい、もう一撃だ！」

「質問に答えろよ。まあいいや。冥土の土産に『使徒』の力、見せてやんよ。」

ゼルエルは自らの腕をベルトアームに戻し、収束させ、発射する。ベルトアームはドミニオン・オーソリテイ威光の主天使の翼に突き刺さり、巻きつく。

「な、何をする気だ！」

「言っただろ。最高位天使様に『使徒』の力を見せてやるって言ってたんだよ。」

そういうと、ベルトアームを巻き戻し、天使にぶつかると、天使とゼルエルの間にはゼルエルが発生させたA、Tフィールドが張つてある。そのままゼルエルは破壊光線を放つ。

ドゴオオオン！

ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使は破壊光線の直撃を受け、大爆発の後、消滅する。

ドミニオン「やっぱ主天使じゃあこんなもんか。ちよつと硬かったけどまあいっつか。」

「よくないです。あんたの破壊光線で貴重な情報源が何人か死んじやいましたよ。」

「あつ…」

ゼルエルの破壊光線の余波で近くにいた隊員が何人か消し飛んだのだ。

「き、貴様、伝説の魔神の生き残りか？」

「魔神？それがなんなのかは知らないが。私は一応天使。こいつらの完全上位種族だな。」

「全く。使徒なのに魔神とか、よくわかりませんね。情報をしつかりと聞き出す必要がありませんね。」

ヒキ

大気が割れ、元に戻る。

「なんだ？？」

「誰かが情報系魔法で覗いてきたようだな。私の攻性防壁が作動したので大して覗かれてはいないだろう。」

「あらー、情報対策をしないで覗くなんて無用心すぎでしょ。」

「あんたにだけは言われたくないでしょうね。情報対策どころか低位の対策もしていないから、『露出狂』って呼ばれてたでしょう。」

「ちよ、おま、それは内緒だろー！」

余談だが、ゼルエルはその見た目とあまりに情報系対策に無関心なことから、そう呼ばれていた。



「さて、ではさよならだな。」

「おい、話はまだ終わってねーぞ。」

「うるさいですね。掲示板でそう呼ばれてましたよ。」

「マジで？？」

マジである。

「さあ、たつぷり情報を吐いてもらおうか。」

「そんな…使徒が隠蔽するのは違うと思って何もしなかったのに…」

—————

ナザリツク・玉座の間

陽光聖典の生き残りを全員捕縛し、ナザリツクに帰還したアインズ一行。

途中で（精神的な）大ダメージを受けたゼルエルをなだめるのに一時間程掛かったが、なんとか持ち直したようだ。

「まずは私達が勝手に動いた事を詫びよう。何があつたかはアルベドから聞くように。ただ、早急に伝えたい事が二つある。」

「まず一つ目。私とアインズさんが創造したシモベを二体、領域守護者の任と兼任させ、ナザリックの防衛、行政にあてる。出てきなさい。」

そういうと突如、何もない筈の玉座の隣の空間が歪み、二つの影が現れる。

一体はまるで卵のような顔を持ち、黄色の服を身に纏う人型。そしてもう一体は青色の正八面体の形をしたモノ。

「皆様、初めまして。アインズ様に創造されしシモベ。宝物殿領域守護者、パンドラズ・アクターで御座います。そしてこちらは、ゼルエル様に創造されしシモベ、ラミエル殿です。」

「……」

シモベ達は困惑した。ある者は驚愕で唾然とし、ある者は怒りのオーラをかもしだし、ある者は嫌そうな顔をしている。

それは全て正しい反応だ。なぜなら最初、二人が出てきたのは《ミラー・ワールド／鏡の世界》という、至高の41人の一人が使用した最高位幻術なのだ。これで至高の御方が帰還されたと勘違いしたシモベは多い。しかし出てきたのは至高の41人には似ても似つかない卵顔と青い物体。しかも青い物体は黙り込んでいる。至高の御方々の前で不敬極まりない行為をしているのだ。むしろ、跳びかからなかっただけマシだろう。

「あー、ラミエルは使徒故、話すのが困難だ。皆もわかってくれ。」

怒りのオーラを出していたシモベはすぐにそのオーラを引っ込め、自分達の過ちを悔  
いる。

「ん、ん！では彼らの説明を始める。まず、私の創造したパンドラズ・アクターは宝物殿  
の領域守護者で、私達至高の41人の姿をコピーでき、その能力を使うことができる、  
ドッペルゲンガーだ。その頭脳はアルベドやデミウルゴスと同等だ。主にナザリック  
の行政に当てようと思う。」

「はい。わたくし、パンドラズ・アクターは、モモンガ様に創造されし忠実なシモベ。  
他の至高の御方と戦うことになろうとも！私はモモンガ様に忠義を捧げます！」

アインズ自らが創造したシモベ。しかも至高の41人の能力を使えるという。この  
ような存在に他のシモベは驚嘆の表情をする。

また、アインズがパンドラのオーバーアクションで精神の沈静化が起きたのは別の話  
…

「あー、私の創造したラミエルは、第八階層の第九階層へと繋がる門の前を守護する領域  
守護者だ。事実上、第八階層の最終防衛ラインだ。一定条件下での戦闘ならば守護者各  
員を上回るだろう。是非、ナザリックの防衛に役立ててくれ。」

「…」

シモベ達は更に驚愕する。この者はナザリック最終防衛ライン、第八階層の最終防衛ラインだ。さらに守護者を超える力を持つているという。それをナザリックの防衛に与えるというのだ。ゼルエルの心意気に感激の涙を流す者もいた。

「守護者達は二人と話し合い、ナザリックの行政と防衛に役立てるのだ。最後に最も重要な事だが…《上位道具破壊／グレーター・ブレイク・アイテム》！」

玉座の間のモモンガの旗が消滅する。

「私は名を変えた。これからは私の事は…」

「アインズ・ウール・ゴウン！アインズと呼ぶがいい！」

## 幕間 ナザリック守護者会議

ナザリック第九階層・談話室

「全員、揃ったかしら？」

ここはナザリック第九階層・談話室。現在ここにはナザリックにおける主な者達が集っていた。

守護者統括アルベド、第一・第二・第三階層守護者、シャルティア・ブラットフォーレン、第五階層守護者コキュートス、第六階層守護者アウラ・ベラ・フィオーラとマーレ・ベロ・フィオーレ、第七階層守護者デミウルゴス、執事セバス・チャンそして宝物殿領域守護者パンドラズ・アクターなどが揃っている。

「統括殿、ラミエル殿がまだでございます。」

「遅刻よ。何をしているの。」

ここに呼んである筈の領域守護者ラミエルの姿が見えない。今回はパンドラとラミエルのためにアインズが用意した席だ。当の本人がいなくては意味が無い。

「ゼルエル様のご命令で遅れているのでしよう。」

パンドラの発言は周囲の空気を変える。

「アインズ様のご命令に匹敵するご命令なの？」

アルベドはなんの悪気も無く発言する。ゼルエルはアインズと一応同等の存在だ。それでゼルエルの命令をないがしろにするアルベドの発言は不敬と取れるだろう。

「詳しくは私も……ただ、ラミエル殿に何かをしたいらしく、アインズ様を探しております。」

アルベドもアインズの名を出されては何も言い返せない。場の雰囲気が悪くなり、数分間、誰も声を出さなかった。

く数分後く

「遅くなりました。」

突如聞こえる聞いたことの無い声。それと同時に談話室の扉が開く。

現れたのは水色の髪と白い肌、そして赤い目を持つ一人の少女だった。

突如現れた少女に守護者達は警戒の視線を送るも、次の言葉は守護者達を驚愕させる

：

「初めまして……ではありませんね。ゼルエル様に創造されしシモベ、領域守護者ラミエル。ここに参上しました。」

「あ、あなたが!?」

玉座の間で見たラミエルの姿は青い正八面体のような形だ。しかも会話ができなかったのに、今はスラスラと喋り、人間の姿をしている。

「仰りたいことは理解できます。まずは説明の時間をもらえませんか？」

「え、ええ…」

「ありがとうございます。では、まず…この姿はゼルエル様から頂いた『擬人化』という設定とアインズ様の幻術によるものです。」

「『ギジンカ』?」

「はい。人とは掛け離れた容姿を持つ者を人の姿に近づける技だと聞いております。」

ゼルエルはユグドラシル時代、ラミエルの設定を書いた時、『擬人化できる』と書いたのだが、それに相当する姿や能力を持たないラミエルは当然、擬人化しなかった。しかし、NPCが設定通りに動くようになって、当のラミエルも擬人化できるようになったのだ。

「まさか…ラミエルが擬人化するなんて…原作と違う!」

と、ゼルエルは擬人化の設定を悔やんだが、それは別の話…

「さすがは至高の御身！我々が知らない技をお持ちだとは！」

「はい。しかしゼルエル様は必要な時以外はこの姿をとるな、と仰っております。」

「なるほど、ふむ…」

「？」

デミウルゴスが何かを考えているのを感じ、首を傾げる一同。

「まさか…至高の御方々はこの世界に転移することを知っておられたのか？」

「どういふこと!?？」

デミウルゴスから出た爆弾発言。守護者一同は身を乗り出し、詳しく話を聞こうとする。

「なに。ラミエルに『擬人化』という設定を付け、我々との意思疎通を容易くしたのは、この事態を予知しての事ではなかったのではとおもいましたね。」

「しかし、ゼルエル様ご自身はその術を使っておりませんでしたか？」

「ゼルエル様にはシューティング・スターがあります。しかし、一シモベであるラミエルに貴重なアイテムを使うのは勿体無いでしょう。故に『擬人化』の設定をお付けになったのでしょうか。そして、ゼルエル様はそれを本意と思っておいでですが、ならばそれを進言してお方がいます。ゼルエル様に進言できるお方など…」

「アインズ様以外にはいらっしやらないわ！さすがは我が愛するお方！では私の設定も



…くふふふー！」

この後シャルティアとアルベドが喧嘩（ガチ）をして会議が大きく遅れたのは承知のとおり：

ちなみにゼルエルがラミエルの擬人化に大きく動揺し、アインズがそれを必死になだめていた現場をみた領域守護者達は（違うんじゃないかなー。）と思ったが、口に出さなかつた。

—————

「それでは会議を始めます。」

予定より一時間遅れて（主にアルベドとシャルティアの喧嘩が原因）会議が始まる。

「司会進行役は私、アルベドが務めるわ。では早速、新たにナザリックの行政、防衛に携わる領域守護者二名。それぞれの能力の説明をしてくださる？」

「了解しました、統括殿。では私、パンドラズ・アクターからさせていただきます。私の能力はドツペルゲンガーとして、至高の41人のお姿を模し、その能力を8割方使用することができます。」

「では次は私が。私、ラミエルは自分を中心とする一定範囲を索敵し、必要とあればスキ

ルで敵を狙撃し、殲滅します。」

「なるほど…パンドラズ・アクターの方はよく分かったわ。ただ、ラミエルの方はいまいち、ピンと来ないわね。」

「それについては私も同感だ。索敵ならアウラがいるし、殲滅もうちには揃っている。それにゼルエル様が仰った『一定条件下の戦闘』とはなんだね?」

「デミウルゴスの発言に思わず考える守護者達。ラミエルは一定条件下ならば守護者より強力なのだか、いまいちピンと来ない。皆自分が最も強いと思っっているのだ。」

「そうですね。説明不足でした。私はアウラさんのように敵の情報を知るのでは無く、敵の位置を把握することに重点を置いています。そのため、索敵最大範囲は半径1キロです。そして敵の位置にスキル《加粒子砲》を撃ち込み、殲滅します。一定条件というのは、敵が1キロ以上離れた場所にいる時です。」

「なるほど、つまり我々でも1キロ以上離れていたら、君には敵わないと?」

「はい。」

「……」

守護者は困惑する。確かに1キロ先から狙撃されると、こちらは反撃もできないだろう。しかし、肉を切らせて骨を断つような戦い方をすれば、ラミエルに近づけるのでは無

いかと考えている。

「よくわかりませんが、狙撃に耐えれば問題ないではありませんか？」

「確かに、アルベドやシャルティアは防御力やHPが高いから狙撃だけじゃ倒せないんじゃない？」

「いえ。スキル《加粒子砲》はゼルエル様の《破壊光線》と同じ様なスキル。1キロあればアルベドさんやシャルティアさんでもHPが先に尽きます。さらに、《加粒子砲》は広範囲にばら撒く事も可能なので、スピードがあつても避けるのは困難かと。」

ラミエルの言葉を聞いてゾツとする守護者一同。確かに守護者達は全員戦士職や魔法職をメインに取っており、遠距離狙撃の職を取っていないため、事実上、ラミエルは1キロ先から好き放題できるのだ。

「私に素で勝てるのは堅牢なA・Tフィールドを持つゼルエル様と、2キロ先から狙撃できるペロロンチーノ様、そして隠密能力に長けた御方々だけです。」

「…つまりアインズ様にも勝てるか？」

アルベドの言葉には殺気を纏っている。恐れ多くも一シモベが主人であるアインズより強者だというのだ。

「…はい勝ってます。」

それを知ってか、あえてラミエルは正論を言う。

「貴様！」「ただし！」

アルベドが飛びかかろうとするのをラミエルが言葉で制する。

「アインズ様が何のアイテムも使わず、身一つで私に挑む場合です。アイテムを使えばアインズ様や他の御方々にも十分勝機はあります。それにアインズ様に素で勝てるのは、アルベドさんやシャルティアさんも同じでは？」

「うっ！」

ド正論を言われ、アルベドは口を閉ざす。

死霊系魔法詠唱者であるアインズにとって、戦士職LV・100のアルベドや信仰系魔法詠唱者であるシャルティアは天敵と言えるだろう。

「この際はつきり申し上げます。私はアインズ様の味方でも、創造主ゼルエル様の味方でもありません。」

いきなりの爆弾発言に守護者達は困惑する。彼らはアインズとゼルエルを主人とし、彼らに味方する者だ。それを彼女はどちらも味方でも無いと言った。

「私はゼルエル様からギルド『アインズ・ウール・ゴウン』の味方をせよと創られました。もし、御二方のどちらかがギルドに敵対した場合、私はその者を排除します。たとえば、創造主であつても……」

ラミエルの考えは彼ら、普通のシモベとは全く違う。彼女はギルドが存続することが

目的であり、その邪魔者はどんな人物だろうと排除するよう創られた。

これはゼルエルが引退する際、自分に代わってギルドを守って欲しいと思い、この設定を付け加えたのだ。

「私の話は以上です。」

ラミエルの言葉はさすがにデミウルゴスやアルベド、パンドラに至る全てのシモベの理解を超えたものだった。

彼らはアインズやゼルエルといった至高の41人に忠義を尽くすことが存在意気なのだ。

もし、ここに41人全てがおり、意見が21:20に別れたとしたら、彼らは自分の創造主の元に味方するだろう。(多分、アルベドはモモンガに味方するだろうが。)

しかし、ラミエルはゼルエルに味方せず、21の派閥に味方するだろう。

自分の創造主を”完全な支配者”と認めない。あくまで、”今の支配者”と考えているのだ。

「…なるほど、あなたの考えはよく分かったわ。しかし、今の状況ならどう? 至高の御方が二人しかいらっしやらないこの状況なら、あなたはどちらの味方なの?」

「分かっていますね。私はギルドの味方です。たとえば御二方がギルドに敵対したら、私はナザリックを守護します。ここは他の至高の御方々の拠点なのですから。」

ラミエルの呆気なく、淡白な答えに理解が追いつかない守護者一同。その不敬とも取れる考えはすぐに改めるべきだと考えても、それは正しいと思う自分がいるのだ。

ナザリックはいわば、至高の41人の全ての結晶。たとえ今いる二人がナザリックと敵対したら、2:39となり、ラミエルが39、つまりナザリックに味方するのは至極当然なのだ。

「……この事を御二方は知っているの?」

「勿論です。そうあれと創られたゼルエル様は勿論、アインズ様にもゼルエル様が一通りご説明なさっております。」

「そう……ならば、この話はこれでお終いよ。会議を続けましょう。」

「そうですね。至高の御方々がご周知なら、我々が口を挟むべきではない。」

彼らはこの問題をひとまず置き、会議を再開したのだった……

く会議中く

「では、まとめめるわ。ナザリックの行政は私とデミウルゴス、パンドラズ・アクターが務め、防衛はコキュートスを責任者とします。ラミエルも防衛担当に回って。他の守護者はアインズ様やゼルエル様のご命令を主として活動しなさい。無論、至高の御方々のご

命令が最優先よ。」

「「「「「了解。」」」」」」

「よろしい。最後に一つ、ラミエルに聞いておきたい事があるの。」

「何でしょうか？」

「あなた、私達に何か隠してない？」

「…」

シンと静まり返る談話室

「質問の意図がわかりません。」

「なら、質問を変えろわ。ゼルエル様が何かを隠してらっしゃるのを知っていない？」

「…それを知ってどうすると？」

「なにも。ただ、アインズ様にも知る権利は当然あるわよね。」

つまりアルベドは、ゼルエルがアインズに何かを隠していないか？と聞いているのだ。

「…ゼルエル様は何も隠しておりません。それにゼルエル様はナザリックを深く愛していらつしやいます。ゼルエル様がアインズ様に隠し事などする必要がありません。」

「…そう。わかつたわ。今回はそれで納得してあげるわ。では、会議を終了します。皆、持ち場に戻りなさい！」

なかば強引に会議を終わらせたアルベドはそそくさと部屋を出て行く。それに続き、全員が部屋を出た。

「…ラミエル殿。なぜあの様な嘘を？」

「嘘ではありません。ゼルエル様はアインズ様には何も隠しておりませんよ。」

第九階層の誰もいない廊下で小声で話すのは、パンドラとラミエルだ。

「しかし、いくら秘密といえ、あなたの弟君でしょう？」



「あの子は危険なんです。詳しくは話せませんが、存在が危険なんです。ゼルエル様やアインズ様でもあの子はダメです。」

「まるで統括殿の妹君ですな。」

「ルベドのことですか？あれはまだ可愛いもんですよ。『第八階層のあれら』には敵わないんですから。あの子はいけない。あれに勝てるのはゼルエル様とたち・みー様とのコンビぐらいです。それも、刺し違えなければいけないのですから。」

「はあ。なぜまたあの様なシモベを生み出したのでしょうか。私も役職上少ししか知りませんが。」

「さあ。至高の御方々には何か考えがあるのでしよう。御方々が何もしなければ大丈夫ですよ。」

「はあ。宝物殿のアソコは要注意ですね。」

—————

「はあ、ラミエルく、まさか擬人化するなんてく、いや、何とか綾波の格好させたからまだ可愛いんだけどなく」

「いやあ、驚きましたよ。いきなり『幻術でラミエルに色をつけてくれ！』って土下座するんですから。」

「いやだって…擬人化しても青いままだったんで、少し気持ち悪くて…」

「それにしても、人化のスキルや容姿を持って無くても、設定に『擬人化できる』って書くと擬人化するんですね。」

「それなんですがね。多分、ラミエルだからできたと思うんですよ。あいつ、体を自由に変えられますからね。」

「なるほど、スライムの固体バージョンってことですか？」

「そうですね、使徒ですけど。」

「そういうえば、ラミエルの擬人化、結構可愛いですね。なんかアルベドやシャルティアには無い可愛さがありますよ。」

「あの二人のキャラが濃すぎるんですよ。しかもすごい推しが強いし。ラミエルはおしとやかですからね。」

「アルベドの設定を弄らなければ、アルベドもおしとやかだったのかな？」

アルベドの以前の設定『ちなみにビッチである。』

「無いな。」

「無いですね。」

ナザリック正妻戦争にラミエルが乱入するのはまた後日…

## 使徒、決定

### 第九階層・執務室

「冒険者になろうと思うんですよ。」

「ほう…」

いきなりの発言をしたのはナザリックの主であり、いまやギルドの名を冠するアインズだ。

それに答えるのは同じくナザリックの主でアインズの友であるゼルエル。

「やつぱり、人間の街に直で情報を集めたいんですよ。」

「ほうほう。で、真の目的は？」

「…息抜きしたいです。」

「やつぱり。」

アインズは日頃重なる守護者の羨望の眼差しと、支配者ロールがどうにも疲れるようだ。

「パンドラと話したりしてます？ 私はラミエルと話して、ストレス解消してますよ。」

「へえー。パンドラは…だつてな〜」

NPCは創造主に似る。したがって、創造主はNPCの考えがなんとなくわかり、NPCも自分の創造主の事はなんとなく理解できる。

しかもゼルエルのNPCは同じ『使徒』の種族。ゼルエルからすればこれ以上の相談相手はいないだろう。

「黒歴史なんですね。わかります。でも一度話してみたらどうですか？言動はアレですけど、話は理解してくれますよ。」

「うーん、考えときます。それで冒険者になる事なんですけど……」

「いいんじゃないですか？この世界のレベルは低そうだし、モモンガさんの魔法なら楽勝でしょ。」

「いや、それなんですがね。この世界のレベルに合わせて、戦士で行こうと考えてるんですよ。」

「なぬ!?」

「あんた喋り方安定しませんね。」

「まあいいじゃん。それで戦士職とな。あんた魔法職しか取ってないでしょ。」

「LV. 100にもなると、LV. 30程度の戦士職の筋力はあるんですよ。鎧や剣は魔法で作れば使用できますしね。」

「へえー。俺は盾役タンクだったから無理だな。持っても盾だけだわ。」

「あんたは特殊すぎるんですよ。スキルで盾を出すんだから、何も持って無い盾役タンクなんてあんただけでしょ。」

「持って無いんじゃない、持てないんだ。ベルトアーム使うと捨てちゃうから、下手に神器級の盾とか持てないんだ。」

「そうでしたね。最初に盾捨てちゃって、それ拾われた時は爆笑ものでしたね。」

「はっはっはっはー!」

「…話戻しましょうか。」

「そうですね…」

「んで、戦士職で行くのはいいとして、まさか一人で行くんですか?」

「まさか。誰か共を付けますよ。」

「誰?」

「人型は最優先です。普通に人間になれる容姿を持っている必要がありますね。」

「だろーうね。それに少なくともプレアデス以上の戦闘力は欲しいですね。」

「そこで提案なんですけどね…」

「ほう。」

「ラミエルを貸して「駄目です。」早っ！」

「あいつのあの姿は可愛いけど、駄目です。確かに乙女チックで可愛いですけど、駄目です。おしとやかで可愛いですけど、駄目です。」

「…自慢ですか？」

「ははは、ソナワケナイデスヨ」

「はあー。結構いいと思うんですけどね。後衛職だし、人間を悪く見てないから、潜入にはいいと思うんですけどね。」

「人間についてですか？」

「ええ。基本、ナザリックはみんな人間を下等生物と思ってるでしょう。人間に絡まれても、殺さないとか怪我をさせないのは難しいんですよ。その点、ラミエルは一貫して無視しますからね。有難いんですよ。」

「なるほど、で、本音は？」

「…なんのことです？」

「とぼけないでくださいよ。ラミエルの攻撃方法はレーザーですよ。そんな未知の攻撃をしてくる奴を人間の街のお供とか、不自然ですよ。」

「…やっぱそうですよね。バレますよね。」

「なんでそんな危険なこととしてまで連れて行きたいんですか？」

「あのラミエルの考えって、ある意味、私の求めてる考えと同じなんですよ。ギルド存続のためなら、何が何でもするあの考えが。他のNPC達はどちらかと言うと、私達に対して忠義を向けてるじゃないですか。ラミエルはいざとなれば、ナザリックに対して忠義を発揮します。他のギルドメンバーの事を忘れない考え方が気に入ったんです。」

「…」

アインズは自分一人よりも、ギルドメンバーの方を大切にする。だから、一人で長い間、ナザリックを維持できたのだ。

それに対して、多くのNPCは今いるアインズとゼルエルに忠義を尽くそうとする為、現在いない他のギルドメンバーに対しての忠義は少ない。今現在存在するギルドメンバーと、いるかどうかわからないギルドメンバーの違いは大きいのだ。

しかし、ラミエルは違う。彼女にとつて、いるいないの差はほとんど無い。全てのギルドメンバーを等しく大切に思っている。たとえこの場になくとも、それは変わらない。いい。

「…わかりました。だけど、私達だけでは決められません。守護者やプレアデスにも聞きましょう。」

「…わかりました。」

「あと、そうだ。モモンガさんって、ラミエルの事どう思う?」

「いや、普通に好きですよ。まともな容姿で大人しいから、アルベドやシャルティアやアウラと違って、親しみやすいというか……なんというか……」

「……把握した。」

—————

アインズとゼルエルが呼びかけると、五分たらずで、守護者全員とプレアデスが集結した。

「アインズ様、ゼルエル様。一体どのような用件で御座いましょうか？」

守護者統括であるアルベドが代表として問いかける。

「うむ。これからの活動に関することだな、お前達に相談したいのだ。」

「私とアインズさんだけじゃ決められ無い、重要なことだ。」

シモベは全員、仕事モードに切り替わる。

「さて、議題だが今後、人間の街で情報収集を行う際、私が冒険者となり、街に行く。誰が共になるか、というものだ。」

「まずは私達の考えを聞いてもらいたい。これはあくまで私達だけの考えなので、他に案があれば遠慮せず言ってくれ。」

シモベは驚き、歓喜する。



「ではまず…冒険者になる際、当然、人間に偽装する必要がある。そのため、容姿が人間の姿を取ることができない者は残念だが、対象外だ。」

最初の条件でコキュートスをはじめとする異業種の姿を持ち、偽装の手段を持たない者が肩を落とした。

「次に任務を頼みたい者を発表する。私達とは別の方面から情報収集をしてもらいたい、セバスとソリュシャン。武技の使い手の探索にシャルティア。カルネ村の連絡役にルプスレギナ。ナザリック周囲の調査にアウラとマーレ。羊皮紙の作製にデミウルゴス。ゼルエルさんの護衛兼補佐にシズ。そしてナザリックの運営にパンドラとアルベドだ。」

「お待ち下さい!!?!」

アルベドが声をあげ、異議を唱えるがアインズが手で制する。

「アルベド、気持ちはわかる。だがもう少し待て。」

「…かしこまりました。」

「さて、残ったのはユリとナーベラルとラミエルだが、もう一つ条件がある。私は人間の戦士として街に行くため、後衛職が好ましいということだ。」

「私達からは以上だ。アルベド、発言を許す。」

「かしこまりました。では…アインズ様の護衛となれば、それ相応の実力が必要です。」

ならば前衛職の者、さらにLV. 100相当の実力は必要です。ならば、私を！」

「アルベド！ずるいでありんす！ならば私だって！」

「あなたは武技の使い手の搜索でしょ！」

「アルベドだって、アインズ様からの任務があるでしょ！」

「私の任務はパンドラがいるわ。ならば問題無いでしょう！」

「大ありでありんす！ナザリックの運営をおろそかにするでありんすか！」

「ナザリックにはおそらく、ゼルエル様も残られるわ。ならば私が抜けても問題無いでしょう！」

「静粛に!!?!」

アインズの言葉で二人は静まりかえる。

「お前達、もう少し頭を冷やせ！お前達の任務は全て大切な事だ！それを投げ出すな！」

「もっ、申し訳ありません！」

「失礼いたしました！」

「はあ…デミウルゴス。いつもこんな感じなのか？」

「はい…全く学習しておりません。」

アルベドとシャルティアはアインズの事でいつも喧嘩している。

「デミウルゴスはどう思う？」

「非才な私などでよければ…… 私はナーベラルが適任かと思えます。」

「ほう…… 続けてくれ」

「はっ。あの三人の中で後衛職はナーベラルとラミエルの二人で、この世界で人間に最も近い能力は魔法職のナーベラルかと。」

「なるほど、さすががだな私達と同じ考えだ。」

「!!」

守護者全員に電撃走る

「アインズさん。どうしますか？」

「……」

「私達もデミウルゴスと同じ考えだ。ナーベラルがアインズさんの共に相応しいと思うたが、もう一つ条件があるんだ。」

「もう一つ、でございますか？」

「ああ、それはアインズさんの好みだ。」

「!？」

再び守護者に（アルベドやシャルティアには特大の）電撃が走る。

「アインズさんの意思は全てにおいて優先される。そうだろ？」

「はっ！その通りです。」

「だそうですよ、アインズさん。」

「…」

アインズに視線が集まり、次の発言を待つ。

「… 決めたぞ。ナーベラルとラミエルの二人を連れていく。」

「はあ!?!」 「なっ!?!」

「魔法職のナーベラルがいれば戦闘の幅が広がりますし、L V・100のラミエルがいればいざという時も安心ですからね。」

「ちよ、おま、二人共? マジですか?」

「マジですよ。別に一人とは言ってないし、私の意見は最優先なんでしょ?」

「はは… してやられたな。」

「さて、皆もこれで満足か?」

守護者とプレアデスは次々と賛同の意を示すも、一名だけ反論し続けていた。

「どうしても納得してくれないか?」

「アインズ様。どうしても、私を連れていっては頂けませんか?」

「こんな調子で五分間粘っているのはやはりアルベドだ。」

「アルベド。少し…」

「何、デミウルゴス?」

デミウルゴスがアルベドに何かを耳打ちする。

「わかりました。いってらっしゃいませ。」

「ええ!?!」

「デミウルゴス、何を言ったんだ?」

先の魔法の言葉を聞きたいゼルエルはデミウルゴスに聞きに行く。

「いえ、なに。『良妻たる者、家で夫の帰りを待つ者では?』と言ったままです。」

「ええ〜」

「しかし、どうか無礼をお許し下さい。」

「へ?」

「あの場を凌ぐためとはいえ、アインズ様の伴侶を勝手にアルベドにしてしまう発言をしてしまいました。やはりアインズ様の伴侶は同等の存在であらせられる、ゼルエル様こそが相応しいでしょう。」

「え?」

「今回の一件も、ゼルエル様がアインズ様の伴侶となるために、あえて御二方が別行動をとり、より良い関係を築くためになさるのですね。さすが至高の御方。そこまで先の事を考えておいでとは。」

「…」

「ゼルエル様?」

「…」

「はっ! 気絶しておられる…!」

あまりにも突拍子も無い話に現実逃避を通り越して、気絶してしまったゼルエルだった。

その後、ゼルエルがアインズにこの事を相談して、アインズが精神の沈静化を起こすのは承知の通り。

## 使徒、捕食

リエステイーゼ王国

城塞都市エ・ランテル

冒険者組合のあるこの都市に、ある一組の冒険者が新たに冒険者登録してきた。

一見、代わり映えのない日常に思えるだろう。しかし、その冒険者の一団は非常に変わった。

先頭を歩く黒一色のフルプレート製の鎧を纏う戦士は背に大振りのバスターソードを持ち、まるでそんな物ないかの様に悠々と歩いていく。更に、後ろに控える二人の美女達が注目の目を一身に集める。一人は黒髪を後ろでまとめ、どこか嫌そうな表情をしており、もう一人は同じ黒髪だがこちらは肩にかかるかどうかの長さであり、無表情である。

周りの男達は二人の女性に恍惚とした目を向け、あわよくばと思うも、二人は前を歩く男に信頼の眼差しを向けているのがわかると、女性に向けた目を男に嫉妬の意志を込めて向け直した。



くとある宿屋」

「ここは低い階級の冒険者御用達の宿屋。新人の冒険者達が安い金で泊まれ、ここで仲間と出会う事もあるという宿屋だ。」

「一階の酒場には仕事帰りの冒険者達が酒を飲んだり、自分の自慢話をしたりと、賑やかな場所だがある三人によって、その賑やかさは静まり返る。」

「宿か？相部屋なら…」

「できれば三人部屋を希望したい。出来ないなら四人部屋で頼む。」

「…三人共、銅カッパのプレートか。なるほど、見た所あんたは戦士だろ。後ろの二人は？」

「…魔法詠唱者マジックキャスターと野伏レンジャーだ。」

「ならせめてあんたは相部屋になりな。そうすれば、他のパーティと関係ができるだろう。」

「なるほど。だが、三人共一緒の部屋がいいんだ。すまないな。」

「ふん。生憎、三人部屋は無いんだ。四人部屋ならあるか？」

「それで構わない。いくらだ？」

「…一日十二銅貨。前払いだ。」

男はカウンターに十二枚の銅貨を払う。

この時の周りの人間は、この男は貴族のボンボンで後ろの二人はお付きの女だろうという考えだ。

三人が上の階に行こうとした時、冒険者風の男が脚を出して一団の行く手を阻む。  
(やれやれ)

男は脚を出してきた男の脚を蹴りながら前に進む。

「いつてーなー。何するんだよ。こりゃ、その姉ちゃん達に介抱してもらおうしかねえな。」

明らかな言いがかりをつけ、共の女達を貰おうと画策する冒険者風の男。すると…

「ふははは。いや失敬、あまりに雑魚に相応しいセリフに笑いを堪えきれなかった。」

「ああー！」

鎧の男は絡んできた男に挑発するようなセリフを言う。貴族のボンボンと思ったのに、萎縮するどころか挑発してきた男に怒りを覚える冒険者風の男。

しかし次の瞬間、男の胸ぐらを鎧の男が掴んで持ち上げる。

「お前となら、遊ぶ力も出さなくて良さそうだ。」

そう言うのと、鎧の男は掴んだ男を奥のテーブルにぶん投げる。

「さて、次はどうする？」

貴族のボンボンと思っていた男が大の男一人をぶん投げたのだ。周りの人間はこの

鎧の男を貴族のボンボンから手強い商売敵に考えを改めた。

「ちよつとあんた!」

そんな中、一人の女性が大声をあげながらやってきた。

「あんたのせいで私のポジションが割れちゃったじゃない!」

ふとさつき投げた男の方を見ると、机を破壊してその上にあつたであろう青いポーションの瓶が割れ、中の液体が床にぶちまけられている。

「あたしが食事を抜き、酒を断ち、儉約に儉約を重ねて今日買ったポーションを壊したのよ!」

「ならばこいつらに請求したらどうだ?」

「金貨一枚と銀貨十枚よ。いつも呑んでくれてるんだから、金なんか持つてないでしょ。あんたご立派な鎧着てるんだから払えるわよね。現物でもいいわよ。」

彼女の言い分は正論だ。少なくとも無理矢理絡んできたさつきの男よりかはマシだ。

彼女が怒りに我を忘れていなければ気付いただろう。彼女の後ろの女性二人の変化に。長髪の女性は今にも斬りかかりそうな形相をしており、短髪の女性は一見無表情だが、その目にはまるで機械のように冷たく、人間には無い無機質さを出していた。

幸運なのはこの変化に誰も気付かなかつたことだろう。

「わかつたわかつた!これでもいいだろ?」

男が慌てて懐から赤い液体のポーションを取り出し、女はもぎ取るようにそれを取った。

「…まあ、いいわよ。」

—————

### 宿屋・二階

四人部屋でそこそこの広さの部屋に三人の男女がいる。一人分多いがそれだけ高く払ってでもこの一団は三人一緒が良かったのだ。

「このような場所に至高の御身が滞在されるなど…」

「全くです。せめて清掃要員をナザリックから頼む必要があるかと。」

「そう言うな二人共。あまりは変な事で目立ちたく無い。」

そう言うのと鎧の男、アインズはヘルムを解除し、骸骨の素顔をさらす。

「あの不快な女はどういたしましょう。」

「彼女は一応、我々より格上の鉄のプレートだ。後輩たる者、少しくらい顔を立ててやろう。」

「しかし、彼女にユグドラシルのポーションを渡したのは危険では？」

「…なるほど、確かにな。ならば隠密能力の高いシモベに監視させておくか。手配し

てくれ。」

「かしこまりました。」

「時に質問なのだが、人間をどう思っている?」

「ゴミです。」「取るに足らない存在かと」

(やつぱりかゝ!)

アインズが人間の冒険者になるにあたって、選ばれたナーベラルとラミエルの二人。

二人の内の一人であるラミエルは自分の創造主であるゼルエルから一通りの処世術を教えられ、ついでにゼルエルの慎重な考えを伝え、極力注意するよう伝えられた。

ナーベラルを含むナザリックのシモベははつきり言つて傲慢な考えを持っている。

『至高の御方最強! 至高の御方に創造された私達が人間の雑魚に負けるはずが無い!』  
的な考え方がほとんどであり、それを否定することは彼らの存在意義を否定するのと同じである。しかし、それでは油断から予期せぬ事態を招く可能性がある。そのためゼルエルに直接創造されたラミエルにゼルエルが直接、慎重さを教えた。親同然のゼルエルの考えを一切違わず理解したラミエルはまさしく、ゼルエルと同じような考えを持っているシモベであり、アインズとしてもありがたい存在となつた。

「二人共、その考えをやめよとはいわぬが、敵対的行動を誘発する言動は慎め。」

「かしこまりました、アインズ様。」

「この街にいる時は私の事はモモンと呼べと言っただろ。」

「モモン様、その件についてゼルエル様から伝言を預かっております。」

「なんだと?」

「ゼルエル様が『いきなり様から呼び捨てはきついだろうからさん付けにしとけ』とのことです。」

「なるほど・・・」

「さすがは至高の御身!」

ゼルエルの用意周到さに素直に感心しているアインズことモモンはふと、二人の設定を思い出す。

「お前たちの設定はわかっているな?二人は姉妹で、姉のナーベは魔法詠唱者で、妹のユイは野伏<sup>レンジャー</sup>という設定だぞ。」

「それなのですが、私が姉で良かったのでしょうか。」

この設定を作るにあたって、ラミエルをナーベラルの姿に似せるためラミエルをエヴァンゲリオンのある人物の若い姿にさせた。黒髪で黒い瞳の姿はこの世界では珍しいため、姉妹と言っても信じるだろうという算段だ。

しかし、ラミエルは仮にも領域守護者。戦闘メイドたるナーベラルが姉というのはおこがましいと考えているのだろう。

「構わん。一応ラミエルより前線に出るナーベが姉の方が自然と考えているんだろう。」

「なるほど、さすがでございます。」

「うむ、だがすでに問題が発生している。」

「?。」

「金が無い! ユグドラシルの金貨は使えば、プレイヤーがここにいると宣伝するようなものだ。」

「仕事を見つckerぞ!!」

「はっ!」

「モモンさん。」

「…なんだユイ?」

「格好つけてこれからの意気込みを付けたのに、ラミエルの言葉で格好が付かなくなつた。」

「先程のポーションを渡した女ですが、街で一番というポーション屋に行き、その店員

の鑑定によればあのポーションはこの世界の物より良質であり、店員が異常な執着を見せていたようです。」

「…本当か？」

「更に追加の情報です。店員はポーションを要求しましたが、女はポーションの代わりとしてモモンさんの情報を渡しました。」

「その女、殺しますか？」

モモンは予想だにしない情報に驚き、ゼルエル存在に感謝した。モモンガ一人なら、ここまで情報を出せなかっただろう。三人寄れば文殊の知恵というが、二人でもかなり変わるものである。

「女は放置だ。監視は続行し、ポーションの事を言いふらす様なら拘束しろ。間違っても殺すな。会ったその日に死んだらよからぬ噂が流れかねんからな。」

「かしこまりました。そのように伝えます。」

「ついでだ。その街で一番のポーション屋とやらの名前はなんだ？」

「少々お待ちを、確認いたします。」



ナザリック

第九階層・執務室

「わかった。ではそのようにしろ。」

アインズがいないナザリックでは主な執務はゼルエルが取り仕切っている。と言ってもメインはアルベドとパンドラが担当し、ゼルエルは最終の確認をしているだけなのだ。

「なるほどな……この世界では下級のポーションでも伝説の品か。しかもこの世界のポーションは青いのか。」

アインズから頼まれたポーションの調査について派遣したシモベから一通りの報告を聞いて、改めてこの世界の違いさを感じていた。

「念のため、外で活動する者達にユグドラシルのアイテムを使用する際には注意するように呼びかけろ。」

「かしこまりました。ではそのように。」

今回執務の補佐にはアルベドが従っている。だが長い間一緒にいるゼルエルは気付いた。

アルベドに覇気が無いことを。

正確には時折、疲れた様な表情を垣間見せるのだ。こちらが注意を向ければすぐにやる気のある表情を見せる。

(これはあれだな。)

会社員だったゼルエルは気づいた。アルベドのは上司の前では仕事を休めず仕事を続ける哀れな者と同じだと。

(やっぱ休ませるか。働かせてもいいんだけど、モモンガさんは嫌がるだろうし、急ぎの仕事も無いし。)

「アルベド、私は少しナザリックを散歩する。急ぎの仕事も無いし、しばらく休め。これ

は命令だ。何かあったら伝言をよこせ。」

「かしこまりました。」

普段、アインズを相手にしているような笑みを浮かべるアルベドを見たゼルエルは自分の良い上司の対応に内心、ガッツポーズをしながら部屋を出た。

ゼルエルがそういうことに敏感な人間なら気付いただろう。

アルベドの疲れの表情は愛する夫を待つ妻の昼間のそれであり、笑みの表情の原因は自分がいなくなる事だと。

ゼルエルは共のメイドにいつものユリとシズを伴い、ナザリツク第九階層を闊歩していた。

ゼルエルの共のプレアデスはユリとシズ、エントマの三人なのだが、エントマには第九階層の大食堂に行ってもらっている。そしてゼルエル一行の目的地も大食堂だ。

「エントマの準備はできているか？」

「はい。三十分ほど前から食堂を立ち入り禁止にし、料理長らに申し付けられた料理を作らせております。」

ゼルエルゼルエルの密かな目的。それはゼルエルの飲食のやり方の確認である。

ゼルエルこと第10の使徒は捕食を可能としている。これは新劇場版で追加された設定だが、第10の使徒をモデルとしているゼルエルができない道理は無い。

だが、その方法を知っているゼルエルは今までこの方法を行えずにいた。

(行儀悪いよな)

捕食の際には顔から口の部分が出てきて、直接食べるのだ。

よく考えて欲しい。人間のように手で食べ物を口に運べず、犬のように食べるのだ。汚くならないわけがない。それにキモイ。そんな姿をメイド達がいるいつもの大食堂でできるだろうか？

そんな支配者の威厳の欠片も無い行動ができないゼルエルは大食堂を封鎖し、さらに使徒の味覚の確認のため、料理長に味の濃い料理を作らせた。

「来たぞ。」

大食堂に来たゼルエルは誰もいないだっ広い食堂に少し罪悪感を覚えつつ、用意されたテーブルに着く。

「どうぞ。」

出された料理は一言でいえば『骨付き肉を縦にした』といった感じだ。現実では決してお目にかかることもできない純粹な肉。それを豪華に丸焼きにしたもの。肉汁が光っているという表現がふさわしく、つけられたスパイスの香りは強く、それでいてしつこく無いものだ。

「素晴らしい！感激したぞ！」

料理長はゼルエルの歓喜の声に感激する。このナザリツクの支配者である二人はどちらも飲食不要の体であるため、この食堂には訪れる必要が無い。至高の御方から最も縁遠い場所と言われても反論できないだろう。それが今、至高の御方直々にここにきて、自分の料理を褒めてくれる。これほど感動的な出来事は決して無いだろう。

「あー、すまないが、少し席を外してくれないか？」

ゼルエルの言葉に全員が従い、食堂から出る。ゼルエルはわざわざ食堂を封鎖したのだ。何か目的があるのだらうと思ひ、みんなそそくさと出て行った。

誰もいない食堂で一人のゼルエルは食事を開始する。

「確かこうだったな。いただきます。」

（使徒、食事中）

食事を終えたゼルエルは外に待機しているユリ達を呼ぶ。

食堂に入ったユリ達は戦慄する。理由はゼルエルの周りの空気のせいだ。

「な、なにか味が悪かったのでしょうか？」

料理長が思わずゼルエルに問う。彼（彼女？）の作った今回の料理は過去最高傑作といっても過言ではないものだ。それでも至高の御方の口にあわなければ意味が無い。

「なに、料理の問題では無い。」

料理長はほつとするも、料理を食べる前のゼルエルと今のゼルエルは纏う空気が全く違う。

「味がしないんだよ。いやほとんど無いといった方がいいのか。」

使徒は完成した生命のため、永久に尽きないエネルギー機関を持つ。そのため、食事の必要は無く、味も感じる必要が無い否、いらぬ。

味といっても美味しい以外の刺激の味も味であり、味覚だ。味覚は生命維持には必要な物では無い。故に味覚は進化の過程で排除された。

「こんなに美味しそうなものを食べても味が感じられないんだ。不機嫌になっても仕方

ないだろ？」

ユリ達は納得し、恐怖の感情を抑える。ちなみに料理長達は料理を褒められたことで感動の絶頂にいた。

「まあ、何とかアインズさんに味覚を伝えられれば、この料理を味わえるだろうな。料理長、すまんが今は利用できないが、いつか来れるよう努力しよう。」

「もったいなきお言葉!!感謝の極みでございます!」

「うむ、その時は頼むぞ。」

ゼルエルはそう言うと、メイドを連れ、散歩を再開した。

## 使徒、前兆

## ナザリツク・第五階層

ナザリツクにおける守護階層の一つ、氷河の階層。ここに足を踏み入れた侵入者は冷気によるダメージと行動阻害のデバフにより、まともに進む事も出来ないだろう。

しかし、現在は経費削減のため、エフェクトがカットされている。

「邪魔するよ。」

プレアデス三人を連れただゼルエルが大雪球スノーボールアリスを訪れる。目的は勿論、ここの住人であり、この階層の守護者のコキユートスだ。

「コレハゼルエル様。コノヨウナ所マデ、ワザワザ。感謝ノ極ミニゴザイマス。」

コキユートスは自分の鍛錬を中止し、ゼルエルに深く礼をする。部屋にはコキユートスのお付きの雪女フロストウェアシオン郎がいそいそと椅子と机を用意してきた。プレアデス達も手伝いに行った。

「コキユートス。最近はどうだ？」

「変ワラズニ。タダ、満足ノイク鍛錬ノ相手ガオリマセン故…」

「なるほどなあ…」



コキュートスは設定上、武人であり、満足のいく闘いを望んでいる。だが、ナザリツクに侵入者が来て欲しいと言うのは守護者としてあるまじき思想だ。故に、コキュートスは困っているのだ。

「まあ、しばらく我慢してくれ。この世界で異形種絡みの作戦があつたら、お前を使えるからな。」

「オオ！有難キ幸セー！」

コキュートスは見た目が異形種独特の見た目なので、人間絡みの作戦に出られない。だが、異形種絡みならばコキュートスを使うのに何の問題も無い。

「そうだ。しばらくの間、別の趣味を見つけるのもありだぞ。」

「別ノ趣味？」

「ああ。スキル等を使用しないものなら誰でもできるからな。それが何処かで役に立つかもしれないぞ。」

「ナルホド……」

この世界では料理等のスキルが必要なものは、それを習得しなければ誰でも使えない。だが、裁縫等のスキルが無いものならば、知識さえあれば誰でもできる。事実、アルベドは裁縫ができるらしい。

「シカシ、私ニデキル趣味トイウノハ……」

「それは私にもわからん。お前の事はお前が一番良く知ってるだろ？」  
「…」

「まあ、ゆっくり考えな。それでも時間は潰れるだろ。」

「ハッ！アリガトウゴザイマス。」

「うん。ああ、そうだ。何か欲しい物とかあるか？」

「欲シイモノ？」

「なんでもいいぞ。多少、不敬でも構わん。」

「…では、不敬ですが一つ。」

「なんだ？」

「アインズ様トゼルエル様ノゴ子息ガ「ストーツプ！」

「お前もか!? お前もなのか!? デミウルゴスと同じなのか!?」

「ハア? 御二方ノゴ子息ナラバ我々ハ忠ヲ尽クスノ二何ノ問題モ無イカト。是非、ソノ際ハ私ヲ爺ノ役ニ！」

「お、おう。その話はすでにアインズさんと結論が出ている。『まだそんな時では無い』とな」

「オオ! カシコマリマシタ。」

「うん。では私は帰るからな。」

「ハッ! アリガトウゴザイマス。」

ゼルエルはそそくさと大スノーボールアリス雪球を後にして、第五階層から出て行つた。

(まさかコキュートスまで話に乗り気だとは。これは後でモモンガさんと相談だな。)

「ゼルエル様、この後のご予定は?」

付き添いのプレアデスの三人の代表のユリが尋ねる。

「宝物殿に行こうと思う。すまんが付き添いはシズだけにしてくれないか?」

「…かしこまりました。」

「すまんな。」

シズにリング・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを渡して、宝物殿に転移する。一人で行ってもいいのだが、今回はある確認のためにシズを同行させた。

「まずはパンドラに会わないとな。」

「この守護者に会おうと、宝物殿の奥に行こうとした時……」

「これは！これは！ゼルエル様。いかあが！なさいましたか！」

「……何でこんな最初の方にいるんだ？パンドラズ・アクター」

「はっ！過去、不要となったアイテムの中には、この世界にて使える物もあるのではない、捜索しておりました。」

「なるほどな……」

ユグドラシルでは基本、L.V. 100との戦いばかりだ。当然、こちらもL.V. 100であり、それに準じた装備とアイテムを身に付ける。

そうなれば、初期の頃にお世話になったアイテムは使わないか、使えない。普通は売却したり、捨てる物だが貧乏性のギルドメンバーはほとんど残して、この宝物殿に放り込んでいく。

しかし、この世界はほとんどが低レベルの存在で、それに準じた生活になっている。ならば、初期のアイテムも使えるだろうという考えだ。

「いいぞ。そのまま作業を続けてくれ。」

「はっ！了解いたしました。それで、ゼルエル様がシズ殿とご一緒という事は……」  
「……やはりお前も知ってるか？」

「宝物殿の一角であるあの場所ですね。存在は知っております。」

「やはりか。シズはギミックは知っているのか？」

「はい。ギミックだけは、知ってる。」

ブレアデスの一人、シズは設定上、ナザリックのギミックの全てを熟知している。当然、極秘扱いの場所のギミックもだ。

「やはり……シズ、この事は極秘だ。アインズさん以外には絶対に他言するな。」

「かしこまりました。」

シズはこの設定故、ナザリックから出せない。だからゼルエルの護衛兼補佐としてナザリックにいてもらっている。

「さて、あいつに会ってくるか。シズ、パンドラ、ついてこい。」

「はっ！」

宝物殿の最初の転移場所。ここには文字通り、山の様に積まれたユグドラシル金貨と、ゴミ同然のアイテムの置き場所になっている。

ユグドラシル金貨の山の向こうに、宝物殿の壁があるのだが、ゼルエルはこの壁の一

部を押す。何の変哲も無い壁は、三つのくぼみがある壁に変化する。

「では、お前達のリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをここへ」

シズとパンドラの指輪をくぼみの端にそれぞれはめ込む。真ん中にゼルエルの指輪を入れると、壁は消え真つ暗な部屋の入り口が現れる。

「お前達はここで待っていなさい。」

「かしこまりました。行つてらっしゃいませ。」

「わかった。お気をつけて。」

ゼルエルが入ると入り口は壁に戻り、暗い部屋は僅かに明るくなる。

すると、どこからともなく、三つの台が現れ、その上には三つのアイテムが置かれている。

もし、ユグドラシルのプレイヤーがいれば、絶叫しただろう。このアイテムは神器級ゴツクスのアイテムの中でも指折りの性能を持つアイテムであり、ギルドでは『三種の神器』にあまりやかり、『三種の神器』と呼んでいる。

しかし、ゼルエルはこのアイテムに目もくれず、奥の方に行く。

そこには三体のゴーレムが設置されている。

左側には山吹色と白色の二色を基調としており、頭部には目の様な赤いものが一つあり、大型の鎌を持っている。右側には青色を基調として、頭部には大きな一本の角があ

り、目の部分には赤いバイザーが装着されている。真ん中には紫色を基調とし、四つの目と四つの腕を持ち、腕には螺旋状の赤い槍を二本、二つの腕で持っている。

ゼルエルは左のゴーレムを操作し、右のゴーレムの首を切り落とさせる。

すると、右のゴーレムの胴体から赤いモノが飛び出し、大きな赤い球を作る。しばらくすると、赤い球は手のひらに乗る程度まで小さくなり、ゼルエルの手に収まる。

そして、ゼルエルは真ん中のゴーレムの口を無理矢理開けさせ、その口に赤い球を押し込む。

すると、ゴーレムは赤い球を噛み砕き、身体の色を神々しい白色に変え、後ろに二つの光輪が出現される。同時に右側のゴーレムは体色を黒に変え、別の頭部が出現する。

『汝、何なる者か？』

真ん中のゴーレムの光輪に、文字が浮かび上がる。

「我が名はゼルエル。アインズ・ウール・ゴウンの使徒にして、災厄の創造主なり。」

そうゼルエルが言うと、真ん中のゴーレムは上に移動し、一人だけが通過できる道が開ける。

この先のエリアは名を『辺獄エリア』といい、あるNPCの封印場所である。

エ・ランテル、冒険者組合

ここは冒険者組合。日々、多くの冒険者に仕事を斡旋して、そのサポートを行う場所である。

この場所ではいつも会話が絶えないのだが、今日は一つのチームの会話でいっぱいだった。

「すげえフルプレートだな。」

「あの女、可愛いな。」

「姉妹か？」

「どっかのボンボンだろ。」

主にフルプレートの男に向けられる嫉妬と小馬鹿にした声上がるも、男はそれを無

視、否…

（読めん…）

聞いてさえないなかった。モモンは仕事を張っているボードを凝視していた。

（ナーベとユイも字は読めないしな…）

モモンは一つの紙を剥ぎ取り、カウンターに置く。

「これを受けたい。」



「申し訳ありません。こちらはミスリルプレートに依頼でして」

「知っている。だから持って来た。」

「規則ですので」

「くだらん規則だ。」

「失敗した場合、多くの方の命が危険に晒されます。」

「ふん。私の連れの一人は第三位階魔法の使い手だ。」

「第三位階!?」

第三位階魔法は（この世界では）才能のある者が努力して辿り着ける位階魔法であり、若いナーベが習得していると言うのは、非常に珍しいのだ。

「そして、私は彼女に匹敵する戦士で、彼女の野伏レンジャーの才能はここにいる者の中で最高だろう。」

「!？」

第三位階マジックキャスターの魔法詠唱者に匹敵する戦士と、その彼が言う最高の野伏レンジャー。この一団を見る目は豹変する。

「私達はレベルに見合った仕事を望んでいる。」

「申し訳ありませんが、規則です。」

「そうか…我儘を言っすまなかつたな。なら、銅カッパーのプレートで最も難しい仕事を見

繕つてくれ。」

「かしこまりました。」

（よし！作戦成功！）

モモンは内心ガッツポーズをしながら、仕事を待っていると、ある一団から声をかけられる。

「ならば、私達の仕事を手伝いませんか？」

「うん？」

声をかけたのは、『漆黒の剣』と言う冒険者チームであつた。

「ではまず私から、『漆黒の剣』のリーダーであるペテル・モークです。そしてこちらがチームの目と耳である、野伏レンジャーのルクルト・ボルブ。」

ルクルトと呼ばれる男がナーベとユイに手を振るが、華麗にスルーされる。

「あちらが治癒魔法や自然を操る魔法を使う、森祭司ドルイドのダイン・ウツドワンダー。そして最後に魔法詠唱者マジックキャスターであり、チームの頭脳、ニニヤ・ザスペルキャスター。」

「ペテル、その二つ名やめませんか？」

「え？どうして？かっこいいじゃないですか？」

「こいつ、生れながらの異能持ちなんだぜ。」

「ほう。タレント。」

話によると、魔法の習得期間を半分にするタレント、つまり、魔法のみの経験値を倍にするタレントだ。

「まあ、この街にはもつとすごいタレント持ちがいますから。」

「ンファイレア・バレアレ殿であるな。」

「とうとう?」

「なるほど、彼の事を知らないということは、この街の人ではありませんね。」

「ええ、最近来たばかりでして。」

「わかりました。彼のタレントは『ありとあらゆるマジックアイテムを使用可能』というタレントなんです。」

「それは…すごいですね。」

マジックアイテムの中には、人間種のみが使用可能や異形種のみが使用可能といった物や、職業レベルを一定以上取得しなければ使用できないといった物も多い。それをすべて無効化するとしたら、敵なら厄介、味方ならば心強い能力だろう。

「その人間、危険かと。」

「ああ。ポーシヨンの事もあるだろうしな。」

モモンは昨日の情報で、バレアレという店に例のポーシヨンが持ち込まれた事を知つ

ており、それなりに警戒していたが、そのバレアレの人間にそんな希少なタレントを持つている人物がいる事は知らなかった。

（接触してきた時には警戒するだけにしようと思ったが、これは嚴重警戒だな。できれば取り込みたいが…）

アインズはアンデット故、ゼルエルは使徒故に、ポーションは必要無いが、消耗品であるポーションの補給は欲しい所であり、さらにおまけで希少なタレント持ちまで付いて来るのなら、極力傘下に加えたいと思っていた。

（後でゼルエルさんに報告しとくか。）

「ではこちらの自己紹介を。私がモモン。こちらの長髪の方がナーベで、短髪がユイです。一応、二人は姉妹で、ナーベが姉です。以後、お見知りおきを。」

「なるほど。こちらもよろしく願います。」

一通りの自己紹介を終えた一団は仕事の話に入る。なんでも、モンスター討伐で報酬金をもらうという仕事らしい。モモンがそれに同意し、顔合わせ（モモンだけ）を行った。

「南方にモモンさん達のような顔立ちが一般的な国があると聞きましたが…」

「ナーベとユイも異邦人なので、厄介事に巻き込まれないよう、顔を隠しているんです。」

実際はモモンの顔は幻術で作っており、視覚だけを誤魔化すものなので、触られない

ようヘルムを装着しているだけである。

ラミエルは色だけなので、隠す必要が無い。

「ところでモモンさんと姉妹の御二方はどのような関係なんでしょうか？」

「…仲間ですが？」

「ナーベさん！惚れました！一目惚れです！付き合ってください！」

「だまれナメクジ。身の程をわきまえてから声を掛けなさい。舌を引き抜きますよ。」

「…姉さん、言いすぎです。」

「厳しいお言葉ありがとうございます！ではお友達から始めてください！」

「ウジ虫が。目玉をスプーンで「姉さん、もう少し穏やかに。」…魔法で吹き飛ばします

よ。」

「くうく！その冷たい眼差しがまた「仲間がご迷惑を」

ペテルがルクルットを押さえつけて、この話は終わった。

「お互い、用意も揃ってますし、すぐ出立しましょうか？」

「はい。」

「モモンさん？」

先程の受付嬢がモモンに声を掛ける。

「ご指名に依頼が入っております。」

「一体、どなたが？」

「ンファイレア・バレアレさんです。」

「え？」

あたりが騒然とするも、一人近づいてくる人間に、ナーベがモモンの前に出て、剣を抜こうとするも…

「待つて下さい。」

「ユイ!？」

ユイがナーベの隣に移動し、剣の柄を抑える。もちろん、マントの中でだ。

「いくらなんでも無謀です。モモンさんの安全が第一ですが、自重して下さい。」

「そうだな、いきなり剣を抜くのは危険だぞ。」

「も、申し訳ありません。」

ユイはゼルエル直伝の処世術でそれなりに冷静に対処できるようになった。

「初めまして、僕が依頼させていただきました。」

「すまないが、私はすでに依頼を受けた身。光栄なお話ですが…」

「モモンさん！名指しの依頼ですよ！」

「それでも先に依頼受けた方を優先するのが当然でしょう。」

「しかし、折角の指名を…」

「であれば、お話だけでも聞いてみるというのはどうでしょうか？」

アインズはいきなり接触してくるとは思っておらず、しかも向こうから来るとは願っても無いことだったが、ここで釣られては危険と考え、あえて興味が無いふりをしていったのだ。

ンファイレア・バレアレの仕事は薬草採取のためにカルネ村近くまで行くので、その護衛を依頼したいというものだった。

(ポーシヨンのことは知らないふりか…)

「ペテルさん。私に雇われる気はありませんか？」

「とうとう?」

「私達はこの周辺の土地勘が無いので、あなた方のサポートが欲しいんです。」

「なるほど。ありがたい申し出です。」

「こちらも問題ありません。」

「最後にンファイレアさんにお聞きしたいのですが？」

「何です？」

「なぜ私なのでしょう？」

アインズは核心にせまる。

「お客さんが話していたんです。あつという間に上のランクの冒険者を吹っ飛ばしたと。それなら十分な実力ですし、ちやうど今まで頼んでいた冒険者さんが他の街に行つてしまいましたし。それに銅のプレートカッパならお安いと思ひまして。」

（あくまでポーシヨンのことを知らず、かわりの冒険者としてちやうどいい存在か…）

モモンが事情を把握しようとしている隣では、すごい形相で睨んでるナーベと机の下で抑えているユイがいた。

「あの下等生物が…モモン様に虚偽を…」

「抑えてください。モモンさんの手の上で踊らされていると考えて。」

（ほんと助かるなー）

ゼルエルの気配りに感謝しつつ、これからの計画を考える冒険者モモンであった。



## 新伝説 モモン・ザ・ダーク・ウォリアー

エ・ランテルから大分離れた草原。そこにある一本道がある一行が移動していた。

「ペテルさん、この先の小川で一休みしましょうか？」

「そうですね。いいですか、モモンさん？」

「ええ。了解しました。」

モモンと『漆黒の剣』の一行はカルネ村近くの森への薬草採取というンフィーレア・バレアレからの依頼を達成するため、その森へと進んでいる最中だ。

現在は小川で馬を休ませている。

「モモンさん、ここから先は少し危険地帯となります。」

「わかりました。」

モモンことアインズは《クリエイト・グレーター・アイテム／上位道具創造》によって黒い全身フルプレート鎧を創り、戦士を偽っている。だがその代償として、アインズは僅かな魔法しか使用できない。魔法職しか取っていないアインズには非常に痛い状態だ。しかし、アインズはこの状態でどれだけ戦えるかという事も知りたかったのだ。

勿論、いざという時はそれなりの対処方法は考えてある。危険な時はまず、ナーベラ

ルが第五位階魔法を放ち、それでだめならラミエルが相手に見合った加粒子砲を撃つ算段だ。アインズは最終手段だ。

「大丈夫だって、ナーベちゃん。俺が目であり耳である限りは問題ナツシング。」

「このヤブ蚊が。叩き潰す許可をいただけますか？」

「姉さん。せめて虫以外で罵倒して下さい。」

「あちゃー」

(ラミエル…違うと思うぞ。)

だんだんラミエルの考えが雑になっていく気がしたアインズだった。

一休みした一行は会話を弾ませる。モモンはニヤと魔法やこの世界の常識について話を聞いている。ルクルットは相変わらずナーベに話しかけてくるが、ナーベの異常な毒舌をユイがなだめていくのが続いている。

「なあ、ナーベちゃんてさ、モモンさんの恋人なのか？」

「こ、恋人なんて！私なんかよりもふさわしいゼルエ「姉さん」はっ！」

一瞬だった。L V・63とL V・100の間にしかわからない雰囲気の流れた。ナーベ達の方に注意が向いていなかったモモンにもわかるほどの殺気にも似たものを感じた。あまりに一瞬だったので、気付いたのはモモンとナーベだけだった。

「ルクルトンさん。詮索はやめて下さい。もう少しまともな話題はないんですか？」

「いやあごめんね。というか、ユイちゃんは気付いてたの？」

「当然でしょう。」

ルクルトンとユイの間に意味不明な会話が流れるが、同時にモモンにナーベから  
『伝言』<sup>メッセージ</sup>が入る。

「モモンさん。先程は失礼致しました！」

「ナーベか。ユイがいて助かったな。で、わざわざ伝言<sup>メッセージ</sup>を使うということは、何かあったか？」

「はっ、ユイの感知に三十程のモンスターの集団が、前方の森に待機しているとの事です。」

「ふむ。レベルは？」

「十前後との事です。」

ナーベとユイは事前に簡単な連絡手段を決めており、先程、数瞬でナーベに敵の感知を知らせ、その後ナーベからの伝言<sup>メッセージ</sup>で詳しい内容を聞いておいたのだ。

そしてナーベがモモンに直接伝える。これが冒険者になるに当たって、取り決めた連絡方だ。

「ユイちゃん。いつからわかってたの？」

「あなたよりかは早くわかってたと思いますよ。」

「ルクルット、どういう事だ？」

「動かない方がいいぜ、ペテル」

ルクルットはペテルを制した時…

「来ました。数三十、小鬼ゴブリンと人食オーい大鬼ガです。」

「動いたな。」

ユイからの情報を受け取っていたモモン達とルクルットと長く共にいる漆黒の剣の面々は周囲を警戒する。

すると、進行方向近くの森から小鬼ゴブリンと人食オーい大鬼ガの集団が出て来た。

「これは戦闘は避けられそうにないな。ンフィーレアさんは馬車に身を伏せて下さい。」

「ならば私が敵の突撃を受けましょう。」

「それは助かります。ならばモモンさんをかわしてくる敵を私達が。」

「んじゃ、いつも通りにいこうぜ。亀の頭を引っ張り出すみたいにな。」

ペテル達はそれぞれにできる方法で敵の対処を試みる。

今回の依頼は薬草採取だが、途中で出現するモンスターを討伐すれば、組合から報酬金が出る。

勿論、護衛も依頼なので会わない事に越した事は無いが、今の様にどうにもならない事もある。

一通りの準備を手早く終わらせた頃、敵の先鋒である人食い大鬼<sup>オ</sup>が突撃<sup>ガ</sup>してくる。迎え撃つのは漆黒の鎧を着た戦士だ。

「はあー！」

戦士は背負っていた大振りのバスターソードをオーガに一閃。

オーガの腹から血が噴き出したと思つたら、オーガは腹から両断されていた。

「すごい……」

「ミスリルどころか、オリハルコン、いやまさかアダマンタイト!?？」

漆黒の剣の面々は目の前で起きた、戦士による一撃でのオーガ両断に唾然としていた。

「どうした、かかってこないのか。」

モモンが挑発する様に言うも、オーガは襲つてこない。本能で警戒しているのだから。

「ならば、こちらから行くぞー！」

モモンは言うが早い、オーガに接近する。オーガも反撃を試みるが、全て一刀両断

されていく。

「こつちもいくぞー！」

ゴブリン

漆黒の剣の方には小鬼が向かって行つたが、ペテルのブロックとニヤの支援、他の二名はニヤに接近する敵の迎撃とよく動いている。

(いい動きだな。俺のかつての仲間程ではないがな…)

モモンは漆黒の剣に注意を向けながら、オーガをなぎ倒していった。

奥にいたオーガはモモンの強さに生命の危機を感じたか、踵を返して森に帰ろうとしていた。

「ナーベ、ユイ、やれ。」

「はっ！」

ナーベは第三位階魔法《電撃／ライトニング》を放つ。

ライトニング

電撃は電気を放つ魔法であり、目標を貫通する効果もある。

ライトニング

電撃はオーガを複数貫通し、絶命させる。

ユイは腰に掛けてあつた小型のボウガンを取り出し、撃つ。矢は10m程先のゴブリンの頭部に命中する。

ユイのボウガンは地味に聖遺物級アイテムであり、様々なアイテムを先端に装填可能という効果がある上、様々な付与魔法をつけてある一品だ。

「逃すか!」

漆黒の剣とモモンは逃げるモンスターを追撃していった。

戦闘が終了し、回復などで一休みする一行。

「あの剣はどこぞの逸品?」

「噂に名高い、王国戦士長に匹敵する強さであるな。」

「本当…上には上がいると、わかりましたよ。」

「いえいえ、皆さんならばこの程度、簡単にこなせるようになりますよ。」

「ははは…」

夜になり、野営の準備をして、夕食をとる。といつても、炎の周りに集まって、簡単な食事をとるだけだ。

「モモンさん、どうしましたか?」

モモンは出された食事を食べずに持ったままだ。隣のナーベとユイは食事をしてい  
る。

「申し訳ありません。宗教上の理由で、命を奪った日は食事を人前でしてはいけない事  
になっているんです。二人は大丈夫ですよ。」

ナーベラルとラミエルも飲食不要だが、カモフラージュの為に食事を食べさせている。

ちなみに、ナーベが毒舌を言う前にユイがそれを阻止しているのは、モモンも知らない…

漆黒の剣やンファイレアとの話が盛り上がってきた時、一つの質問が出る。

「モモンさんにも仲間がいたんですか？」

「…冒険者とは違いますけどね。」

ナーベとユイの表情が変わる。

モモンことアインズの仲間は彼らの創造主達だ。その話を聞こうと、食事の手を止める。

「かつて弱かった私を救ってくれたのは純白の聖騎士でした。彼の紹介で多くの仲間と出会いました。私にはもったいないくらい最高の仲間達でした。」

「モモンさん…きつといつかその人達に匹敵する程の仲間に出会えますよ。」

(彼らに匹敵する程の仲間か…)

アインズにとってそんな人は存在しない。アインズ・ウール・ゴウンは彼の全てである。だから必死にナザリックの維持ができたし、今も必死に動ける。

彼らを差し置いて新しい仲間などあり得ないだろう。



もし、アインズが一人でいるのならニニヤの言葉に軽い怒りを覚えただろう。だが、今のアインズにはまだ友が残っていた。

「そんな日が来るとは思えませぬね。なぜなら、まだ私にはかけがえのない友がいますからね。」

「モモンさんの友達ですか？」

「モモンさんの友達なら、すげえ強いんじゃない？」

「ええ、盾使いの仲間ですよ。今は別の場所で活動していますがね。」

「へえー、もつと話を聞かせていただけませんか？」

「いいですよ。」

アインズはゼルエルの事を差し支えない程に話す。その時の彼らの目は驚嘆と尊敬の気持ちがあり、アインズとしても誇らしかった。

ちなみにその時のナーベとユイも目で見てわかるほどの尊敬の感情があったという。

アインズは夜の見張りとして近くの草原にいた。近くにはナーベとユイもいる。

「ああ、そんなところだ。」

「かしこまりました。では引き続き、お気をつけて」

「ああ、ありがとうアルベド」

彼は定期連絡としてアルベドに伝言メッセージで連絡をつけ、終わったところだ。

伝言を切る直前に『くふー』とか聞こえた気がしたが、聞こえなかったことにしよう。

〔ゼルエル様〕

〔ナーベラルか。定期連絡だな。〕

実はゼルエルは密かにナーベとユイの二人に定期連絡を自分によこすよう、伝えてあつた。

理由はアインズの視点以外からの意見が聞きたいからだ。

報告書のような文面と同時に、日記のようなものを聞きたいと考えてのことだ。

結果、アインズが報告しなかった、ナーベによるゼルエルの名前露見と、アインズのゼルエル武勇伝が話された事を知った。

（なるほどな…やはり情報は多いに越したことはないな。）

〔ゼルエル様、あの人間共はいかががいたしますか？〕

〔…しばらくは変わらず行動しろ。カルネ村に到着したら警戒し、モモンさんかアインズさんと悟つたなら…捕縛しろ。〕

〔殺さずにですか？〕

〔ああ。最初の依頼者や同伴者が死んだら奇妙だろ。記憶改竄だけして返すぞ。〕

「かしこまりました。アインズ様にはどの様に？」

「私からの伝言として伝えておけ。」

「はっ！」

夜が明け、早朝出発した一行は順調に進んでいった。途中、モンスターの襲来も無く進み、モモンはニニヤとこの国の周辺の事を聞いたりして、親交を深めていった。

「モモンさん。」

「なんだ？ ユイ」

「付近にモンスターが接近中です。こちらを警戒しているようですが。」

ラミエルは半径1キロの気配感知範囲の中から、強い反応と半径500mに侵入してくる反応を感知し、観察し、その結果接触する可能性が少しでもあれば、報告し対処するように打ち合わせた。

「レベルは？」

「十後半、前のものよりかは強い方かと」

「そうか。300mまで来たら漆黒の剣に忠告しろ。」

ルクルットには変わった様子は無いので、まだ気づいていないのだろう。冒険者最初

の依頼として、失敗は許されない。完璧にこなすために、細心の注意を払う。

「皆さん、こちらに接近する敵がいます。おそらくゴブリン。かなり統率が、とれていませんね。」

「マジかユイちゃん！」

「わかりました、どうしよう。」

「カルネ村への道はここだけですからね。森に入るわけにはいきませんし。」

「話し合ってみますか？相手のリーダーと話して、可能なら敵対しないようにします。」

「ゴブリンに話し合いか。できんの？」

「敵も我々と戦えば無事ではすみません。奇襲が見破られれば、撤退するかもしれませんよ。」

「そうですね。それでいきましょう。」

一行は警戒しつつ、進む。

カルネ村が少し見えた時、モモンが声を出す。

「お前達、おとなしく出てくるんだ！」

この声に反応したのか、前方からゴブリンの集団が草陰から出現する。

「バレてたか。この先の村に何の用だ？」

「薬草採取の依頼だね。我々は冒険者だ。」

「それを証明できるか？」

「証明か……ンファイレーアさん、どうしましょうか？」

「えっと……カルネ村には友人がいます。エンリ・エモットといますが。」

（エンリ？あの子かな？）

アインズはカルネ村で最初に助けた少女を思い出す。

「カルネ村に、エンリ・エモットという村娘がいるか？その娘なら、依頼人を知っている。」

「エンリの姉さん！わかった待つてろ。」

ゴブリンの一人が村に走っていき、数分で戻ってくる。

「姉さんの知り合いらしい。村に近づいたら確認できる。」

「わかった。お前から付いて来い。」

ゴブリンの集団に引率されて、村に近づく。

「おかしいな。あんな柵、前には無かったのに。」

カルネ村を囲うように設置された柵を見て、不安になるンファイレーアだが、ある人物によってそれはかき消える。

「エンリ！」

「ンファイレーア！」

エンリの知り合いという事で村に通された一行。

漆黒の剣は休憩をとり、ンフィーレアはエンリと話に行った。

「モモンさん、あの男はどういたしまししょうか？」

「ポーシヨンの事もあるからな。私がアインズだと知れば、何かアプローチがあるだろう。もし敵対したら、捕縛しろ。万が一だがな。」

「かしこまりました。」

エンリとンフィーレアは家で話をしている。

「そのアインズさんってどんな人？」

「黒いローブを羽織っていて、お供に女の人と天使様を連れていたの。」

「天使様？」

「うん。アインズ様のお供で、ゼルエルって御名前があるんだって。」

「ゼルエル？？」

ンフィーレアは昨日の会話を思い出す。ナーベが『ゼルエ』と言って、ユイに睨まれていた。ゼルエとつく名前はそう多くない。

「他に何か無かった？どんな事をしたの？」

「えーと、手から雷を出して騎士を倒したり、赤いポーシヨンで私の傷を癒して下さいました。」

のー！」

「赤いポーション…！」

ンファイーレアがここに来る目的の一つである赤いポーション。

この世に存在しないポーションを二人の人間が持っていた。

しかも同じ様な名前の者と親しい。

すなわち、二人は同一人物である可能性が高い！

(待てよ。するとモモンさんは第三位階の魔法詠唱者で英雄級の戦士!!? 英雄の中の英雄じゃないか。そんな人に僕は…)

「ンファイーレア?」

エンリが不思議そうに見ていると、ンファイーレアは家を飛び出していった。

「アインズ様、ンファイーレア・バレアレです。こちらに來ます。」

「わかった。一応、お前達もそのままでいろ。」

「はっ!」

村の丘にいた一行はユイにンファイーレアを監視させ、ンファイーレアの接近を感知した。

「モモンさん！」

「何かありましたか？」

息をあげて走って来るンファイレアを見て、ただ事をではないと考え、質問するモモン。

「モモンさんは、アインズ・ウール・ゴウンさんなんですか？」

「……」

予想通りの質問。しかし、ここで慌てず用意したセリフを出す。

「違うとも、私は……」

「あ、名前を隠しているのはわかります。それでも、一言お礼を言いたくて……」

「……ナーベ、ユイ。しばらく席を外してくれ。」

「……かしこまりました。」

二人は遠くに行くと、それぞれ準備する。

ナーベは睡眠系の魔法を放つ準備を。ユイはボウガンに麻痺の毒矢を装填する。万が一、ンファイレアが敵対した場合、すぐさま抑える様に準備しているのだ。

「さて、私がアインズだと知っているのは君だけか？」



「あ、はい。名前を隠しているのは何か理由があると思って…」

「そうか。ではそのまま頼む。今は冒険者モモンなんだからな。」

「わかりました。それで、ありがとうございます！エンリを助けてください！」

ンフィーレアはエンリを助けてくれたお礼を語り、自分の気持ちを伝えた。

「実は、モモンさん。私はあなたに謝らなくてはいけないんです。」

「ほう？」

「モモンさんが女の冒険者に渡したポーシオンはとても貴重な品で、その製法を知りたくて、今回の依頼をしました。」

（やはりか…）

「へえ、それで何か問題があるのか？」

「えっ、いや、怒らないんですか？」

「別に何も取られていないし、今回はコネクション作りの一環だろ？私も君達のポーシオンには興味があるんだ。今後、友好な関係が築ければいいんだ。」

「あ、はい！ありがとうございます！」

ンフィーレアは肩の荷が降りると、今後の予定を言い、村に戻った。

「さて、二人共いいぞ。」

「申し訳ございません。私のミスで…」

「今回は良い方向に働いたから問題無い。これから学び、以後注意しておけ。」

「ご慈悲に感謝いたします！」

「うむ。ナーベとユイはゼルエルさんにこの事を報告しろ。あの人も心配しているだろうからな。アルベドへは私が連絡する。」

「かしこまりました。」

## 新伝説 モモン・ザ・ダーク・ウォリアー その2

カルネ村近くのトブの大森林

人間が容易に立ち入れない自然の場所。ここにインファイリアと漆黒の剣、モモン一行が入ろうとしていた。

「モモンさん。お願いがあるのですが。」

「なんででしょうか?」

「森の賢王が来たら、殺さずに追い払ってほしいんです。」

「なぜでしょうか?」

「この辺りは森の賢王のナワバリなんです。だからモンスターもあまり出ず、比較的安全なんです。だから…」

「おいおい、いくらなんでもそりゃあ…」

「わかりました。」

「ええ! 相手は伝説の魔獣だぞ!」

「強者にのみ許された態度であるな。」

モモンとしても森の賢王とは会ってみたいし、それを撃退したとなれば彼の名声は跳

ね上がるだろう。そのためにいくつか布石を置いておく。

「しばらく、三人で辺りを警戒してもよろしいですか？すぐに戻りますよ。」

「かまいませんよ。できるだけ離れないで下さいね。」

モモン一行は森に入って、しばらく進む。

「さて、では頼むぞ！」

「はいはい！」

モモンの声に応えるように、アウラが出てくる。

「森の賢王とかいう獣をアインズ様にけしかければいいんですね。」

「そうだ。できるな？」

「おまかせ下さい！多分、あいつの事だと思います。」

「アウラさん、ここには一人で？」

「ラミちゃん？そうだけど？」

「周辺にレベル80前後のモンスターが二体程確認できますが？」

「え？……ああ！フェン、クアドラシル！出ておいで」

そういうと、森の奥から黒い体毛の大狼とカメレオンのような魔獣が出てきた。

「まったくもう、ついてきちゃったの？これからアインズ様のご命令があるのに。」

「構わないぞ、アウラ。一緒にがんばってくれ。」

「は、はい！ありがとうございます！」

アウラはフェンとクアドラシルを連れて、森の奥に走り去っていった。

「アインズ様。どうなさるおつもりで？」

「森の賢王と戦う。より名声を高めるためにな。」

「しかし、アインズ様。大まかですが森の賢王のレベルはこの世界では非常に強力です。現状のアインズ様では少々危険では？」

「問題無い。スキルは使えるし、いざとなればナーベラルとラミエルとして対処しろ」

「かしこまりました」

モモン達が戻ってしばらくすると、森の奥から大きな音が聞こえてきた。

「まずいぞこりゃあ…」

「大きいですね。」

ルクルットとユイ以外の者にも近づくと存在の大きさがわかるようだ。

「あとは私達に任せて」

「わかりました」

「モモンさん…お気をつけて！」

漆黒の剣とンフィーレアは早急に森を出る。

「しかし、これでは森の賢王かどうか証明できないな…脚の一本でも取つていくか…」

「アインズ様、来ました」

奥の暗闇から放たれた一撃。

並の生物ならば無残な最期を迎える一撃だが、アインズは持ち前の身体能力で完全に相殺する。

「むげっ?」

アインズの受け止めた一撃は異常な硬さを持つ鞭のようなもの。しかもよく見ると蛇のようなものだ。

「それがしの初撃を防ぐとは見事でござる。」

「いぎるっ。」

「さて、先の見事な防御に免じて、それがしはこれ以上追わないでござるが?」

「愚問だな。そして姿を見せないのは勝つ自信が無いからか?それとも寂しがり屋さんかな?」

「いうではござらぬか。ではそれがしの偉容に瞠目し、畏怖するがよい!」

そういうと、奥の闇から大きな影が出現する。

影は胸の辺りに光る紋様を持ち、目は爛々と光る。

「こ、これは…」

「ふふふ、その兜ヘルムの下から動揺と恐れが伝わってくるでござるよ。」

「ひ、ひとつ聞きたいのだが…お前の種族は…ジャンガリアン・ハムスターとか…言わないか？」

アインズは目の前の生物……でかいハムスターを見て、かつて仲間が喜々として言っていた名前を言った。

「もしかしてそれがしの種族を知っているでござるか？」

「あ、ああ…かつての仲間が、お前によく似た動物を飼っていてな…」

「なんと、もし同族がいるのであれば、教えてほしいでござる！子孫を残さねば生物として失格である故」

「いやー、それはサイズの無理だな…」

「そうでござるか…」

「すまん…」

「いいでござるよ…それより、そろそろ無駄なあがきをやめて、それがしと命の奪い合いでござるー」

「森の賢王とかいうから…期待したのに…」

アインズは自分の剣を地面に叩きながら、ぶつくさと呟いていた。

「何をしているでござるか？まさか勝敗分からぬうちに降伏とはありえんでござろう？」

「もう、やめだ」

「スキル〈絶望のオーラ〉……レベル1」

アインズのスキルによつて『恐怖』のデバフを与える。相手が高レベルならば何も起きないが…

「ふわあああ！」

レベル30強程度の森の賢王には抜群に効いたようだ。

「所詮は獣か…」

「殺しちゃうんですか？」

アウラが木の上から森の賢王を見ながらアインズに質問する。

（この年頃だもんなくペットに欲しいのかな？）

「だったら、皮を剥ぎたいんです。結構良い皮とれると思いますよ」

「そ、そんな〜」

（…なんか違う！）



「これが森の賢王!？」

アインズことモモン一行が森を出た時、一緒に森の賢王を連れてきた。

モモンとは全く違う意見を述べるこの世界の価値観に頭を傾けていた。

「ナ、ナーベ、ユイ…お前達はどう思う?」

「姿はともかく、力を感じる瞳をしていますね。」

「大きいネズミに感じます。」

「ユイは使徒だから仕方ないとして、ナーベはそう思うのか…俺が違うのか?」

「あ、あのモモンさん。森の賢王を連れ出すと…」

「ああ、その事ですか…どうなんだ?」

「森の環境が変わる可能性はあるでござるな」

「そんな…だったらモモンさん!僕をあなたのチームに入れて下さい!」

「うん?」

ンファイレアはエンリとカルネ村を守るための力が欲しく、そのためにモモンのチームに入って強くなりたいらしい。

「ふははは…いや、失敬。別に君の決意を笑った訳ではない。率直にいうと、君をチームに入れることはできないが、この村を守る点には私の友人の協力を仰ごう。もちろん、

君の協力もね。」

「モ、モモンさんの御友人を!!?」

「それって、昨日の夜、話した人か!!?」

「ええ、彼なら大丈夫です。来るまでは私が協力しましょう。」

「あ、ありがとうございます!」

エ・ランテルに戻ってきた一行。

モモンは新しく引き連れた森の賢王を組合に登録するために漆黒の剣とンファイレアと別れようとしていた。

「それでは私達はこれからンファイレアさんの店に行きます。」

「わかりました。私達もすぐ行きますよ。」

モモンと漆黒の剣は暫しの別れとなった：

「モモンさん」

「ん？どうしたユイ？」

「ンファイレアの店を感知したのですが、内部に強者の反応があります。」

「何？レベルは？」

「申し訳ありません。詳細は…ただ、この世界では異常な強さです。」

「いかがいたしますか？」

アインズは考慮する。

ンファイレアの店にいる強者はどんな者なのか不明では危険だ。だが漆黒の剣とンファイレアに危害が加われば今後のモモンの名声が轟きにくい。

「…森の賢王、いやお前の名前はハムスケだ。全員でンファイレアの店に行くぞ。私が

前衛でお前達が後衛だ。」

「お待ちください。それではアインズ様に危険が生じます。ここは私とユイの二人で十分かと」

「ナーベに賛成です。ゼルエル様から未知の敵と戦う時は、我々が前に出ると仰せつかまっております。アインズ様のご無事が最優先です」

アインズは非常に悩んだ。この状態ではゼルエルの判断は正しい。

捨て駒となる味方を前に出して、相手の出方を見る。アインズもユグドラシルではデスナイト等のモンスターを召喚して、相手の情報を集めた事はあった。

だが、今は違う。彼らは自分の友が遺したかけがえのない存在。無闇に命を散らして欲しくない。

アインズは自分の中で考え抜き…

「わかった…だが私のアイテムを渡す。それがだめなら私がでるぞ」  
最低限度の譲歩だった。

アインズとて死にたい訳ではない。だが彼らを捨て駒にする気は毛頭ない。ならば少しでも彼らを補助するため、自分のアイテムを与える。

渋っていた二人だがなんとか説得し、最大限のサポートアイテムを渡した。

そうこうしているとソフィーレアの店に着いた。

「どうやら向こうも着いたばかりのようだ。」

「おや？モモンさん、どうしましたか？」

「少しね：今、家には誰かいますか？」

「おばあちゃんが：今は留守ですかね」

「ちよつと失礼」

「そういうとナーベとユイが家にあがる。」

「ちよ、モモンさん！どうしたんですか!?!？」

「ユイが感じたんです。この家に相当の手練れがいます」

「!?!？」

「ンファイレアと漆黒の剣は驚いていると、部屋の奥の扉から女が出て来る。」

「おんやゝバレちやつたゝ魔法で妨害してるんだけどねゝ」

「ンファイレアさん、一応聞きますが知り合いです？」

「い、いえ知りません！」

「何者だ？」

「モモンは戦闘態勢をとり、それにつられて漆黒の剣も戦闘態勢をとる。当然、ンファイレアを守るようにだ。」

「いやゝ驚いたね。私はクレマンティーン、よろしくね。私が用があるのはそのン

フィーレア・バレアレって子なんだけど、渡してくれないよね？」

「愚問だな」

「まあ、いつか。あんた達をやって奪えばいいだけだしね」

そういうと不気味な笑みを浮かべ、ステイレットを取り出す。

それに応じてナーベは剣を、ユイはボウガンを取り出した。

「あれ、あんたがやるんじゃないの？」

「それでもいいんだがな。二人で十分だとき」

「…調子の一つてんじゃねえぞ！」

モモンが挑発じみた言葉を言うと、激怒したクレマンティーヌがステイレットで突進する。狙いはナーベだ。

「ッ!？」

ナーベはひらりとかわすと剣を振る。しかし、クレマンティーヌはすぐに後退してかわす。

…と思いきや、再度脚に力を溜めて先程より早い速度でユイに迫る。

ガキイン!

ユイに迫ったステイレットは見えない壁に当たった様な音をたてた。  
「なっ!?!」

驚愕に一瞬固まるクレマンティーヌに矢を放つもすぐさまステイレットではじく。

「てめえら何者だ」

「黙って死になさい、ウジ虫が」

「モモンさんの邪魔者は排除します」

「くそが!」

クレマンティーヌは今までにない戦闘にいいしれぬ不安を感じた。

(どうやら、取り越し苦労だったようだな)

アインズのアイテムを使わずともカモフラージュのステータスでも十分戦えている。

ナーベは魔法詠唱者だがファイターLV. 1とLV. 63の基礎ステータスで敵の

攻撃をかわす事はできる。

ユイは遠距離職だがLV. 100基礎ステータスとA. Tフィールドによる防御で

全ての攻撃を防いでいく。

なお、モモンは今では知り得ない事だが、場所も良かった。

クレマンティーヌはスピード重視の戦士職であり、ステイレットでの一撃重視が基本である。

一定距離離れた場所から超スピードで敵の急所に一撃を見舞う戦法は狭い部屋では難しい。

距離を取ろうものならばナーベの魔法とユイの矢が飛んでくる。

ならば接近しようとするだろうが、A・Tフィールドがそれを許さない。

結果、接近できず距離も取れず中途半端な間合いでの戦闘となり、それはクレマンティーヌには苦手ではないが得意とは言えない分野であった。

(これなら時間の問題だな…)

アインズは目の前で起こる戦闘を見てほっと胸をなでおろした。

「しづといわね」

「これ以上時間をかけてはいられません。早急に片付けましょう」

ナーベとユイは余裕の態度で戦闘をしている。

対するクレマンティーヌは疲労しているのか無言である。



二人が一気に距離を詰め、とどめをさそうとする。同時にクレマンティーヌもそれを迎え撃たんとステイレットを突き出す。ユイはこれまでの様にA・Tフィールドで防御した：

ボゴオオオン！

「!?」

突如、ステイレットから火の球が放たれた。

クレマンティーヌのステイレットは《魔法蓄積》された《火球》が込められており、A・Tフィールドを破るため、クレマンティーヌが使用したのだ。

この様な武器はユグドラシルには無かったため、二人は不意を突かれる結果となったのだ。

「どうした、二人共！」

モモンが何事かと部屋に入ってきた。

「ギヤアアア!!？」

瞬間、恐ろしい絶叫が辺りに響いた。

モモンが部屋に踏み込む時、周りにいた漆黒の剣とハムスケも突如部屋で起こった炎に驚き、何事かと注意を向けた。その一瞬を見逃さなかった男かいた。

カジット・デイル・バダンテールという男だ。

カジットはンファイア誘拐の際、店に情報妨害系の魔法をかけ、家の出口を塞ぐ算段だったが、店に接近するモモン一行に気付き、身を隠したのだ。

この時、ユイはカジットの存在に気付いていたが、カジット本人の強さがこの街のミスリル級冒険者と同格レベルな上、緊急のためユイは報告をしなかったのだ。

そのまま、成り行きを見ていたのだが、モモン達の一瞬の隙をつき、ンファイレアに近づき……

彼の両目を潰したのだ。

ンファイレアは思わず絶叫し、モモンは注意をンファイレアに戻す。

「貴様……」

モモンは振り向きざま剣を振り抜こうとしたが、カジットがンファイレアを盾にする様な位置にいたので、剣を抜くのが一瞬遅れる。

「モモン様……」

ナーベの声に思わず動きが止まる。同時に自分のそばを通り抜ける影があった。

クレマンティーンだ。

ンファイレアの絶叫が聞こえ、ナーベとユイの注意がモモンの方に向いた時、武技《疾風走破》と《能力超向上》を瞬時に使い、異常な速度でユイ達の傍を通過し、モモンを突破し、ンファイレアに行き着いたのだ。

しかし、その場にいた強者は瞬時に二人を殺すべく動き出していた。その際、クレマ

ンテイーヌのとつた行動は予想だにしなかった。  
懐から一つのサークレットを取り出したのだ。

それをンファイーレアの頭にかけて、カジットが魔法を詠唱する。

「テレポーション転移」

第六階魔法、テレポーション《転移》。

妨害されやすいが、そこそこの距離を瞬間移動できる転移魔法。

発動した瞬間、クレマンテイーヌとカジット、ンファイーレアはその場から消える。

「しまった!!?」

モモンから怒気を含む声が発せられた。

「申し訳ありません!この償いは何なりと!」

ユイが深々と頭を下げ、口調もいつもと違っている。

ここに部外者がいたら、ユイの変化に驚くところだが、幸い今は誰もいない。

ここはバレアレ氏のポーション屋の一室。ンファイーレアが連れ去られた後、戻ってきたリイジー・バレアレ氏に状況を話し、ンファイーレア搜索のためにこの部屋を借りたのだ。

「まあ、失敗は誰にでもある。次にそれを生かすんだ」

「いえ、一歩間違えばアインズ様に被害が及んだやもしれませんでした。ここは何か罰が必要かと思われれます」

アインズはラミエルの報告ミスに関しては、ンファイレアが連れ去られただけの被害が出ただけで、彼を救い出せばそれでいいし、これを期にバレアレ氏の協力を得られる。さらに連れ去った敵の計画も潰せれば名声も轟いて一石二鳥と考えていた。

だが、ナーベラルとラミエルはナザリックに仕える者として、ミスは何かしらの罰で償わせる必要があると考えている。例え至高の御方が許しても、自分が許せないから何かしらの償いを求めるのだ。

「あー、罰は後で考えよう。それより今はンファイレアの搜索だ。《ロケット・オブジェクト／物体発見》を使う。目標はあの女の武器だ」

「ンファイレアの服や持ち物で良いのでは？」

「ンファイレアの搜索はそれで済む。だが、敵は第六位階魔法をあの時使用した。ならば《ロケット・オブジェクト／物体発見》の存在も知っている可能性が高い。ンファイレアの服で我々を攪乱するかもしれない。その点、武器ならば早々捨てたりはできません。そこを突く」

「かしこまりました」

「うむ。巻物スクロールを渡す。全て使えばさすがに探知できるだろう」

「アインズは巻物スクロールを山の様に取り出した。敵は第六位階魔法を使用した事を踏まえ、通りの対策魔法に加え、念のために高位の対策系魔法を使用することにしたのだ。

ナーベラルが全て使用した後、敵の居場所が判明する。

「そこは墓地だな。では《クレヤボヤンス／千里眼》と《クリスタル・モニター／水晶の画面》を使い」

使用後、空中にその場の光景が映る。

「アンデットの軍勢だな。ここに奴らもいるだろう」

「ナザリックより軍を呼びますか？」

「馬鹿を言え。これはチャンスだ」

アインズは扉を開けるとそこにはリイジーと漆黒の剣が待っていた。

「どうでしたか？」

「見つかりました。ンファイアは墓地です。アンデットの軍勢のおまけ付きでね」

「なっ!?!」

「漆黒の剣の皆さんはこの事を組合に報告してください。リイジーさんは少々お話があるのでよろしいですか？」

「わかりました。みんな行くぞ！」

漆黒の剣が組合に行き、店にはリイジーとモモン達だけとなる。

「さて、リイジー・バレアレ。私はこのまま、ンファイレア救出に向かうが、何か見返りが欲しいんだ」

「なんじゃと。金か？」

「全てだ」

「何？？」

「お前の持つポーション作成技術の全てと研究成果が欲しい。こちらもただとは言わん」

モモンは懐から赤いポーションを取り出す。瞬時にリイジーの目が変わる。

「このポーションをいくつかやろう。どうだ？」

「ま、孫は助けてくれるのか？」

「もちろん。救出の折にはバレアレの店は私達の下についてもらうぞ」

「…よかろう。孫を救ってくれ！」

「交渉成立だ」

「さすがでございます」

「何、大したことは無い。それよりすぐに行くぞ」

「もう少し、機をみてはいかがですか？多少なり良いタイミングで出た方が、名声も高まるかと」

「ふむ、そうだな…」

アインズは名声を高めるには、人々が事態の深刻さを知ってから解決した方が良いと考えたが、敵の目的がわからないならば、早くに解決した方が良いのでは、とも考えていた。

その時…

「ん？<sup>メッセージ</sup>伝言か？」

頭に響く伝言<sup>メッセージ</sup>の感覚に気づき、応答する。

「もしもしっ？」



〔モモンガさん！大変だ!!〕  
風雲急を告げるゼルエルの声が響く…

## 使徒、遭遇

時はさかのぼること数時間前：

エ・ランテルにある最高級の宿屋『黄金の輝き亭』にて：

「では、ありがとうございました」

受付で軽く会釈するガタイの良い老人。それにつられる様に受付の女性も頭を下げ  
る。

老人はそのまま足早に外に出て行き、止めてあつた馬車に乗り込むと、御者の男に合  
図を出して馬車を発進させる。

「お待たせして申し訳ありません」

「いや、素晴らしい立ち振る舞いだつたぞ」

老人が軽く謝罪するとそれに応える女性、否：

女の体をもつ化け物がいた。

「うまく釣れた様だな」

「はっ！滞りなく」

老人ことセバスは目の前にいる主人、ゼルエルに一通りの報告をすませる。

「計画通りだ。うまくいけば、武技の使い手も問題なく確保できるな」

「はっ！」

この馬車に乗っているのはナザリックの支配者の一人であるゼルエルと第一階層守護者シャルティア・ブラッド・フォーレン、執事セバス・チャン、プレイヤーのリュシヤン・イプシロン、といった四人であり、戦力としては並のパーティにも引けを取らないレベルの猛者であった。

「ゼルエル様、なぜ急遽、任務に参加されるので？」

シャルティアが不思議そうに問いかける。本来ならばこの任務はシャルティアとそのシモベのみで行われるはずだったのに、急遽ゼルエルが参加する事になったのだ。

「なに、武技というものに興味があってな。自身で確認してみたいんだ」

ゼルエルの言葉は半分本当で半分嘘である。

確かに武技という正体不明の技術には興味がある。しかし主な理由は暇だったから

だ。

ナザリックの業務はほとんどアルベドとパンドラが片付けてくれるし、今は特に大規模な計画等も無いので、ぶつちやげゼルエルがいなくとも何の支障も無いのだ。

勿論、外出の事は言っている。

「はあ……しかし危険でありんす。せめて一軍をお連れになった方がよいのでは？」

「問題ない。ハ肢エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲シャドウデーモンに影の悪魔を二体ずつ連れているし、装備も持ってきた。何より、お前がいるからな」

ゼルエルはそう言うのと、シャルティアの頭を撫でる。

「ゼルエル様ア〜」

まるで子猫のようになったシャルティアを撫でるゼルエル。ちなみにゼルエルは口リコンではない（本人談）

「おい！降りろ！」

しばらくすると馬車の外から怒声が聞こえる。

「かかったようだな。始めようか」

「はっ」

そういうと、それぞれ臨戦態勢をとり、シャルティアは扉を開ける。

「へへ…なかなかいいもん持つてんじやねえか…」

野盗の一人がシャルティアの胸を触ろうとし…

ドシャー！

その手を落とされた。

「汚い手で触りんせんでおくんなんし」

「あ…ああ！手、手があー！」

「うるさいでありんす」

野盗が叫び出す前にシャルティアが手刀で首を落とす。

その野盗の血がシャルティアの上に血の球を作る。

「ま、魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>!?」

「控えなんし。至高の御身の御前でありんす」

シャルティアの言葉などまるで意に介さず、野盗はそれぞれ武器を構える。

「……無礼な虫けらでありんすね。お前達、片付けなんし」

シャルティアの言葉に呼応するように野盗の背後の闇から二つの影が飛び出し、野盗の命を刈り取っていく。

ものの数秒で野盗達はものいわぬ肉塊と化し、あたりは静かになった。

「私の出番は無かったな」

「このような輩にゼルエル様がお手を煩わせる必要はありません」

シャルティアの配下である吸血鬼ヴァンパイア・ブライドの花嫁二体の奇襲によつて野盗の大半は死に、残り  
は情報を聞き出した後、他の者の後を追った。

ちなみにザックとかいう男はソリュシャンが処分した。

「それではゼルエル様。私達は予定通り、王都に向かいます」

「うん。頑張れよ」

ここでセバス、ソリュシャンとは別れ、ゼルエルとシャルティア、吸血鬼ヴァンパイア・ブライドの花嫁は情報に基づき、野盗のアジトに向かう事になった。

「ゼルエル様……大丈夫でありんすか？」

「大丈夫だ。問題ない」

昔流行ったセリフを言いつつ、ゼルエル達は問題なく移動していく。

……ゼルエルが奇怪な方法で移動していることを除いて：

ゼルエルは空からベルトアームを木に結び、木にぶつかる前に自分で発生させたA、Tフィールドに着地し、そのまま大きく跳び、また木にベルトアームを……といった事を繰り返し移動していた。

これは最近、ゼルエルが生み出したベルトアーム移動法であり、これによって継続して高速移動ができるようになる。気分は某巨人漫画の機動装置だ。

たまに木にベルトアームがかからなかったり、かかってもベルトアームの引きに耐えきれず、木が引き抜けたりしているが、なんとか野盗のアジトという洞窟にたどり着いた。

「あれがそうか」

「そのようでありんすな。では行くでありんす」

「待て、シャルティア」

ゼルエルは洞窟に突入しそうになったシャルティアを止め、洞窟の入り口を観察する。

「見張りは二人…それに洞窟か…」

「どうしたでありんすか？」

「シャルティア。意味もなく突入するのは愚策だぞ」

「？」

ゼルエルは脳筋だが敵の本拠地に一人で突入するほど馬鹿ではない。

「ここはいわば敵の拠点。ならばそれなりの罨や逃げ道も用意されていると考えるべきだ」

「な、なるほど…わかったでありんす！」

「まずは感知能力のある者を呼ぶ必要があるな…：：：シャルティア、《眷属召喚》して周りを探させろ」

「了解しました」

シャルティアや吸血鬼の花嫁には感知能力が無い。ナザリックから呼び出してもいいが、手っ取り早いシャルティアの《眷属召喚》での人海戦術をとったのだ。

「ゼルエル様、どうやらこの洞窟にはこことは別の入り口がある様でありんす」



「ほう？」

シャルティアの眷属による情報から洞窟の裏口のような場所を発見できた。

（あとは罠だけだな…仕方ない、眷属達に任せるか）

「シャルティア、眷属を前に構えて前進しろ。何か罠があれば先にかかってくれただろう」

「了解であります。ゼルエル様はどうなされるので？」

「私は裏から入ろう。眷属の半分を私につけてくれ」

「かしこまりました」

「ああ、そうだ。武技の使い手は殺すなよ。後は……」

派手に暴れてくれ」

シャルティアの顔がまるでおもちゃを前にした子供のように笑顔になった。

野盗こと『死を撒く剣団』の拠点である洞窟。この洞窟の見張りをしている二人がい

た。

「今夜襲つてる貴族の娘ってどんな奴かな」

「なんでもすげえ上玉らしいぞ」

仲間が出向いた仕事について話しながら暇をつぶしている時、それは現れた。

「こんばんわ」

まるで顔見知りには挨拶するように語り掛ける少女。

「?誰…」

言葉を発すると同時にその口は塞がれた。

ぶしゃー!

少女の手は男の顔を握りつぶし、脳髓が吹き出した。流れるであろう血は少女の頭に集まり紅い球体になる。

「な、なんだお前!?」

「御方の御命令は『派手に』でありんす。おんしも協力してくんなまし」

その後、数秒もしないうちに洞窟内部に男の断末魔が響きわたった。

そこからは早かった。

見張りの野盗の絶叫を聞いた他の野盗が次々と入り口に向かい、全て大音量の断末魔

を発して肉塊となった。

中には延々と悲鳴をあげ続けている者もいたが、シャルティアの「うるさい」の一言で、静かにさせられた。

シャルティア一行の戦い方は実にシンプルな蹂躪であり、向かってくる敵は全員、即死させずに悲鳴や絶叫をあげて死んでいく。

ある者は手足をもがれ、ある者は腹に大穴をといた具合に蹂躪をしていく。

「うん?」

突如、シャルティアは足を止める。最前線の眷属からのリンクが切れたのだ。いかに雑魚モンスターとはいえ、それを屠る實力を持つ者はこの世界には多くない。

「来たようでありんすね」

少し待つと、奥から一人の男が出現する。

「ブレインとはそちでありんすか?」

「ああ、俺はブレイン・アングラウスだが」

シャルティアの蹂躪劇はまだ始まったばかりである。

ゼルエルは洞窟の裏口らしきあたりから侵入していた。

ゼルエルの周囲はシャルティアの眷属の中でも比較的強いモンスターで警護されており、お供のハ肢エイトエッジ・アサシの暗殺蟲シャドゥデーモンと影の悪魔も当然いる。

(半分でいいっていったのになー)

シャルティアに半分をつけると言ったが、さすがにそれではと抗議され、結局9：1の割合で眷属は分断され、しかもシャルティアの方は雑魚モンスターばかりとなった。

少し進むとひらけた場所に出る。どうやら頭目の部屋らしく、洞窟の中なのにそれなりに豪華であった。

「おい！早くしろ！」

部屋の入り口の方から声が聞こえる。どうやらシャルティアの陽動がうまく効いているようだ。

「武技の使い手がいるかもしれないから殺すな。いけ！」

ゼルエルの命令によって護衛に数体残して、眷属が声のする方に一斉に向かう。

しばらくして行くと眷属に無力化された盗賊達数名がいた。

「お前達、武技は使えるか？」

「つ、使えない！」

「ならブレインはどいつだ？」

「ブ、ブレインさんなら先に……」

どうやら本命はすでにシャルティアと相対しているようだ。

少し話しただけで盗賊達は命乞いの言葉を出してくる。

「もいいぞ」

ゼルエルの一言で盗賊は助かったと思い：

全員、眷属に殺られた。

「さて、先に進むか」

ゼルエルの「もいいぞ」は眷属に対して言ったものであり、『もう殺していいぞ』という気持ちで言ったのだった。

---

「よくやったぞ、シャルティア」

「ありがとうございます、ゼルエル様」

洞窟の狭い通路で話している二人。傍には青い髪の方が気絶している。

この男こそ、ブレイン・アングラウスその人であり、シャルティアに蹂躪された後、逃げた先にゼルエルが待ち構えており、そのまま気絶させられてしまったのだ。

ちなみにシャルティアは「血の狂乱」を使わずにすんだ。

「こいつは後でナザリックに送るとして、先に面倒な事からすませるか」

「何をなさるので？」

「まあ、見てな。エイトエッジ・アサシンハ肢の暗殺蟲、シャドウデーモン影の悪魔、出て来い」

すぐさま4体のモンスターが出現する。

「お呼びで？」

「ここにあるものすべてをナザリックに送れ」

「!?!」

「ナ、ナザリックに送るので？」

「ああ、アイテムだけじゃない、死体もな。この世界独自のアイテムが欲しいし、デスナイト死の騎士として活用させる」

「じ、実は一つ懸念事項が……人間の女が何人かおりました……」

「女?それがどうした？」

「はっ、どうやら、野盗に捕まっているようでした」

「ほう…おもしろい。構わん、気絶させて送れ」

「よ、よろしいので？」

「送ってから考えるでしょう」

「は、はい。かしこまりました」

シャルティアはナザリック表層に転移門をつなげ、八肢の暗殺蟲と影の悪魔達、吸血鬼の花嫁一体でそれぞれ物資を運び出させる。

捕まっていた女性達も全て気絶させ、転移門に放り込んでいった。

「ゼルエル様、ご報告したい事が」

「なんだ？」

「洞窟の入り口に武装した人間の集団がおります。いかがなさいますか？」

洞窟の入り口で待機させていた吸血鬼の花嫁が報告に来た。

詳しく聞くに、冒険者の様だ。野盗の討伐に来たらしい。

「殺しますか？それとも撤退を？」

少し考えたゼルエルに、一つの名案が浮かぶ。

「なあ、シャルティア。ここに強大な吸血鬼が現れて、冒険者を皆殺しにしたでしょう。それを討伐すれば、そいつは英雄になれるよな?」

「はえ?」

「通じないか? 超強いモンスターを倒せば、無名の冒険者でも超有名になれるだろ?」

「…ああ! わかりましたえ。行つてきんす!」

「少しはハメを外していいぞ」

〈数分後…〉

「ゼ、ゼルエル様! こ、こちらに!」

「あん?」

いきなりシャルティアが駆け込んできた。

話を聞くに、冒険者の女が赤いポーションを持っていたようだ。

ふと、数日前のモモンガさん護衛のシモベの報告を思い出す。

「その女のポーションはアインズさんの計画には関係ない。一応、女から情報を聞き出しておけ」

「はっ!」

言うが早い、シャルティアは『魅了の魔眼』で女を魅了し、情報を喋らせる。



やはり、赤いポーションはモモンガさんから受け取った物のようだ。

「ここには二つのチームで来ました」

「……なに？」

「我々と野伏<sup>レンジャー</sup>で構成される二つのチームで来て、敵が脅威だった場合、もう一つのチームが街の冒険者組合に知らせる手筈になっています」

「しまった！」

ゼルエルは当初、冒険者を皆殺しにした後、適当なシモベを人間にしたて、エ・ランテルの冒険者組合に情報を流そうと考えていた。この時、シャルティアの姿とは違う容姿を伝えるつもりでいた。ナザリックにいる数少ない人間に擬態できる者を減らしたく無かったからだ。

しかし、今はシャルティアの外見がほぼそのまま組合に知られる。そうなればシャルティアはナザリック外での活動が大きく制限される。

「シャルティア！眷属でこの近くにいるレンジャーを探させろ！」

「は、はい！」

シャルティアは今いる眷属を総動員させて、森に入らせる。

「ゼルエル様……眷属が敗れました」

「はあ!？」

シャルティアの眷属にはあくまで搜索を命じてある。場所が分かれば、そこに捕獲部隊を送り込む算段だったのだ。眷属が敗れた、それは眷属が撤退する間も無くやられたに等しい。それすなわち……

「そいつにはシャルティアと私が対応に行く!プレイヤーだった場合は交戦せずに撤退だ!」

「かしこまりました!」

ゼルエルとシャルティアは眷属が敗れた場所に急行する。

「これで全部か?」

黒髪の男は槍の構えを解き、仲間に確認をとる。

「そのようですね」

仲間の一人がそれに答える。

この一団は『漆黒聖典』。スレイン法国に所属し、人類最後の砦と名高い最強の特殊部隊である。

メンバーには神の血をひく神人と呼ばれる者もおり、彼らの装備は神が残した秘宝である。

彼らの目的は復活が予言された破滅カタストロフ・ドラゴンロードの竜王の対処のため、法国の秘宝『ケイ・セケ・コウク』の護衛をするため、この場にいるのだ。

そして先程、森の中から出現したモンスターを全て屠ったところだ。彼らの力を持つてすれば造作もないことである。

「どうした？」

最初に異常を感じ取ったのは隊長と呼ばれる男だ。モンスターによって乱れた陣形を修正し、すぐにこの場を立ち去ろうとした時、隊員の一人、第十一席次“占星千里”がひどく青ざめた顔で怯えていた。

声を掛けても反応が無く、まるで信じられないものでも見たように、ただただ怯えていた。

「しっかりするんだ！」

隊長が少々荒っぽく“占星千里”の胸を叩く。常人なら悶え苦しむ一撃だが、彼も漆黒聖典の一員、すぐに我に返った。

「も、申し訳ありません！すぐに戦闘準備を！推定難度240越えが二体、こちらに向

かっています！」

彼の言葉はまさに信じられないものだった。

ゼルエルとシャルティアは移動しながら自らの装備を整える。ゼルエルは用意した神器級アイテムを、シャルティアは伝説級の鎧とスポイトランスを出し、その場に向かう。

森を抜け、視界が開けた時、両者は対面した。

片や、人類最強の特殊部隊であり、神の残した物を受け継ぐ人間。

片や、ナザリツク階層守護者随一の強さを誇る吸血鬼とギルメン中二番手の強さを持つ使徒。

両者の中で初めに動いたのは漆黒聖典だった。彼らは出てきたモノの異質さを本能で感じた。そして反射的に言葉を口にする。

「使えー！」

隊長の男の言葉は隊員の総意だろう。人智を超えた相手にはこちらも人智を超えるしか方法は無い。

彼の言葉に呼応し、一人の老婆の服が光る。

それは人智を超えし、ワールド世界の力。神の残した秘法『傾城傾国』…

ドゴオオオン!!!

傾城の龍の出現を止めたのは神の力を持ちし使徒の光だった。

(なぜこんなどころに!?)

漆黒聖典と対面したゼルエルが最初に感じたのは驚愕だった。

なぜなら彼の目の前には彼の天敵が二つも存在したからだ。

ユグドラシルでは基本、未知の冒険がメインであり、プレイヤー同士のバトルは二の次である。

しかし、そううまくいかないのが世の常。ルール無用のプレイヤー達はこぞつて戦いを挑んだり、挑まれたりした。

そして当然、攻略サイト等には様々なプレイヤーの情報が入ってきた。当然、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーはほとんど名を連ねている。

ゼルエルにもそれなりの情報が書き込まれていたが、なにしろ非常に稀なビルドのため、情報量は少なかった。

それでもゼルエルのページの最後には、みな目を奪われた。

『どうしても勝ちたいなら、ワールド世界級アイテムを使いましょう。ワールド世界級アイテムは種類、強さ問わず、A・Tフィールドを無効化します。』

この一文は多くのプレイヤーに鼻で笑われた。

ワールド世界級アイテムは非常に希少であり、それをたった一人のプレイヤーに使うなんて相当の物好きだけだ。

しかし、ワールド世界級アイテムを簡単に使える者がいたら？

ワールド世界級アイテムを安全に護送できるチームがいたら？

それはまさにゼルエルの天敵となりうる存在だろう。

驚愕に体が固まるゼルエル。シャルティアはゼルエルの指示があるまでは敵対行動

はできない。

結果的に二人とも動けなかった。そして漆黒聖典は二人に構わず、『傾城傾国』を発動させようとした。

(まずい!!)

ゼルエルは思わず、破壊光線を発射した。それは真正銘、彼の最高の一撃だった。並みのLV、100の猛者にも通用する攻撃。それは部隊の中心地に当たり、爆発した。

ドゴオオオン!!!

特大の爆音が聞こえるが、そんなことをゼルエルは気にもとめない。

シャルティアを引っつかむと、すぐに森に入った。

「シャルティア！転移門!!」

「は、はい!!」

いきなり怒鳴り散らかすゼルエルだが、シャルティアもあのアイテムの強大さを本能的に感じ、すぐにて門を開く。

開いた異界門に転がり込むように転がり込む二人。すぐさまシャルティアは転移門を閉じる。

シャルティア達が転移したのはナザリック表層付近。先ほどまで野盗の盗品を運ん

でいた場所であり、それを手伝っていた者達が何事かと集まってきた。

(どうする…今やるべきことは…いきなり世界級アイテムを使うから、おそらく敵対しているんだろうな。まずは守護者を呼び戻して…)

瞬時にある人物が思い上がる。現在、自分の創ったNPCを連れて冒険に行っているただ一人の友人を。

「シャルティア、洞窟にいる人員を撤退させ、第一階層で最大警戒に当たれ、メッセージ使える者はアルベドに連絡し、守護者を呼び戻させる。アインズさんには私から連絡する」「かしこまりました」

ゼルエルとしては洞窟の人員は無視してもいいのだが、彼らからナザリックの情報が漏れないとも限らないので即時撤退させた方が良くと結論づけた。

ゼルエルは伝言を友人につなげ…メッセージ

〔モモンガさん！大変だ！〕

この世界の危険さを伝えた。



## 使徒、放射

「なるほど…世界級アイテムが…」

「そうだ！早くナザリックに戻ってこい！」

ゼルエルから届いた伝言の内容は世界級アイテムの存在が確認された事。その一団と敵対した可能性があるのでナザリックに戻ってこいというものだ。

アインズ自身は一応世界級アイテム、通称『モモンガ玉』を個人的に所持している。これならアインズ自身は他の世界級アイテムの影響を受けない。

だが現在アインズと一緒にいるラミエルとナーベラルはその影響をもろに受ける。さらにアインズは戦士になって弱体化しており、世界級アイテム抜きワールドの並みのLV. 100プレイヤーでも余裕で負ける。

「ゼルエルさん、少し…待ってくれませんか？」

「は？」

アインズはエ・ランテルの現状を伝え、一つの仮説をたてる。

「多分、この惨状の犯人とゼルエルさんが遭ったプレイヤーは同一ではありません。この惨状は多分、第七位階魔法へ死者の軍勢／アンデス・アーミーだと思っんですよ。な

ら、別のプレイヤーの可能性が高いですよ。」

「なるほど……ならば世界級アイテムのプレイヤーと何らかの関わりがあるのかもしれないですね……どうしますか？」

「こつちからアプローチして、なんとか仲介してもらえるように頼みましょう」

「わかった。こつちからも支援をしよう」

その後、ゼルエルがナザリックから一軍を出すことになり、その際に守護者が我先にと押しかけたのは言うまでも無い。

「やれやれ、面倒くさいな……」

モモンが小言でそんなことを言うのは、目の前に広がる異常なアンデットの軍団がいるから……

それと自分の周辺から頑として離れようとしないうしシモベ一同である。

最初はへ死者の軍勢／アンデス・アーミーが可愛く見える軍団が用意されていたのだが、さすがにやばいということ、大半を周囲の索敵にあてた。

それでも、えりすぐりのモンスター達でモモンを護衛している。モモンにとっては窮屈でしかたないのだ。

「はあ、さっさと終わらせようか。ラミエル、やれ。ただし最小限でな」

「かしこまりました」

ユイことラミエルは両の手から青い物体を出す。ソレは彼女の手の中で正八面体を作り出し……

紅い閃光が放たれた

「相変わらず、すごい威力だな」

「ありがとうございます」

ラミエルの加粒子砲は骸骨などのアンデットを掃討し、一直線の道を作り出した。

「周囲にプレイヤーや冒険者はなし、ならばこのまま私達三人でひとまず踏み込むぞ。

ナーベ、ユイ、行くぞ」

「はっ」

ひとまず冒険者モモンとナーベ、ユイで対応を試みる。一応、周囲に派遣されたシモベを配置させている。

「カジット様、来ました」

「はい、バカ確定。やあ、カジット、さつきぶりだな」

舎弟らしき男から先程の魔法詠唱者の名前を聞いてしまい、挑発するモモン。

「ちっ、さつきの冒険者か。どうやってあのアンデットを突破した？」

「何、普通に薙ぎ払ってだよ。それより、一つ聞きたいんだ。なぜこんな事をするんだ？」

「ふん！まあ、冥土の土産に教えてやろう。儂の野望を！」

カジットはまるで自分が神にでもなったかの様に、モモンに話した。

より高度な魔法を習得するには人間の時間では足りない。ならばアンデットになって永遠の時間を得よう。それには莫大な死のエネルギーが欲しい。そこで『死の凱旋』という大儀式を実行するための〈死者の軍勢／アンデス・アーミー〉という魔法を使っている。

「なぜンファイレア少年をさらった」

「あの小僧のタレントに用があっただけさ」

「ほう……」

（タレント…アイテムで魔法を使っているのか？）

「まさか、この魔法はお前だけのものではないのか？」

「ふん！癩だがあの女のおかげだな」

「あの女？ 刺突武器の女か？」

「そうだよ！」

奥の霊廟の影から怒鳴り声が聞こえる。目をやると店でやりあつた女が出てきた。どうやらお怒りのようだ。

「クレマンティーヌだったか。お前のおかげとはどういう意味かな？」

「ああん！そんな事知ってどうすんだよ！」

「まあいいじゃないか。我々も興味があるんだ。教えてくれてもいいだろう？」

「ふん！知りたいなら教えてやるよ…あの世でな!!」

そういうとクレマンティヌはスティレットを持ち、ナーベに突撃してくる。二人の間はそれなりに開いていたのだが、文字通りあつという間に距離を詰める。おそらく武技を使用しているのだろう。

だが、常に臨戦態勢だったナーベはすぐさまクレマンティヌの首を切り落とそうとする。

だが、そうする前にモモンが前に出て、剣の腹でガードする。

いきなり出てきたモモンに驚くナーベとクレマンティヌ。だが張本人の男はそんなことお構いなしに口を開く。

「おいおい、後衛の魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>を相手して楽しいか？それは前衛の私を倒してからやつてもらおうか」

「……おつけ〜」

クレマンティヌとしては先の戦闘で苦汁を飲まされた女二人を嬲り殺しにしたかったのだが、確かに戦士っぽいこの男を殺した方が楽しいだろうと思い、モモンの誘いにのった。

「ナーベラル、ラミエル。この女とは私がやる。お前たちはここの掃除を頼む」  
 「かしこまりました」

そういうとモモンはクレマンティヌと一緒に墓地の奥に消える。

「ふん！たかが女二人に私の野望を止められるものか！」

「うるさい、《二重最強化》《エレクトロ・スファイア／電撃球》！」

「なあ?」

いきなり第三位階の魔法を《二重最強化》して放つ。青白い閃光が当たり一帯をつつむ。

光が晴れるとそこには二人の女と一人の男しか立っていないかった。

「ふふふ、馬鹿が」

「まったく、芋虫のように簡単に死ねばいいものを」

「同意です。さっさと片付けましょう」

「第三位階を使う馬鹿とはな。ゆけい！骨スケリトル・ドラゴンの竜！」

カジットの声に答えるように空から人骨の集合体：否、骨の竜が舞い降りた。

「ふははは！魔法に絶対の耐性をもつ骨スケリトル・ドラゴンの竜。お前たちでは勝てぬわ！」

「愚かね」

「全く。あなたはあちらを、私は隠れているもう一匹の方をやります」

この時点でカジットは気づくべきだった。この二人の醸し出している強者の気配に。そして口調が変化した彼女たちに。

「飛行<sup>フライ</sup>」

「飛んだか…」

カジットはナーベが飛んだの見て、顔を歪めた。骨の竜から逃げ出され、大勢の援軍が来たらすすがに厳しいからだ。

そしてひとつの異変に気づく。

(なぜ逃げようとしらない?そしてその女はなぜ動かない?)

最初はユイが時間を稼ぐ間にナーベが街に戻ろうとするのだと考えていたが、ユイは戦闘態勢にも入らないし、ナーベも滞空して動かない。

カジットは切り札のもう一体の骨の竜を出すべきか迷ったが、それは無駄なことだった。

ナーベは手からほとばしる雷を、ユイは正体不明の謎の物体を出す。

「な、なんだ貴様ら!?!その魔法は!?!」

「死になさい」

カジットは思わずもう一体の骨の竜を地面から出現させ、自分も魔法を唱えてバフをかけようとする。



瞬間、青と赤の閃光が炸裂した。

青の閃光は地上にいた骨の竜を、赤の閃光は半分地中にいた骨の竜を、それぞれ撃ちぬき、青の閃光はそのままカジットに向かい：

「ギャアアアアア!!」

カジットに命中し、灰と化した。

「さて、アインズ様のご援後に行きましようか？」

「いえ、ゼルエル様から即時撤退のご命令が出ています。ナザリックに戻りましよう」

「アインズ様を置いていくのですか？」

「ゼルエル様はアインズ様があの方に負ける可能性より、我々が世界級アイテムで支配される可能性が大きいとおっしゃっております」

「了解しました。すぐに伝言メッセージを送りましよう」

その後、開かれた転移門で二人は無事、ナザリックに帰還した。

「強いな」

モモンの言葉には重みがあった。超人的な肉体能力を誇る彼の一撃をことごとく避け、急所を突いてくる彼女をしつかりと表していた。

「全く、かたいな」

クレマンティーヌの言葉にはそれなりに余裕があった。が、あきれたような口調になっていた。

先ほどから二度、ヘルムの隙間にステイレットを差し込んでいるのだが、全く効いた様子がない。硬いモノに当たる感覚しもなく、彼女が期待する肉を突く感覚とは程遠い。

「やれやれ、次で決めようじゃないか、クレマンティーヌ」

「いいんじゃない」

「その前に冥途の土産にひとついいかな？ どうやってこの魔法を発動させている？」

「そんなの簡単、簡単。観者の額冠を使ってんだよ」

（観者の額冠？ アイテムの名前らしいが……まあ、後でもいいか）

そう結論付けると、モモンは手に持っていた大剣を地面に突き立てる。

「さあ！決死の覚悟でかかって来い!!」

その後、冒険者組合からの調査隊は背骨がバキバキになった女の死体を発見したとか

：

その後、冒険者組合に帰ってきたモモンは様々なお偉いさんから感謝と驚嘆の言葉をかけられ、宿屋に帰りにくかったのだが、朝日が昇る前に宿屋に戻り、そのまま転移門でナザリツクに帰還した。

ちなみに、ンファイレア少年と死の宝珠はきちんと回収し、観者の額冠は破壊された。そしてナーベとユイは先に宿屋に戻ったということになっている。

「さて、今回集まってもらったのはほかでも無い。世界級アイテムの存在が確認されたのだ」

最初に口を開いたのは事の発端であるゼルエルだ。一応、守護者には一通り伝えましたが、確認のためにもう一度伝えた。

「これからの活動についてアインズさんといくつか決めたことがある。じゃ、お願いします」

「うむ、まずはこれから外で活動する守護者には世界級アイテムを持つことを義務付ける。そして近くには必ず供となるモンスターを連れて行け」

「なお、ラミエルにはこれを渡しておく」

そういうとゼルエルは瓶に入っている真つ黒な液体をラミエルに渡す。

「それは『ヒドラの毒』。使い方はしっているな」

「はい」

ゼルエルが渡した『ヒドラの毒』は簡単に言ってしまうえば、自殺用アイテムだ。自らが飲む、あるいはかければ、種族・耐性関係なく即死する。ユグドラシルではレベルダウン用のアイテムとして使われていた。

だがこの世界では死亡したあとの蘇生がどうなっているのか未だ判明しておらず、非常に危険なアイテムだ。

「いいたいことはわかるな、ラミエル。お前は非常に危険な役についているから、世界級アイテムは持たせられない」

「心得ております」

「よし、我々からは以上だ。何か質問は？」

「おそれながら二つほど」

「うん？なんだデミウルゴス？」

「はっ！一つは現在王都にいるセバスですが…」

「囹だ。セバスを囹にプレイヤーを引きずり出す」

「なるほど…最後の質問ですが、アルベドとパンドラ、お二方以外には少々…人払いをお願いいただけますでしょうか？」

「ふむ、すまんが下がってもらえるかな」

そういうとアルベドとパンドラ、デミウルゴス以外はししぶとといった感じではあったが、部屋から出て行った。

「それで、なんだ？」

「はっ！ラミエルなのですが、少々対策をした方が良いかと…」

「どういうことだ？まさかラミエルが既にプレイヤーに通じているとでも」

ゼルエルからの一言、それは何気ない一言だがシモベであるデミウルゴスを恐怖させるのには十分すぎた。

「い、いえ、ラミエルの世界級アイテム対策に少々愚考いたしたく…」

「へえ…何か考えがあるのか？」

「はっ、ラミエルが精神支配される前に自滅できない可能性が僅かでもあるため、最悪の

場合に我々でラミエルを討伐する部隊を作成するご許可を頂きたいのです」

「へえ…」

「ほう…」

ゼルエルやアインズとてその可能性を考えなかったわけではない。ラミエルは冒険者ユイとして弱体化した状態が多くあり、おそらくナザリックLV・100NPCのなかで最も危険な状態だろう。

故に最も世界級アイテムに支配されやすく、だが世界級アイテムを持たせられない者だった。

「わかった。その件はアルベドとパンドラ、デミウルゴスに一任する」

「アインズさんと同じ。だが私も一つ、創造主として意見しよう。部隊にシズを加えろ。シズには後で対ラミエル装備を渡すから、万が一の時は彼女を優先に動かせ」

「はっ」

「今日、君たちが集まってもらったのはこの近くに吸血鬼が現れたためだ」

エ・ランテルの冒険者組合の一室に集められたミスリル級冒険者達。彼らはこの街の

最高級冒険者であり、彼らが一同に会するという事自体が、事態の深刻さを物語っている。

事実、吸血鬼は（この世界では）強力なモンスターであり、中には国さえも滅ぼす『国墮とし』なる吸血鬼もいるとか。

「ただの吸血鬼ならば白金の者でも何とかなるのだが今回はちがう。その吸血鬼は第三位階魔法を使用したのだ」

「第三位階?!」

吸血鬼自体の強さは白金級プラチナ冒険者でもなんとかなるレベルであるが、魔法を使えるともなれば話は違う。しかもそれが第三位階ならば、ミスリルやオリハルコンでも文句無しの強敵だ。

これは危険と気を引き締める冒険者達。そこで漆黒の戦士が口を開いた。

「それは本当か」

「ああ、目撃者の野伏によると仲間の死体で《アニメイト・デッド／死体操作》を行った  
そうだ」

「なるほど、その吸血鬼の特徴は?」

「ああ、銀髪で……」

（銀髪?）

漆黒の戦士ことモモンは心の中で頭を傾げる。彼が考えたのは友人の力作である某変態吸血鬼だ。

まさかと思いつつも話を聞くと、見事彼女の特徴と合致するではないか。

(まさか…)

そう思い、《伝言》を発動させる。

〔ゼルエルさん…〕

〔なんだい、モモンガさん?〕

〔昨日の夜、シャルティア、何してた?〕

〔昨日っていつたら、野盗を殺して…ああ!〕

〔気づきましたか〕

〔ブレイン、忘れてた!〕

〔ちがう! 冒険者について!〕

〔あ…〕

結局、その吸血鬼はシャルティアだということが判明し、さすがにこのまま放置とはいかないの、モモンが吸血鬼討伐の依頼を受けた。



「で、こいつらは？」

「死にたがりの愚か者です」

ゼルエルとモモンことアインズの目の前には、樹の根に拘束され、身動きがとれずにいた者たち…の死体があつた。

「あつという間だつたな。これでミスリルなんだから程度が知れるつてもんだな」

「全く…人の忠告は聞いておくもんですよね」

モモンが手柄を挙げることをよしとしない冒険者がチームを率いてやって来たのだが、あつけなくマーレの手にかかった。

「これが森の賢王ですか…かわいいですね」

「えっ」

そしてモモンガとゼルエルの価値観の違いがあきらかにもなった。

「で、どうすんの?」

「とりあえず、このあたり一帯で激しい戦闘があつたようにしなければいけませんね」  
彼らが来たのは昨夜、漆黒聖典と小競り合いを繰り広げた場所。

ここで冒険者モモンの仕事として課せられた『吸血鬼の討伐』を偽装し、更なる名声の獲得とシヤルティアの存在を隠蔽する必要がある。

「あ、そうだ。ゼルエルさんと模擬戦をやらればいい感じになるかもしれませんね」  
「なるほど…：いつちよやりますか!」

この後、ナザリックでは『アインズ様とゼルエル様の模擬戦上映会』なるものが開催され、一時、ナザリックの警備が手薄になるほど盛り上がったとか…

二人が決めた模擬戦のルールは大まかに、

- ・ アウラが警備している範囲から出ず、攻撃もそれに留めること
- ・ 課金アイテムはなし。世界級アイテムの所持は認めるが、使用は厳禁（ギルド武器もふくむ）

・ 制限時間は5分間。アインズのHPが全体の1割を下回ったら、アインズの負け。  
ゼルエルのコアシールドが破壊されたらゼルエルの負け

と、こんな感じだ。

「勝つたらどうします?」

「うーん、秘密を一つ打ち明けるってのはどうですか?」

「いいんじゃないかな（イケボ）」

かくして始まった模擬戦。開戦の火蓋が切つて落とされた。

ドオオオン!!

それとほぼ同時に辺りに響く爆発音。爆心地はアインズのすぐ隣であり、さつきまでアインズが立っていた場所でもあった。

「やっぱ当たらんか」

「あんなもの当たったら骨も残りませんよ」

「んじゃあ、当てたら私の勝ちだな」

言うが早い、ゼルエルは得意の破壊光線を乱発する。超位魔法にも匹敵する一撃がアインズを襲うが、彼はこれを《飛行》で回避し、着実に間合いを詰めていく。

そしてゼルエルとの距離が10mほどになった時、魔法を放つ。

「《心臓掌握》!」

「くっ…」

即死は回避できたが追加効果によって破壊光線が止む。そこを狙いアインズは様々な補助魔法を駆使し、一気に間合いを詰める。

本来、魔法詠唱者であるアインズは一定の距離を取りながら、魔法攻撃をするのが定石だ。

だが、ゼルエルの異名は『最強の拒絶タイプ』。いくらアインズが魔法職LV. 100でも彼のA・Tフィールドを突き破るなど不可能に近い。

さらに、ゼルエルの破壊光線はその特異なスキルから魔法とも物理ともとれない攻撃である。検証の結果、防御値は（物理防御＋魔法防御）を3で割った値であることがわかった。つまり、魔法防御が高いアインズでもくれば無事ではないダメージを負う。

「《現断／リアリテイ・スラッシュ》！」

「甘っー！」

至近距離で放たれた魔法はゼルエルの最低限度のA・Tフィールドで無力化される。「まだまだあ!!」

アインズは第8位階以上の魔法を連発していく。すべてが高威力の魔法だがそのすべてがA・Tフィールドで無力化される。アインズも馬鹿ではない。直線上に撃たず、ゼルエルの周囲を回りながら撃っている。さらに攻撃魔法にあわせてデバフ魔法も撃ち込んでいる。それをすべて防ぎつつ、A・Tフィールドの枚数を節約しているのはさ

すがとしか言いようが無い。

「ほい」

「のわー!」

アインズの動きが止まる。アインズが移動しようとしていた先にはA・Tフィールドが1枚だけ展開されていた。

本来、プレイヤーの体当たりにはダメージは一切ない。特殊なスキルでも持つていなければ、体当たりはただの行動の一つだ。

対してA・Tフィールドは何らかの害ある攻撃ならば無敵の防御力を誇るが、無害な干渉にはなんの効果も無い。

だが、ここ、異世界ではわずかにこのシステムが変えられていた。

体当たりはダメージこそ無いが、害ある行動としてA・Tフィールドで止められる。つまりこの状況ならば…

「チェックだ」

一瞬、動きが止まる。しかしゼルエルにとってその一瞬は光線を放つのに十分な時間。

光線は何の干渉や妨害無く、アインズに直撃する。

超位魔法に勝るとも劣らない攻撃力とエフェクトが周囲を覆った。